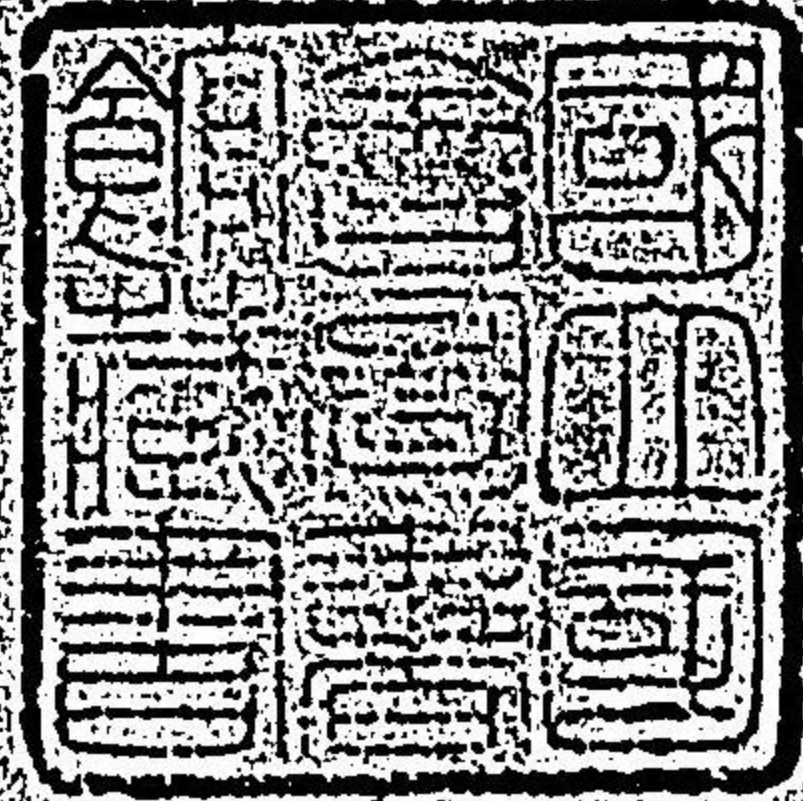


(516885)

蜀山人全集
卷二



9185
0846
8540

918.5
0846



261240

新百家説林

蜀山人全集 卷二

目次

春夏帖	一頁
かくれ里の記	一頁
四方のあか	四頁
四方の留粕	四頁
杏園詩集	七八頁
蜀山文稿	一〇五頁
寐惚先生文集	一二二頁
賣飴土平傳	一三二頁

新百家説林 目次

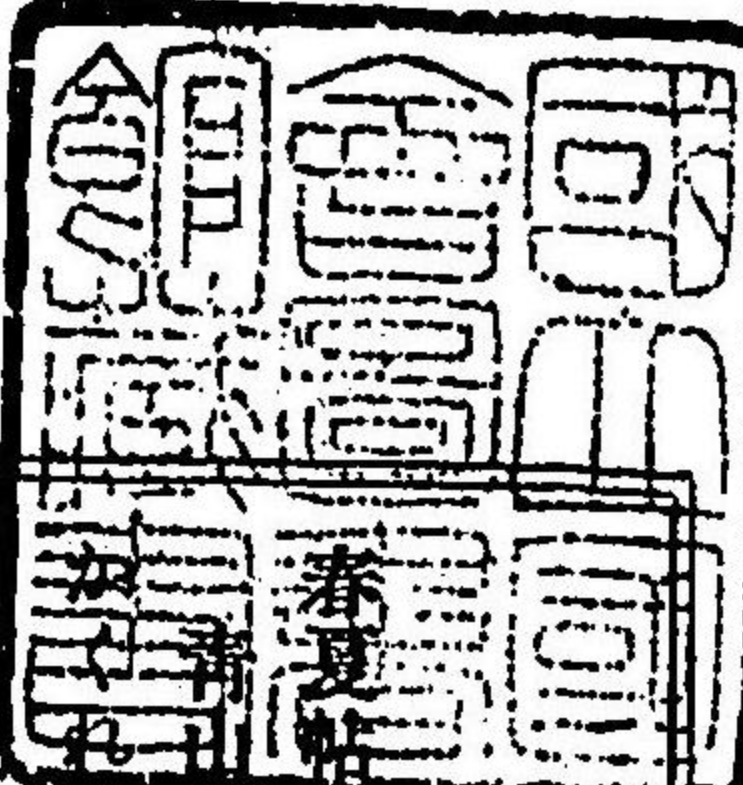
檀那山人藝舍集	一四〇頁
二大家風雅	一五〇頁
めてた百首夷歌	一五七頁
蜀山百首	一六六頁
狂歌百人一首	一七二頁
千とせの門	一八〇頁
巴人集	二〇六頁
巴人集拾遺	二六〇頁
千紅萬紫	二七七頁
萬紫千紅	二九七頁
蜀山集	三三〇頁
○	
宛丘子傳	三二六頁

おしてるの記	三三一頁
科場窓稿	三四六頁
寛政御用留	三六六頁
尺牘	三八三頁
甲驛新話	四八三頁
粹町甲閨	五〇〇頁
江戸花海老	五一三頁
通詩選笑知	五二二頁
李不盡通詩選	五四二頁
狂詩諺解	五五〇頁
道中粹語錄	五六三頁
和漢同詠道行	五七三頁
春笑一刻	五八三頁

鯛の味噌津……………五九二頁

鶯笛……………六〇二頁

阿姑麻傳……………六一二頁



解題

寫本 一卷
 堂主人の囑に應じて認めたる自筆の帖なり。
 春夏帖
 里の記 天保七年 一卷
 柳橋より船にて北廓に遊びたる時の記を狂文もて綴りたるなり。
 よものあか 文化五年 二卷
 序跋賛賦其他の文章を輯録せり。
 四方の留箱 文政二年 二卷
 よものあかの續篇として見るべし。
 杏園詩集 文政二年 二卷
 詩文集なり、後年蜀山人詩集として世に刊行せらる。
 蜀山文稿 寫本 一卷
 詩文集なり。
 寐惚先生文集 明和四年 二卷
 狂詩集なり。
 賣飴士平傳 明和六年 一卷
 賣飴士平が傳を記したるものにて、附録として伊

庭竹坡の阿仙阿藤優劣辨を添ふ。
 檀那山人藝舍集 天明四年 一卷
 狂詩集なり。
 二大家風雅 寛政二年 一卷
 銅脈先生と贈答の狂詩集なり。
 めてた百首夷歌 天明三年 一卷
 目出度きもの、狂歌百首を輯む。
 蜀山百首 文化十五年 一卷
 春夏秋冬及び雜を別ちて自ら會心の作百首を輯む、此一帖は吾家狂歌の髓也其他一時漫興宜屬皮云々と自ら稱せり。
 狂歌百人一首 天保十四年 一卷
 小倉百人一首を摸したる狂歌集なり。
 千とせの門 弘化四年 二卷
 狂歌狂詩文章等を輯む。京都にて出版す。
 巴人集 寫本 一卷
 雜集なり、天明三年正月筆を起し日次を逐ふて其作品を記せるものにて、座右の作品日記なるべけれど、後半に至りては順序混雜せり、天明四年の自序あり。

巴人集拾遺

寫本

一卷

巴人集に漏れたる雜集なり。

千紅萬紫

文化十四年

一卷

雜集なり。

萬紫千紅

文化十五年

一卷

千紅萬紫の續篇なり。

蜀山集

寫本

一卷

雜集なり、文政六年の自序あり。

宛丘子傳

寫本

一卷

都下青山に住せる宛丘子の傳を五體の文章をもて記したるもの、天明十一年の奥書あり。

おしての記

寫本

一卷

大阪在勤中に於ける金銀の出納吏員の進退其他雜事を記せる諸扣帳なり。

科場窓稿

寫本

一卷

寛政六年聖堂學問所に於て、試業を受けたる時の雜事を記す。

寛政御用留

寫本

一卷

寛政九年六月より十一月に至る公用の日記なり。

尺牘

第一 享和元年三月より同四月に至るの門大坂表より江戸へ送れる書簡なり。

第二 文化元年九月より同二年十一月に至るの間長崎より江戸へ送れる書簡なり。

第三 長崎より江戸へ送れる書簡にして年次不詳のものなり。

甲驛新話 安永四年 一卷

山手馬鹿人の名を以て著したる洒落本にして四谷の遊所を記す。

粹町甲園 年次不明安永年間カ 一卷

同名を以て著したる洒落本にして同遊所を記す。

江戸花海老 天明二年 一卷

俳優市川海老藏の技藝を賞へ龍宮より賞美の狂歌を贈るの有様を記す。

通詩選笑知 天明七年 一卷

狂詩に自ら註を施せるものにて洒落本の部に屬するものなり。

李不盡通詩選 天明四年 一卷

通詩選笑知に同じ。

狂詩諷解

天明七年

一卷

通詩選笑知に同じ。

道中粹語録

年次不明寛政年間カ 一卷

一名を變通輕井茶話と云ふ信州輕井澤の旅舎賣女の有様を記す。

和漢同詠道行

年次不明

一卷

洒落本にして後に魂膽心氣樓と改題して刊行す。

春笑一刻

安永七年

一卷

千金子の名を以て著したる咄本なり。

鯛の味噌津

安永八年

一卷

新場老次の名を以て著したる咄本にして自筆其儘を上木せり。

鶯笛

年代未詳

一卷

咄本なり自筆の儘を上木す。

阿姑麻傳

安永六年

一卷

白木屋お駒が事を記す。

解題終

ਅੰਗ ਸ੍ਰੀ ੬

ੴ ਸਤਿਗੁਰ ਪ੍ਰਸਾਦਿ ॥ ੧ ॥ ਅੰਗ ਸ੍ਰੀ ੬
ਗੁਰ ਗੋਬਿੰਦ ਸਿੰਘ ਜੀ ਕੀ ਭਾਉ
ਸਾਧ ਸਾਧੀ ਸਾਧਿਕਾ ਸਾਧਿਕੀ
ਸਿਖ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ
ਸਿਖ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ
ਸਿਖ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ
ਸਿਖ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ
ਸਿਖ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ
ਸਿਖ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ ਸਿਖੀ

--	--

Handwritten text in a cursive script, organized into ten vertical columns. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect of a larger language.

Handwritten text in a cursive script, organized into ten vertical columns. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect of a larger language.

Handwritten text in a cursive script, organized into two columns of ten lines each. The lines are contained within decorative, rounded rectangular frames. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect of a larger language.

Handwritten line 1 of the right column.

Handwritten line 2 of the right column.

Handwritten line 3 of the right column.

Handwritten line 4 of the right column.

Handwritten line 5 of the right column.

Handwritten line 6 of the right column.

Handwritten line 7 of the right column.

Handwritten line 8 of the right column.

Handwritten line 9 of the right column.

Handwritten line 10 of the right column.

Handwritten line 1 of the left column.

Handwritten line 2 of the left column.

Handwritten line 3 of the left column.

Handwritten line 4 of the left column.

Handwritten line 5 of the left column.

Handwritten line 6 of the left column.

مَنْ يَتَّقِ اللَّهَ يَجْعَلْ لَهُ مَخْرَجًا

وَيَرْزُقْهُ مِنْ حَيْثُ لَا يَحْتَسِبُ

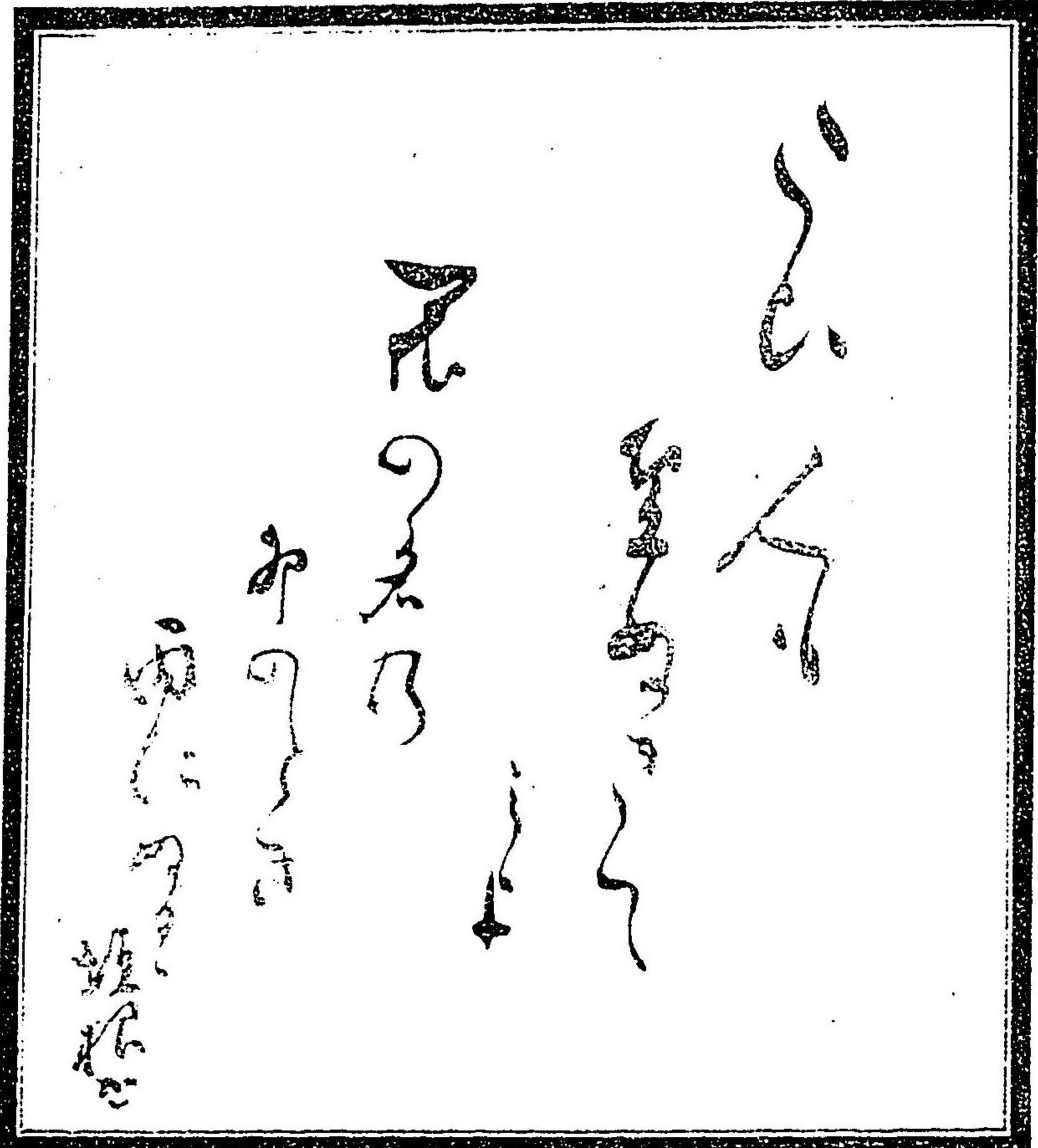
وَمَا يُلَاقِهِ فِي الْحَسَابِ

وَمَنْ يَشَأْ يُسْخَرْ لَهُ

مِمَّا يَشَاءُ بِقَوْلِ كَاتِبٍ

مَنْ يَتَّقِ اللَّهَ يَجْعَلْ لَهُ مَخْرَجًا
وَيَرْزُقْهُ مِنْ حَيْثُ لَا يَحْتَسِبُ
وَمَا يُلَاقِهِ فِي الْحَسَابِ
وَمَنْ يَشَأْ يُسْخَرْ لَهُ
مِمَّا يَشَاءُ بِقَوْلِ كَاتِبٍ

مَنْ يَتَّقِ اللَّهَ يَجْعَلْ لَهُ مَخْرَجًا
وَيَرْزُقْهُ مِنْ حَيْثُ لَا يَحْتَسِبُ
وَمَا يُلَاقِهِ فِي الْحَسَابِ
وَمَنْ يَشَأْ يُسْخَرْ لَهُ
مِمَّا يَشَاءُ بِقَوْلِ كَاتِبٍ



春夏帖

春の巻

談川樓おとし咄會の序

はなしのよりに來る事久し、ちはやふる神代には、あるふみにいはくくゝのむかしはなしあり、人の代となりてくさくゝの咄多かる中に、源氏の雨夜の品さため、二の町の文の色はなしも有馬頭か赫くひの下界藏に落をとられ、羅生門の化物はなしに、金札をもつてかけ出せしは、はなしくはふの始なるべし。おうらうらのものかたりは、尺素往來にもみえて、桃太郎かむかしを思ひ、猿のいきもほしたるは、梵網經にもとつきて、龍宮世界のはなしかめなるべし、中比みやこに露の五郎兵衛ありて、清談の玉章をたれ、吾妻に鹿の武左衛門出て、巻筆の毛にもかきつくしかたし。

安永の頃、木室卯雲の鹿子もち、小松百龜の聞上手など、舌のまはれる油揚本、小本におとしはなしとなりしも、いつしか千とせの巢守りとなりて、つるに還魂紙のすきかへしと、こゝに立川談州樓鳥亭焉

春夏帖

馬、桃栗三年柿八年の功をつみ、野見てうなごんすみかねの矩をこえず、いにし天明の比、芝居にあらぬ牛島のむさしや權三か座敷をかりて、寶合の席料の、ち又三百文、おとしはなしをはちめしよりこのかた、その流をくみ、その波をあぐる輩ちまたにみち、門をわかつてり、これを中興の開山として、玉くしけふたつの國のはしのもと、藻にうつもれぬたま柏屋のたかとのに、としくゝの初筵をひらく、大江戸の四里四方、よも山のはなしつきせず、太平樂のひる日長々と、つとはざらめやま

春雨宴柳花苑狂歌并序

柳花苑は躰壽館の南にあり、かの千草萬木をなめて、五味八珍をあちはひ給ひし神の御徳にあやかり、こゝに高との、出居をまうけて、伊豆喜とよへる旗亭あり、春は青柳のかけ鯛に、なひくみとりのみたれさけをくみ、夏は嵯康か柳冷にかつをのさしみの庖丁をきたひ、秋は一葉のちりれんげにはつだけの薄くすをすくひ、冬籠の茶碗もりに鳥の子のナツナも、雪おれのなき枝をかさねてまとひするもの日々にあたえず、まつ落付の吸物に赤みそをあけて、上方の白

をわらひ、すまし汁の鹽梅をちよつと一口すいせん
しのり地になりてのみ過す、瓊筵をひらきて花にう
かれ、羽觴を飛して月の夜も雨のふる日も一しほゆ
かした、桃李園の序の弊色をつかひて、柳花苑の記
とするもおかし、今日こゝにあつまりて、酒をのむ
ものはたそ

文蝶北馬の繪にたくみなる人

伊勢傳福甚の興にのる人

詩は五山役者は杜若と世にきこえたる

するか町の名妓になんありける

春雨にぬるゝとかつはしりながら

おりたつ脛のしろきをそみる

雨ふれば柳のいと長くと

長さかよりもかつはうれしき

蜀山人

○ 倡門雛子挿松筠

猪干靚粧羊日新

雨個黃鸝纒學語

似迎楊柳折來人

あら玉のそら青みたるあけほのは

つねきくとりも若水の音

○ 生酔の禮者をみれば大道を

よこ筋遠に春は來にけり

梅發麴家室

柳李花屋軒

○ 何處御年玉

新開扇子箱

下敷長尉斗

上敷寶珠光

をれをみて又うたをよみちらすかな

梅の思はん事もはつかし

古來云此梅

能似武夫妻

筑紫天神詠

奥州宗任詞

龍横葛飾武

牛向杉田運

縁日運此處

樂師兩大師

檀那山人

○ 一めんの花は碁盤の上野山

くろもん前にかゝるしら雲

風のいるすきまもみえぬ山さくら

さくらから山か山がさくらか

梅如加賀紋

松似仙臺鎗

應是登城節 晴天日出光

慈悲心も佛法僧も一聲の

ほうほけきやうにしくものぞなき

まないたのこくちにはれる青紙の

いろも若菜に及ものかは

元日草先發 一年謀不空

此花稱福壽 官祿在其中

子日する野邊に小松の大臣は

いまま賢者のためしにそひく

老たるも若きも心花なれや

ふるうめやしき新梅やしき

ところふしありてなまよみの

甲州いとに似たる青柳

大唐空吉野 日本有花王

枝掛龍頭重 春牽虎尾長

入相鐘未響 飛鳥酒無量

生醉顯山寺 隨風散四方

ぞら雲の上野の花をみてしより

けふもあすかに日くらしのさと

遠乗の馬二三疋すみた川

つかれたりとも花につなくな

いたつらにすくる月日もおもしろし

花みてばかりくらされぬ世は

舞ひばり籠のとり屋か手に落て

かふねもたたく上にそされし

さく花のかへる根付の琥珀にも

なりてこかけのちりをすはばや

山吹のはななみふくろ紙入に

みのひとつたになきこそかなしき

山吹の口にしめしやもらんとて

おたままやくしも井出の玉川

かりかねの交代なれば燕も

野におり來てやきさらさの比

一入大門口 栽櫻花若人

中町多茶屋 七軒七福神

○ 題烏文齋七福翁看北里花圖

春の夜のたゝ一時も千金の

月や小判のはしりしてみん

手ならひの稽古に上るいなり山

いねのいの字や書はしむらん
 可憐出替涙 胡葱盃一把
 冉冉奉公爲 誰是長年者
 たつた今もらふをはらひ扇箱
 やるせなきこそ世の要なれ
 のそかるゝ乞食の家も森田屋か
 ほとこそすものか梅の花笠
 品川羽引洲崎岸 日暮里通飛鳥山
 わか戀は潮干にみえぬまたくらの
 人こそしらねかわくまもなし
 春雨に火の見のたいこ苦むして
 人おとろかぬ御代そめてたき
 折梅逢驛使
 馬盃にいけたる花は道中の
 はいま〜と追ひし一枝
 文このむ木を右にしてやり梅を
 ひたりにかさす御代そかしこき
 同勢の桃も櫻もつゝくべし
 一番やりの梅の魁
 紙ひなの加田粟島のいにしへは

舟月もなく玉山もなし
 むさしの、原舟月にすへらきの
 みやことりかも玉山の雛
 十雨五風春暮天 詩 佛
 班荆無處不開筵 南 畝
 對花不領花須笑 佛 畝
 一止干戈二百年
 東山花下聯句
 ○
 この上野榮耀はあらし兩大師
 二日つゝけて花をみしかな
 雨風の音なし川のひまにみよ
 はなのさかりはけふあすか山
 うれしさをつゝむにあまる袖か岡
 花のさかりもそろふゆきたけ
 來福寺花
 春風のふくきたるべき寺そとは
 かとの内なる花みてそしる
 大井西光寺に醍醐櫻あり
 牛町の酪は酥となり醍醐とも

なれるさくらをみるそうれしき
 拔松拔竹御門前 叩齋叩菜粗板邊
 唐土鳥與日本鳥 東天未度素天天
 さのふこそすてゝんてんとはやせしか
 へん〜草となりにけるかな
 三月盡
 三月は無盡にしてもくれよかし
 花にこゝろをたれもかけ金
 里のあめ
 くるわのさくらはやちりて、鶯のねもなんあけの、
 みそかにちかき春のあめ合柳のいと引まゆを、ほ
 んに思へはいたつらに、すくる月日の悪性は、けふ
 もあすかに日くらしの、花みてくらすすひとさかり。
 ○
 本院のおとゝの氏の藤のはな
 など菅原の廣前にさく
 杜若むかしはいせの物かたり
 いまはめてたくひらく三河記
 十日つゝ春と夏とに咲わけし
 花やとちらか色ふかみ草

藤、杜若、牡丹のみつは、春夏の堺目わかりかたけ
 れは末にするす
 文化ときこゆるとしも十あまり三つかさなれる水
 無月のころ、青山堂のもとめによりて
 蜀山人

春夏帖

夏の巻

初鯉の賛

わか朝にてはかつをとよび、もろこしにては松魚といふ、東醫寶鑑北狄西戎、四維八紘天地けん好かつれく草に、大根おろしのおろしかけ、先をからしにかゝれても、延喜式には供御となり、萬葉集には水の江の浦島か子か、かつをつり鯛つりかねて、七日はをろか七十五日も生のふる、三千本のはつものを、たれか一本かはさらめやは

かまくらの海よりいてしはつかつを

みなむさしのはらにこそいれ

初鯉銘

鯉風をふくみて魚木にのぼり、劔さやを出て見地をはしる、あがり兜の金箔は延喜式の儉約をつたへ、あさかの沼の花かつみは、中將殿のうたまくらにして、比はさつきの初蛾、何のあやめもあさやかに、月のぼりのごとく、日のぼりの如く、終南山の進士の

ごとく、柏もちのはのしけきかごとく、菖蒲かたなのはかけす崩れず、猶竿竹の直なる道をたて、つけたる乳をはつかしむる事なかれ。

初瓜頌

二月中旬の青籠は、唐詩にあらはれ、山城のこまのわたりと、和歌にもよめり、曲禮は六かい半にむき、見手柏はふたえにつむ、かの青門の五色にまされるさかりの花の江戸往來、當所の新田鳴子瓜は、四谷馬の履をいれず、茄子のならぬ蔓をもとめて、目に見えぬ鬼をしてやる、うまい哉甜瓜、其仁にまか

んや

わらはへもくわまくわうりめつらしと

両手にもちてころひうつなり

一聲時鳥卯時雨

獨立釋尊花見堂

みほとけに産湯かけたかほと、きす

天上天下たつた一聲

青葉こそ花にもまされ冬までは

ちるきつかひもなしと思へば

時しらぬ山とはいへとさくや姫

かのこまたらの裾は當を

松本錦升かほくに度くの仁木古せのはつか

つをといふをみて

見るたひに仁木彈正はつかつを

いつも新せのこゝちこそすれ

かきものゝやまほと、きす催促の

八千八聲かけたかとなく

これみつがたちながらくふそぼのいろ

はなはた黒し夕かほの花

夏晩即事

風如半開扇

月似食懸餅

忽有一星出

美看長者情

早乙女の脛のくろきに仙人も

通をうしなふ氣つかひはなし

もやくと青葉にくもる夏けしき

めくらがみてもほと、きす空

錦鯉合風魚上樹

鍾馗執劍鬼趨庭

つるき太刀さすかひなにはもろくの

悪魔をはらふ鍾馗大臣

ますらをのひく桑のゆみよもきの矢

あやめのかふとかさる六衛府

いつはりのなき世なりせは本なれの

西瓜の皮に穴はあけまし

聖堂のてつへんかけたほと、きす

なく一聲をあれきけんとう

朝露をふりこほしつはらやたつ

佛のかほも三度なてしこ

たび人も笠ぬきてみよ花の名の

卵のとき雨にぬる垣根を

けさみればいつしかよへをひりをきて

いたくねくさき床夏の花

みつまたの四季庵にほと、きすをきて

ほと、きすなくやひとふたみつ又と

きくたひことにめつら四季庵

時は今苗代水の流行に

田も市松の小紋とそなる

くれなるのあつき日影に夏の野の

露わかかへるさゆりはの花

湯上りにみしをあやめの根さしにて

下女のさつきか文の取次

さみせんの駒かたさして二上りの

舟は夕へにさん下りかも

五月雨の比四方赤良のとふらひ給ひし折から
朝ねしたりければ

梅旭女

とひ來ますよもはひるまもなき比の

ねみたれ髪て筆をとりけり

返し

入梅に旭もいまたいつみやを

あめふりはへてたつねこそすれ

二葉よりいく千代かけて神まつる

卯月のけふにあふひ草かも

あんとうの朱をうはへるなまなれの

西瓜にたれもはらをたちけり

砂村のゑにしの瓜となる子瓜

ともにもらさぬ水くわしの中

質くらにかけし切赤の蟲ほしは

なかれもあへぬ紅葉なりけり
さつきいつかの夜八百善のもとにて

弓はりの月もさしそふやほ善に

いつかの酒をいつかくむへき

夏月

てる月を日かと思ふくればとり

あやしき牛のあへくはかりに

みしか夜にくらへて長きつるなれば

ねふたさうなる晝顔の花

ゆふへみし川の花火にくらふれば

さかり久しき庭の朝顔

流星の玉やくの壁はかり

なと鍵屋とはいはぬ情なし

面白やうつかひよりも金つかひ

この川波にはつと花火は

土用芝居士俵中 秀佳芝翫競雌雄

放駒毛似浪花草 濡髪柳梳江戸風

いか賀やと人々思ひつく茶碗

われるほといる人のやまと屋

浪花江にはなれし駒の戻駕籠

いまそのりこむ堺てう吉

夜責蚤蚊晝糞蠅 更無夕立雨雲弁

唯終湯殿居風呂

無正添薪然且蒸

駒込富士

駒込にうる麥わらの蛇のみちは

へびのしるへき鯨繩手ぞ

傘鉾のおほはぬ町もなかりけり

あつき日よしの神のみな月

おりくは時あかりして傘を

たゝめは又もひらく五月雨

天王の夜みやのひかりやわらけく

御紋の瓜もちりにまじはる

玳瑁の櫛いなた姫三三人

ゆかたのまゝでいつも八重垣

天明の比お玉か池にてはしめて瀬川路考にあ

ひて

露むすふお玉か池であふ人ば

外にたくひもなつ菊のはな

夏萩

心たにちのわのことく丸からは

くゝらすととも神やまもらん

水無月のつこもりはらへのかれんと

芽の輪のうちをぬけつくゝりつ

清風一自掃頭上 四百餘州器粟花

中華とはいへとも花はなつのよの

ひとよにかはるけし坊主かな

○

身はひとつ、思ひはふたつみつまたの、なかれによ

とむうたかたの、とけてむすんで、むすんでとけて、

しめてぬるよのかりまくら、うは着をぬいてまたし

めの、あかつき比の雲の帯、なくや中洲のほとゝき

す

これはにるよし原のうかれめ、みつまたの江の中

洲といふところに、かりにぬしとぎのはうたとな

ん。

春夏帖夏の巻終

かくれ里の記

いづれの世いつれの所にかありけん、七の福神まじくけり、中にも大黒屋ときこゑしは、八雲たつ出雲の國より、見勢を出して、からのやまとのものはさらなり、よろつ心のまゝに、たくはへたり、西宮の夷三郎とは、遊びかたきのやうにて、春の日のもとに、かへる事を忘れ、秋の月の前に、うかれありき玉へり、又福六ときこゑし人の弟に、壽星といへる老人ありて、つねにひさごつふりをうちふりつ、このふたつの家に入出して、なれむつび玉ひしかばいづくの遊びにも、つきまたかはざる事なく、これなん、世にいはゆる神といふことのもとなるべき、比は福徳三年春の比、やよひの空のうららかなるに、かけ鯛の糸による柳のはしのもと、鶴屋といへる舟やどりより、片葉のあしの舟よそひして、名におまざるひなは、箱にはあらで、玉くしげふた國の名たゝるはしをも、あとにみなしつ、ゆく駒とめ

かくれ里の記

橋の駒もと、めず、みくら町のたちつゝきたる、大倉のよねはむ鼠のうはさは、黒米のさしあいあれは、水門のあたりの蜷の味、よろしなどいひまぎらして、常山の蛇のかしらをうてば、尾はたるといひけん、松のすがたもおもしろく、岸のむかひに椎の木、ひろごりたるは、たのむかげある松によれるなるべし、けふしも遊山ふねあまたある中に、うるまの琴かきさしつ、わざをさがこわねをまねぶものあり、壽星はうかれて去ら波の、こすや親方首尾の松シヒの木やしき聲が高塀、何がしのわざをきの聲をうつして、うたひ出たるに、人々どよみてわらふ、あはれ辨財天をも、ぐしたらましかば、よつの緒の老らへはうき世の人のみつをにも、たちまさりなんをといふ、ゆきく〜てみうまやかしのわたりにいたる、こゝはわたし舟もて西よりひがしに、ひかしより西にと、ゆきかふ所なれば、人にしられんもつゝ、ましとて、大黒は頭巾まぶかに、夷はるほし引入てゆくを、壽星はたいうつぶけに顔かくし玉ふも、長枕の心地せられてをかし、いにしへ駒かけ堂ときこゑしは、今の駒形堂にして、鳥がなくあつまばし

とよへるは、大川橋をいふなるべし、花川戸のわたりにて、壽星何所春霞起、花川戸半開、風梳助六柳、波洗意休昔とうちすし玉へり、恵比壽釣上し赤めとゝもに酒くまん

いはくす舟のあしたぬまで

大黒屋のぬしは小槌を腰にさへて、

むらさきの頭巾もかすむ筑波かな、

此はちまきは、過し比ともいはまほし、ゆかり法師の布袋和向は、のびあからねば見えぬてふ、三圍の鳥居のかたはらなる、牛頭山のみ寺におはすれど、けふはついであしければ、たちもよらず、かの「まつちまづんで、木末のりこむ今戸はし」と、うたひし土手ぶしも、今戸の今みること、さんやばりのほりするものは、むかしも今もかはらざりけりな、ともに舟より下りて堤づたひにかちよりゆく、袖すり稻荷の袖ふかし手ふりに引かへて、今は枕橋もふたつならば、孔雀長屋の名のみことくしう、見かへり柳のなみたてるに、二もと柳のむかしをまのび、人目つゝみもつきなんとす、こゝにきびしき掟の札たて

り、境にいるには、禁をとふならひなれば、たちとしまりてよみて見るに、くすしの外は馬車にのる事をゆるさず、又ものゝふの手にならすはこのたぐいは、門の内になれぞとかけるをみるにも、よくぞ鞍馬の多門殿をいざなはざりしと、かたみに目くばせして笑ふ、大黒屋の相しれりけるやどりに入て、松ともさせてかなたこなた、かいまみつゝありく、こゝに櫻を植る事は、家々の鉢の木を門邊に出して、よなく雨露をゆたかに、たもつといへる年の比より、市のつかさに聞えあげて、今はかくうつし植る事となんきこゑし、げによし野の山もうごきいで、すまの若木の花のなみ、こゝもとにうちよするかとうたかはる、ゆきかふあそびとものさまをみるに、綾羅のたもとをひるがへし、錦緞のもすそを曳て、花か人かともたどらまほし、人々興じて見てのみや人にかたらんとて、とある高どのにのぼりてあそびをめす、盃あまたたびめぐり、壽星はあまりに酔しれて、かたへにありあふうすものゝ帯を鉢巻して躍出玉ひしも、鼎かぶりの心地せられて、かの助六のゆかりの色には似もつかず、日もくれ竹の町の子、

ひとつはつゝみのほとりの亥の時ときくにも、かへるさのほども思はれて、ゆめばかりなる手枕に朧月夜の三の口、あかつきの雲とやなり、雨とやなり玉ひけん、よくもまらさかし、千代に一たび、すみだ川のながれたえせず、つくば山のこのもかのもに、おひしがりゆくかくれ里の、鼠のはつかにもかゝるよしなしことを、そこはかとなくいひいつべき事は、大あなむちのあなかしこと、筆をもとめなまし、

天明とあらたまりぬるはじめのとし彌生の比小車のうしこみの里に筆をとるものはたぞ

四方赤良

四方のあか

このふみや、四方の赤の一本氣にして、かりにも水くさき駄酒をまじへず、もとより巴人亭の本店にのみて、かつて呑口をだにひらかざりしを、をのれひそかにこれをうれへて、こたみ琉球のかいみをひらき、樽底のおくをさがし、徳利のかげたるをおぎなひ、四斗樽のもれたるをあつめて、まろしの杉のはん木にのほせぬ、もしき酒の口功者あらば、きたりて名酒の味をなめよ、暖簾にまろき扇巴、これを居酒屋の門にかけて、一字の損益をまつといふ、

宿屋飯盛まるす

卷之上目録

達摩賛
遊女賛
車どめ
雪見記
西行法師をとふらふことば
山手閑居記
遊女高尾朱椀記
土偶人畫賛
鯉魚賛
又
兒戲賦
庭湖石記
猫賦
童のために乳のなきをなげくことば
鼠をせむることば
なつくさ
橋庵記

四方のあか

鉤匙橋記

背面達摩賛
雪女賛
芭蕉菴桃青翁賛
から誓文
壺師善兵衛衣奉加募縁疏
月見説付狂歌感狀
詩歌兄弟對面のつらね
大根太木十五番狂歌合判詞奥書
肖柏賛
日くらしのなき
冬日逍遙亭詠夷歌序
竹本政太夫碑
木兔引賛
卷之下目録
向島賦并詩歌
早稻田太神宮法樂の文并歌
黒つくしまばらくのつらね
桐つくしきり口上

をはぎの露井歌

百番月歌合序
春日詠寄七福神祝夷歌序
谷水音か新宅をことふくことは
鬼念佛畫賛
富士山繪賛
酒中花のちらし
月見のことは
おなじく誹諧文風俗文選の體にならふ
巴人亭記
里春柳五株
春色花鳥媒
春日龜樓詠初芝居狂歌序
春日泉亭詠雜煮餅狂歌序
栗花集序
茶杓記
隣家におくれる詞
春日唐衣橋洲初會狂歌序
初雜賦

初轍銘

初瓜頌

初鮭傳

初霜解

臍穴寺禪師に贈る詞

吉田李園翁を祝することは

邊越方人をいためることは

百喜齋記

春夜伯樂宴集序

四方のあか上

達摩登

拈華微笑の床花は、正法眼藏の帶をとかせ、教外別傳の正傳節は、文字大夫が流をたてず、蘆の一葉の猪牙に乗て、九年面壁の居つゝけとは、汝が尻のくされ縁歟、金がふんだんだるまなる歟、からく喝、

九年酒のつまり肴の座禪豆

外に本来一物もなし

遊女賛

まことはうその皮、うそはまことのほね、まよへばうそもまこととなり、さそればまこともうそとなる、うそとまことの中の町、まよふもよし原、さとももよし原

けいせいのみまこともうそも有磯海の

濱の眞砂の客の數々

車とめ

たれこめて、小春の行衛もまらぬまに、まぢし櫻の花をかざれる、御影講も程すぎぬらん、けふなん霜

月ついたちとかや、雪は跡にふりぬ、軒のつらゝのつらみせとて、世にある人のうかれ出る日なめりと思ひおこして、やをら枕をもたげ、夜のものすべらし、西おもてのさうし、二三寸ばかりおしやりたれば、さなきだに、秋の野らと、あれにしまゝの、人めも草もかれはてたるに、ふりつもの木々の落葉は、夢にだも帯といへるものをみす、南天のみのふたふさみふさ、ひえとりのついはみあませるもおかし、あたりちかき家ありの、むねのいたまのいたみて、ところ／＼筵やうのものうちきせたるに、晝げの煙たちのぼりて、さながら苦船のけしきをうつせるも興あり、なまなかさきのあるじの物すきしをける、ぬりだれめきたるものひとつもちて、去年なんすりくはへたる用心士の、無用心にひぢりこにすさこねあはせたる、栗柄野の柑子にもはぢぬべし、からも、こそくしの家にもあなりときけば、これのみはかせめきたりなど、ほこらひみるに、長き繩を木末にかけて、かたへの柱にゆひつけたるは、あなあさまし、ふたつになれるわらはの、まといぬれたる露のまめしのかけところとは、すべて冬がれの庭の景色、またれ

桃の玄たれんとするに、葉なれば木ぶりあしく、
柀のつめだちて、やがて節分の用にたゝんと、お
こめきたるもにくし、牡丹の花は根にかへりしやう、
春のまゝにてたよりもなく、まがきの菊も玄ぼみつ
きて、菊煙草のよきむしり比なり、松ふくり朝霜に
ちゝみあかり、竹藪夕風にはさけたり、三徑おれに
つきたるなどかけるも、僮僕の類あれば、かゝる不
掃除のきははあらじ、たかかみすてしは紙の、
くすぬの子のるもいはぬものまりをける、いとむ
さき中にも、梅ばかりは折をたかへず、枝ぶりまや
んと、蒼り、しくび出せる、けに一陽の動く所と、
うちうめきつ、猶も空み出んとするに、窓につるせ
る手習の草子の、風にふらめき、のまばにかけしか
け竿の、ふとんのかもわるくさまま、もとのごと
くさうし引たて、つるそれなりについふしぬ、
はやり風ひきこもりたる車とめ

御用の外の人は通さず

雪見のことば

わすれては夢かと思ふといひし、宮さまの御隠居
所でもなく、さの、わたりに駒とめし、半合羽の旅人

にもあらず、またたちあがりて、梁王の園で、賦と
いふ所も氣づまり、さればとて、すのこのはしに、
鉢の木のまた火も、あまりなるべし、鶴壁をきて立
出んも、加賀篋のみえ坊にひとしと、鶯毛に似たる
とんだ了簡より、ふるめかしいが王子猷が興に、十
たんばかりのりかち、剡溪の船を藤栗毛にかへ、わ
らちうつわら店の軒に、白と藍のけしきを見、む
つの花の江戸川のはたを、ぬぬのことゝもにさまよ
ひつ、お寺の茶の木にちよととまれとら誦し、
こりては思案にあたはざる、たはれ歌のつどひ所に
まどあしつ、風雅でもなく玄やれでもなく、詩と
も歌とも連誦とも、あしれぬ事をかきちらして、二
月の雪のふりそこなひを、大目に見てやる事とはな
りぬ、

いさゝらはまろめし雪と身をなして

うき世の中をころけありかん

西行法師をとふらふことば

あたら櫻のとがといひて、大木のはえぎはからをし
げなく、きりたふしたる人はたぞ、清水ながる、道
のべの、柳かげに小便したる人はたぞ、あるはえろ

かねのねこはかはねど、江口の里のめしもりに心を
とめ、あるは鳴たつ澤の鳴焼の三茄子より、一ふじ
の初夢にまさしくみへしすがたさへ、むかし今戸の
夕煙、いづちの風にやなびきけん、ねがはくばこの
狂言綺語、三文ばかりの布施ともならば、花のもと
にて春死なれし、和尚の今日まやう月めい日、一へ
んの廻向をなさんといふ事しかり、

山手閑居記

わか菴は松原とをく海ちかくと詠けん、むさし野の
廣小路にむすべる、芝のはてにもあらず、ちはや振
神田淺草のにぎやかならぬも、よしや足引の山の手
になんすめりける、春は桃園の花に迷ふ外山の霞た
ぬ日もなく、夏は江戸川の螢をみる目白の漣の音
たえず、秋は高田のかりかねに、民の貢の未進をあ
はれみ、冬は富士を根こきにして、わか鉢の木の雪
となかむ、四季折々の美景をいは、番町の道の一
筋ならず、大木戸の駒のひきもさらざるべし、古寺
の萱やぶれて、晝無盡の講を催し、神の宮居も所せ
く、夜うかれめのふしとなれり、頭にをくまも屋
敷もり、うきをみるめのうらかしやまで、たゝ何と

なくひなびたり、むべも富ける殿つくり、みつば
よつばのつるをもとめ、よきぬきたる身のほども、
いざまら壁のいちくらをうらやむともからは、此地
の住居はなりがたからん歎、さはいへ、ひとへに深
き山にかくれん坊をし、とほき海に沖釣をせんとに
はあらず、吏にして吏ならず、隠にして隠ならず、朝
野の間にのがれんとならば、いつこか此やまの手に
まかさらめやは、

窓のうちにふしのねなからなかわれは

たゝ山の手にとるとこそみれ

遊女高尾朱椀記

此器や、山谷わたりに名だゝる遊女、三浦屋のもと
何かしとかや、最上氏に従良せし時、百の椀器をつ
くりて、またしきかざりにわかちあたへしとなん、
時うつり事さりて、原富の子香玉子の家藏となり、
美人の彫管にもかへざるべし、原富はむかし、あし
引の山の手、名たかき三絃の妙手なり、
今も世に名のみ高尾の紅葉は、

朱椀朱おしき昔なりけり

土偶人畫賛

こゝろは巧畫師のごとく、畫は泥塑人のごとし、靜なる時は硯よりもかたく、動く時は筆よりもはやし、あらかねの土人形のあねさまを

みていたつらにうごくゑごゝろ

鯉魚贊

吾朝にてはかつをとよび、もろこしにては松魚といふ、東醫寶鑑北狄西戎四維は荒地けん好かつれつれ草に、大根おろしのおろしかけ、先をからしにかゝれても、延喜式には供御となり、萬葉集には水の江の浦島か子か、かつをつり鯛つりかねて、七日はをるか七十五日いきのふる、三千本のはつものを、たれか一本かはさらめや

かまくらの海より出しはつ鯉

みなむさし野のはらにこそいれ

又

人と名所はふるきをもとめ、肴と器物はあたらしきをもとむ、卯月ばかりの初かつを、皿にもりたるいきほひは、鯛もひらめも鱈も鯉も、首尾をおそれて鱗を正し、ひれふしてみへにけれ、むかし天文六年の夏、北條氏綱すなごりを小田原につらぬ、鯉おど

つて船に入る、氏綱勝負にかつをと稱す、おなしき七月十五日、上杉朝定と戦て利あり、まかしよりこのかた、諸士戦場の門出に、専ら鯉を食ひしとなん、いま太平の御代にあひて、武をわすれざる左き、ども、庖丁のきれ味をこゝろみ、からしのかけ引、大根おろし、さしみのさしもの箸とりて、酒のたゝかひ必かつうを、大に納屋の商人に利あり、兼好かさねてあぎとをたゝかば、われいけ櫓桶を洗てまたん、

兒戲賦

ひとり邵堯夫か枕を高して、わらはへの戲をみれば、こよなう心なぐさむわざなれ、年たちかへるあしたの空、松たてわたす大路に、千年の縁を手にむしりて、ちりうせぬ葉をうちちらし、やゝ春ふかき垣ねのうち、雪間の草わかやかなるに、桃の木、柿のきとよびもてゆくは、をのがふたばのをひさきもとたのものし、午まつりのつゝみは初かみなりに先たち、いかのぼりの絲遊はおとなも心ひかれたり、ほとゝぎすなくや五月のあやめうちは、幟の紋のあやめもわかず、行かふ空の天河、はしの手向のたんざくには、

草紙にあらぬか硯をあらひ、萩の上葉の風よりも、とうごまの音のかすかに、博多ごまの手にとりあへず、貝まはしのむちうつまなく、ふりつむ雪をまろばしては、けぬべき罪もむくひもなく、碎る氷の上をすべるも、世わたりのあやふきにはまさりなん、鬼ついばにおひつめられて、ひとあしかきの間近きにとらまり、かくれん房はかねてより、ふし柴部屋のすみにかゝむ、草履かくしのはなをたつねて、たよりなきところによまよひ、手拭の目かくしは、まるべなき間もあやなし、いさむ心のこまごりは、ことろくともわなき、つるくといふ名にめで、籠目くともたふ、かたしだちして、ちんがうこといひ、たゝむきをかゝげて、てんぐるまとす、竹馬は車にひかれ、鮑の貝は片足にかゝる、雲井のかりを詠ては、鴈々みつ口とよび、水にすむ蛙をうづめて、おほばご殿のみとふらひをいとむ、まげき往來のちまたに立て、大道めぐりのめくるめくるもあやうく、ふもとのちりの掃溜にのぼりて、山のぬしはおれ一人とうちすしたるもおこかまし、西どつちに方の名をまじり、履をけあげて陰晴をうらなふ、蝸牛の角

あらそひも、稚き指きりにやはらぎ、むくろげのむくつけきあそびも、あな一のいちはやきかけごとにかはれば、孟母が三たび店をかへ、墨子が絲のくりごともお萬がべにの色々にそみ、べろくの紙のむきくなるを、手習草紙大さらへにさらへて、鳥の跡の千二郎、ひさしくといめん事は、はまのきさごのつまはじきして、わらはれんもうしろめたけれど、ひいくたもれ、ひとりこちくぬるわざになん、まかはあれどひちりこのあつもの、塵の飯のまごとも、韓非子が筆にのこり、ふれく小雪の唱歌も、鳥羽院のみことばに傳はれる事のなつかしければ、いでや富貴利達のままじはりにめがこうして、孩提嬰兒のまやうに入らんとこそ

庭湖石記

芥子の中に須彌をいゝとは西域の虚談、大佛の鼻のあなへ傘さしてはいるとは南都の實説、大は小をかね、實は虚のごとし、こゝにつのくに豊島郡櫻井谷水原氏の庭中に一の奇石あり、そのくぼかなる所おのづから琵琶の湖に似たればとて、庭湖石と名づく、水を掬すれば杜甫が月を手玉にとり、口をそゝげば

孫楚が齒みがきに流をからず、此石もとは三草山の麓にありしを、民草のふかきめぐみの露の玉、まろばしあへぬ心をはこびて庭中の物とはなしぬ、これもまた石より重かるべし

手水ばちひくや千ひきの石山に

むかへばこゝも琵琶の海つら

猫賦

雞のあしたをつかさどり、犬の夜を守る、なべてかうやふのなれやしなふべきそのたぐひ、あまたなる中に、鳥は心をなぐさめども、すり餌まきゑのわつらはしく、魚は樂をまるといへども、子子すくふにいとまなく、狎は干果子のあたえに乏しく、猿は虱とてふわさのみ、ともにかへるに損ありて、益なきものなるべし、こゝに一の小畜あり、そのかふや飯をもてず、鮑貝一つ鯉ふし一連にて、一年の儲に事たりぬ、腮に逸物の毛をかくし、眼に六の時をききむ、あら玉のとしのはじめは若水に手水つかひて、七くさ爪をとき侍るも、妻こふ比の心まちにや、たまゝ淫樂會にもれたるは、屈原が梅をわすれたる類にやとおぼつかなし、夏は牡丹のかけにねふりて、胡蝶

の夢にたはふるも、つゐに垣ねにうづまれて、隣の藪の符をやこやしぬらんとあはれなり、秋はまたひの葉にふれて、をのが薬を求め、冬來ればかまどに入て、灰毛の名にかふもおかし、こまとよび、からとなづけ、とらはまだらに、からすはくろし、まろかねの貌は西行が手にふれ、首玉の綱は女三の宮にひかる、八蜡の祭にあつかりては、くしのなげきをのこし、五の徳をかぞへては、彬師がたはふれをつたふ、昔より國に盜あれば將をえらびてうたしめ、家に鼠あればかれをやとひてとらしむ、大凡術をはしるもの、牆に穴ほるもの、けさう文ひきて名をたつるもの、棗くらひて人をかむもの、油なむるもの、器かぢるものも、かれを恐るゝ事はなはだしく、ひとたびきつとにらむときは、手足を措ところなし、かれがかたの虎に似たるも、そのたけくいさめるにされるや、されど虎死して皮をとゝむれども、鬼のふどしにかくばかり、むつちの皮は三線となりて、なれしむかしのひざまくら、思ひの色音にひかるも、またやさしきかたならずや、

わらはのために乳のなきをなげくことは

むかし大江匡衡も、かゝるうきめにあひしにや、ちもなく、はかせのいゑのめのとせんとはとかいひて、十日一步のちつけをやとひ給ひしとなん、むしろ嬌兒の乳をたつとも、郎が殷勤をたゝじとは、古樂府にもみへたり、飯なくは蕎麥でもくはん、紙なくは手ばなもかまん、錢なくはつかはでもありなん、地頭にたとへしなく子をかゝへて、乳のなきこそかなしけれ

舌つゝみうつほどたんと出すとも

ちゝとなりともちゝ出よかし

日をへてかたゝの乳いでにけり

鼠をせむることば

假鼠河にのめども腹にみつるに過す、汝なんぞわが肉池をのみほして、わが印石をして顔色ならしむるや、夜もあけばねこにはめなんか、日かくればおとしにかけんか、地獄おとしか極樂おとしか、罪の輕重をますおとしにはからば、漢の張湯がためしなきにしもあらねど、もし白鼠と内縁あらば、大黒殿のおぼしめしめいかと思ひて、石見銀山一等をゆるし、鼠衣をはぎ、鼠箒の過料をとり、壁の穴々、

けたのすみく、のこらず追放するものなり、この趣を西寺の老鼠より、若草のはつか鼠にいたるまで、よくく申きかすべきものなり、

むらさきの外にくきはにくいれの

朱を奪へる鼠色かな

なつくさ

をのがさつきの雨のなごり、猶はれやらで、名たかき雪もけぬといふなる、日よしのまつりも近づきぬらし、あらかねの土の事用る比は、暑氣の見參とて世にかゝづらふなまわかうどなど、あはせがさねに麻ひきはり、戻子かたぎぬのかたも、雨つゝみにうちひしげて、はしりありきつゝ扇はちく、聲つくるひしつきくしからぬ時候に、ごきぐゑんようなどゑみぶくめたるなりの、すゝはいのいてにくしや、あなうの花のさきそめしより、さなきたに心のすねくしき、すねくさてふもの、夏草とゝもにまけりあひて、たちあるべくもあらねば、おほやけわたくしの事も大ながしにない、ひたごもりにこもりてのみ過い給、れいの筆まめの本性なれば、すいがへしのあさくさかみの鼠いろなるに、手習のやふに

て

此ごろは世をすねくさのうみはて、

たゞ齊樂をねるばかりなり、

ごくねちのさうやくにはあらで、あたまのさうやくをだにゑせねば、おとろのかみのおとろくしう、さながら大津繪の鬼かとおさましう、さかやきはたひひるまきのごと高うなりもてゆくに、鳥賊のかうもてつくれる驚もたてまほしう、そこらかいなでし爪の土の垢も、まるときたなくもわるくさくも、あはれにもあつかましくも、虱まづ落ぬべし、前裁のていたらく、草木のたゝすまひも、何がしのゑせずりやうの下やしきたつ心地して、たとくしき木下やみに、やぶからしのいやみからみて、あるじのむせうもあらはるゝに、さゆりはのほくらかに、つぼみもたると、わすれ草の生いでたる、これもまた松ならねど、たねしあればとうちうめかる、軒ちかうなてんの花のさゝやかに、かつちるも、くものゐにつゝまれて露おもげなるあはれなり、たが家にまちはらふとてたきしめし、蒼朮のけふりのおもはぬかたになびきぬらん、ふせごにむせるまめしの、かのわる

くさきにかよひぬるもむさし、うらちかく水くむうばのたけのかさ、あみだかぶりし、かめのこに手おけうちをき、車井の繩かいくり、となりのながしの窓見れつゝ、あなまきなのていけや、あめのそこもやぬけつらめ、出いりからきめするといへば、さなりいまくしうまてたいつかぬぞ、朝ごとのうれへなり、あすのみつけのみに何よけんなど、をのがじうたへいふ、門守の小むすは、こなたのより四はかりもをよすげたるが、さみせのこと手まさぐりて、師にうけたる手なのこい給いと、母のせいするにかしこまり、いとよなる壁をからびたるいとかきあはせつゝ、尾花といふもことはりやとほのめかしたる、よしやあしかりともみへず、桁はしるねすみのよねのひつかぶる心地ぞすめる、こなたのも聞とりわざに、こはづくりしてまねびいづるを、あながまと母のこゝむれば、みつになれるおとの、おなしごとうとまかるもらうたし、あこはま、まだせじ、こちへとひきよするに、いなといひてかけいでんとするを、からうじてひきとめつ、やをら手をやれば、例のもらしつ、やがてまめりたるもの

ぬきかへさせ、さきのふせごにうちきするにぞ、くさゝもうちそひ侍りて、はなもちもならぬものから

橘菴記

右近の橘か、江南の橘歟、そもく戦陣問答の、名にたち花の小島かさ歟、たちま守がうゆる所歟、橘諸兄公のめでし所歟、そもく市村家橘が家の、目にたちはなの紋所歟、その狂言のたねとなる、工藤がいほりに木香あり、主人の菴に橘あり、奈良の帝の萬葉集には、實さへ花さへとほめことばをのこし、唐人の三體詩には、盧橘花開と寐言をいへり、陸續がはづし物、親孝行の部に入、司馬相如が筆てんごう、夏熟すとかきちらせり、むかしの人の袖の香は、さつきまつはなの先に匂ひ、一にたち花、二にまゝ牡丹とは、みつ子もよくうたふ、橘奴は赤坂奴にあらず、橘仙は下手碁にあらず、橘町におどり子あり、橘井に名醫あり、一日加古川行國といへる本草者來り問ていはく、橘は密柑なり、盧橘ははなたちばななり、平地木は山たちばななり、同名異物いづれなりやと、主人もとより麻布に住すれば、き

がしれぬとぞ答へける
右は麻布にすめる沾頂子のもとめによりてかけり

鉤匙橋記

鉤匙橋は長者が丸の流れにかゝる、そのみなもとや六孫王經基のおほきみ、東夷征伐のかへるさ、むさし野を過給ひ、歸雁のつらをみだるを見て、鴈々みつ口、跡なが先へいたら、かうがひとまよとの給ひて、御はかせのかうがひをなげ給へば、化して一の橋となる、名づけて鉤匙橋といふと云々、猶たづぬべし、その所忘れずとは、むかしより江戸の名所をほりかねの、いづれ作者のにげ水にや、むさし野の廣きことゝもを、草のはつかにつまんとならば、いかでかは、されば鹿子の所まだらに、砂子のよむにたらぬ、大方歌人の居ながらまらるゝ名所も、まづ此位なものなるべし、物かはり星うつりて、富士のけむだしも引窓をたて、飛鳥川の瀬ぶみもかはるものから、瘡の薬をもとめずして、井手の蛙をかげぼしにし、大工童にあらずして、長柄のはしのこつばをさらふたぐひもまのあたり、三股の流れ二またとなり、薬研堀もうまるなりとききて、此橋のほと

りにすめる人のために、これか記つくりて、朽ぬはしらに題すといふ事しかり、

みなもとはかくぞと人につげのくし
鉤匙橋をさしてきよなば

背面達摩賛

八萬四千のお敵に對して、おがみんすにへと、うしろむきしは、富の緒川の流れの身、まなてる屋の片岡歎、如何々々

雪女賛

雪の白きを白しとするは、脛の白きを白しとするが如き歎、脛の白きを白しとするは、肌の白きをまろしとするが如き歎、雪は女の肌にして、女は雪の肌なり、怪きを見て怪まざれば、怪みおのづからきゆるとなん、

名にしおふ師走女の化粧より

空おそろしき雪のまらばけ

芭蕉菴桃青翁賛

身は芭蕉葉のひろきに居て、風流のほそきにたどり、心は風雲のおもひをたちて、花鳥の情にうかる、僧歎俗歎はた隠者歎、これこの一箇の誹諧師、

から誓文

四方赤良左に盃をあげ、右にてんふらを杖つきて、以てさしまねいていはく、來れわが同盟の通人、汝の耳をかつほぢり、汝の舌をつん出し、つゝまんでわが御託をきけ、いにしへ天地いまたわかれざる時、混沌としてふはくのごとし、その清るは上りて諸白となり、濁るは下りて中汲となる、酒はこれきちがひ水と、天竺の古先生が一國な事いつても、また百薬の長歎半歎と、きれかはつたる飛目あり、鄭聲は淫なりと、宇宙第一の文にかきなんしても、とかく浮世はつゝてんくとは、由良殿の金言なり、凡わが同盟、どうまいつた孝弟の實事に、風流のやつしをこちつけ、意氣でも慷慨でもなんでもかでも、よりとつて十九文、詩歌連誹のめりやすに、琴棋書畫のはやし方、拍子をそろへてうつてをけ、もしきんならば汝を用ひて禪とせん、もし酔ひつぶれば汝を用ひて猪牙舟とせん、今日の事四盃五盃ですます、一盃々々また一盃、ねちあひへしあひする事なかれ、疊にこぼす事なかれ、天水桶となす事なかれ、飲食する

御奉加帳にみな月の比

大根太木塵積樓記

世中の塵しつもりて山とならば、山ごもりせん塵のこの身も、とみせ先の柱におして、いつも月夜につき米の、飯田まぢのほとりに、出格子の透間をうかひ、ひとり二階の物ほしに上りて、竿竹のよをのがれたるおのこあり、夫大隠は朝市にあり、雪隠は露次にあり、四つ切の出入しげき夕べ、日なしかしのかしがましき日は、許由か耳を錢湯にあらひ、伯夷が炭を八百屋にとり、松風のねを菓子屋にきく、妻木の道を真木河岸にたづねて、人とをく水草きよき所よりは、中々不自由ならず、つねにほりどめのほりするものは、酒のさの字もさのみにて、もちの木坂に心ひかれ、真名いたばしのはしくれよりは、かななの文の中坂に眼をさらし、ふるかねのふるき昔をしたひ、ひめのりのひめ置し巻をひもとき、文車の文に車留なきをよるこび、ちり塚のちり、あくたすつべからざる世中の、ちりしつもりて山田屋とも、塵積樓ともいふへかりける、

月見の説

事ながるゝがごとくにせよ、そら時宜をして悔る事なかれ、もし酒つきば銚子をかへてもつてのめ、もし肴あらば懐中箸を出してもつてゆけ、つゝしめや

この盟にあづかるもの十餘人、酒上熟寐をはじめとして、即坐に酒を下す事、瀧のごとし、時に安永三年甲午

墨師善兵衛衣の奉加帳慕縁疏

それ大恩教主のおもてがへ、涅槃の床をふみ給へば、一疊二疊の長き手間、あつらへつべき人もなし、こゝに御存の善兵衛、いつまでか世をふる疊と、兩のびんごをそりこぼち、やらう疊のさまをかへ、墨の衣の奉加せんと、京間田舎間おしなべて、西は琉球高麗縁、南はきのち土佐おもて、十方旦那にあふみ路や、われからさきのひとつかみ、報謝をまつ青疊、五分でもひかぬ五分縁に、さしつけがましき御願の、もつれぬ糸口針のめど、通れくとおまかりなく、勸進帳で世をおくる、おくり狼衣の奉加、狸のきんたま八疊敷、南無あびら纏綱縁と敬白
報謝米の安く永きとし

それ月は久かたの空にいまして、地をはふ裸蟲などの分際にて、なれもてあそふへきものにはあらねと、ことさへてから國には、月出て皎たりなと、桑間濮上をそりしよりはじめて、漢魏六朝三唐にいたるまで、そのことは北斗をさへ、その影屋梁にみたり、また足引の大和うたには、ならのはの名におふ集より、世々の撰集にのするところ、月弓の引手あまたに、月の舟にもはしげがたし、されはいきとしけるもの、君はさんやのみかつきさまより、十九たちまち廿日宵やみの夕にいたるまで、いづれか月をめてさりける、そもく此月いかなるものぞと、やれたる壁のすきまかぞへて、月の光に書を書きみするに、その月中の混雜なる事、かぞふるにいとまあらず、まづ弓の師匠の何かしか女房は、老せぬ樂をぬすみてかけこみ、吳剛といへるむくつけ男は、まきわりをもちて桂の枝をこなし、うさきは米をつき、蟾蜍は油をしぼり、その名もつきの宮人は、月宮殿の見通しにて、白衣になりての大一座、霓裳羽衣のおとりかあるのと、月のかつらの根もはもなき、月の鼠のその尾にとりつき、詩人は酒家のみせ

さきに、二合半輪の秋をめて、歌人はあなからめいかに、てる月次の定會の夜食にこそはありつきけれ、また連誹となり、下つては百韻に、月いくつと安賣の烟草入の思ひをなし、月の定座は何句目なと、役棧鋪同前にあけてをくこそあさましけれと、いかにはらふくる、わさなればとて、三黄湯のたてくだしに、いふもまた埋屈くさし、これなん宋儒の袖頭巾、氣目はかり出して空をうかふに似たり、それ造物の大なるや、月よよしよ、しとむしやうにうれしがれば、月やは物を思はすると難題をいひかけ、花はさかりに月はくまなきをのみみるものかはと、榮耀にもちの皮をむけは、罪なくて配所の月をと得手勝手なる願をも、まぢりくときいて御座るか、たゞしきかずに御座るやら、音もかもなき上天の事は、まらぬが佛も聖人も、もとは一つの裸蟲なり、われ造物者の無盡に入りて、大塊われにかしつけの日なしをかせしより、詩歌連誹の紙屑ひらひとなりて、籠の目にふれ耳にきく、雪月花の事にをきては、他人のやふにも思はれず、わけて秋のものなには、桂男へ對してもひと趣向せねばならねど、も

とより五侯の門に入らざれば、すはまにたてる松かげより、雲井の月もななめがたく、千金の儲にとほしければ、船のうちなみの上に、うかれめの月見も約しがたし、いづれもともに猿猴が、水の月よとあきらめて、江戸の田舎のかたほとり、高田の馬場の松かけに、さらしなやおは捨山のそれならで、信濃屋なる茶やの門に、十五郎てふ名もゆかしく、三五夜中の團子田樂、えだ豆のまめ人らをかたらひ、芋の葉月の十三日より、十七日まで、いつも月夜に米のめしの大施餓鬼をなんはじめける、御信心の輩は、詩歌連誹の多少にかぎらず、即時一盃のさかてをついやして、永代不朽の盛名を、金看板にとめざらめや、

八月十三夜月をみ侍りて 朱樂菅江
染出來ぬこんやの月をななめれば

秋の最中もたしかあさつて

十四夜高田の茶屋にて 相場高保
月をめつる夜のつもりてや茶屋のかゝも

つゝに高田のばいとなるらん

十五夜月 春日部錦江

ふんまはし秋の最中へうつ針の

てりとほりたるまん丸な月

十六夜月

四方赤良

夕霧のまよひもいまだはれやらで

出し藤屋のいさよひの月

十七夜月

出來秋萬作

おもしろや月の鏡を打ぬいて

樽もたちまちあきの酒盛

高田五夜月といふことを

白鯉館卯雲

團子夜中新月の色五つざし

すこしこげたはくもりなりけり

あかすみん秋の五夜にむさしの、

濱邊黒人

名たかき月は空にすめく

病にふし侍りて高田の月のまどろにもゆかぢり

ければ

唐衣橋洲

酒ならぬ樂をのみてみる月は

雲よりもうきの風の神かな

春日部左衛門尉へ遣す感狀

今度於高田市場、五夜之間乗月而遂筆戰一候之刻、

即時飛越出雲八重垣、踏破五言之長城、得李杜之體、探山梯之腸、埋酒池、燒肉林之條、前代未聞無比類者歟、自古來一聞以馬度原者、未聞以藤栗毛一度原、春日部之振舞希代之珍事也、因爲恩賞二期之間、詩歌作取宛行者也、者茶屋之拂方感狀合而如件、

安永八年八月十七日

赤良在判

春日部左衛門尉との

詩歌兄弟對面のつらね

曾我十郎百人一首
同五郎唐詩選

十郎、秋の田の、かりほのいほりに横木香、一家そろふてみな川の、五郎、主人相識らず、偶坐林泉のためになる、お客にはじめて哀江頭、十郎、めぐりあひて見しうどんげの、花の色はうつりにけりないたづらに、十八年の天津風、雪のかよひ路ふきや町、赤澤山のさかい町、五郎、玄ゐの木山月半輪の、秋の野すつたる一戎衣、風つようして角弓の、一のやぶしに獵馬より、射落されたる無念さを、十郎、物や思ふと人のとふ、人に心をおきの石の、人こそまらねかはく間は、なにはなる身をつくしても、五郎、あはん他席の他郷より、此場を去らぬ三下り半、憑て兩行なく

涙、十郎、ひるはきえつ、よるはもえ、五郎、かうべをあげてかうべをたれ、十郎、むねにえげれる八重葎、五郎「冠をつきぬく三千丈、十郎、尉と姥とは高砂の、松もむかしの友千鳥、五郎、小苑鶯歌やみく」と、長門朝暮にくるへる蝶、十郎、蝶よ花よと花さそふ、あらしの庭の雪ならで、むら／＼はつとうちちらし、五郎、百萬一時につきやぶり、寶劍直せんべいを、ばり／＼とかむごとく、十郎、その本望をたつた川、五郎、心をきたふ鐵嶺頭と、「ほ、二人うやまつてまうす

大根太木十五番狂歌合判詞奥書

そも／＼和歌のうら店に借宅し、泉がそまつなる身の分にて、批判を何と正札付の符帳をもわいためず、和歌三神をかけねなしの安賣して、十露盤の玉をみがける、句々も三五の十八と、おきまどはせる十五番の歌合に、ぼつちりの判をくはふる事、さばへなすかみの町人の宿めきたれど、給金をつくば山のかげよりもまげく、宗旨はなには津のふりをまたふあまりに、神棚の夷歌をまくらこととして、鼻歌はやりうたにもかへぬれば、これや三井がみせのかし傘

ならぬ、六百番千五百番の判取をまねびて、どぶいたのあつかましく、小便無用の辯をかいつけぬれば、露ぶつかけのもり侍るとも、御免素麴のながきあざけりをのこす事なかれ、やすらにながき、七のとし文月十あまり六日、

宵柏賛

人に三愛の癖あり、牛に雙角のあらそひなし、雲井の月の前には、玉しきの露ふかく、二十日草の花の下には、はた巻のひも長し、後中書王に後ある事をえり、種玉菴に種をのこすととき、その源きよく、その流とをし、

日くらしのにき

女もすなる日記といふものを、野郎もしてみんと、梓弓やたての筆とうで、花薄はつきありきしらのまはりを、そこはかとなくかいつく、そのふところのかみなつき、空も小春の長閑なる日、友とする人みたりよたり、夜かあけたら詩つくらんと、からうたの礎てふふみふところにして、物見くるまの牛込をおし出す、わらたなの里すきて、司天のうてなのもとをゆく、空にも酒屋はあなるものをといへば、

かたへの人地にも肴町ありといふ、こゝに日ごとに千句のことばをつとえて、それが判をなすものあり、そのきやうさくなるを、壁におしをけるをみれば、石でする物石菖蒲のふとんなどかけり、清少納言が笑本よむ心地す、つきど明神の宮を過て、ひや水ばんそにかゝる、夏ならば立よりもくむべきを、この寒さには御免候へかし、江戸川をこえ、りうけうばしをわたり、すは町を北に泉松山にのぼり、牛天神のみまへにぬかつく、かたへに一つの石のほこらあり、苔むして戸ぼそなし、白駒かいふ、これ貧ぐうをまつる、よく人を禍福す、むかし小日向のほとりにすめる人、家の内の貧を逐ふとて、窮鬼のかたちをつくりて、此ところにもまつれるなり、その神體は何ものかとりゆきて、ほこらばかりのこれるとぞ、やつかれ多年いのらすとて、此神の冥助を得る事、形の影に随ふがごとし、法樂に

澁團扇あふげばいよ／＼高楊枝

かみな月とも思はざりけり

千里亭白駒

澁團扇ほねもおれねば柿頭巾

かぶりふるとも福やいのらん

千ひきの牛石のもこより、半天の鳶坂を下る、一むれの羅綺みちもさりあへす、曹司谷の影供にまうづるなるへし、そが中にいづれの深窓にやしなはれ給ふならん、年はあなにくの十八はかり、長袖の地をはらふは、いまた春ならざるにいづれの花を、蟬襲の日にすぎとほるは、いまた盆ならざるにいづれの燈籠ぞ、何やらんめのわらはにさゝやきてうちゑめるなど、楚の國の色男が垣間見し、東隣の名代のむすめ、阿保親王のむすこかぶが、かり衣のすそを竹馬ぎればど切てやられし、はらからすみも、中々もつて數の子ならず、たいうらむらくは、口もとのやゝひろらかなるぞ、白きたまのすこしき瑕とやいはん、人々の心も空になりて、足はあとへくとひかれぬるもおかし、でづゐのうら門を左に、小石川のうま場にいたる坂あり、名はわすれたり、赤つちの上に青き苔みち、まろき水のながるゝに、きばみ落たる木のはのちりまきたる、なんでも五色にかはるよと、うちうめかる、午の貝ふく比、ひまゆと駒込をへて、やゝ日もたけ町をすぎ、こゝに似足

がゆかりあるものあり、その門を過てその室にいらてやはあるべき、まばしの間此あたりの酒家にて待給へといふ、その名をとへば石垣何某とかや、さだめて名はかたく、人はやはらかならんかしなど、どよみつゝゆきく、て、荷付馬の追分にいたれば、年あき前のけいせいが窪に近し、酒はやしの杉こてる門に似足が來たるをまつ、沽酒市脯はくらはすとかいふなるを、ろにごよみろにごしらすなどかたみにわらふ、やつかれわりことりいて、椎の葉にもるとひとりごちたるに、みなひとつつゝとりてくひけり、これより道を北にとりて、せそまへとかいふ所をすぎ、枯たる木にも花さくてふ、大悲さにまうで侍りて立出れば、すぎやうまの先たてるあり、あるまばらなる垣のやぶれより、白きかひなさいいで、布施するさま、近比石燕翁のゑかける百鬼夜行の圖に似たり、錦江おかしかりて

石燕にみせたらすぐにかきねから

手ばかり出して内にもちぶせ

まづ足もとのあかるきうち、さんさきをいそぐべしと行、みちの右に一の石碑あり、をうななゝおもて

とかや、享保十八年丑十月十七日としるせり、これはかたひの女の死したるをうづみて、七面にまつれりとぞ、玉造小町の文も思ひあはせられ侍り、此わたり野中の清水柏木の井なとありといへど、たけくまの松の木で、はなつつこくりし老父もみへねば、それとまゐるものなし、まれずは先の辻番にとはん歎、いぶせきやどにくれ竹のよをあみて、烟くさをたくはふる器をつくれるものあり、莊周がいへる緯麝の人のたぐひにやとゆかし、そのむかひに種樹の家あり、千草萬木をうへて、郭橐駝が傳よむ心地す、古文眞寶のはなしにまばらくむだも初利天、鳶坂の鳶飛で、天にいたりし乙女の姿もわすれたり、猶も谷中をさしてゆく、笠森いなりの宮居をみれば、木立ものふり鳥居たてり、ふたつきのかはらけに、まろき色とくろき色の團子をもちて、小女ゆきゝの人をみることに、米のかへ土のかへとよぶ、あか友何かし秋の頃より

醫者も手をとるやわれこの人にして

かゝるへのこの病あること

と詠して枕にふしたれば、いでやこのみやしろに、

いのらぬ事はあらかねの、土のたごさゝげつゝ、なもかきもりの神、あが友がきが持まへの、たいらけく藥代のやすらげくまもらしめ給へとまうしていでぬ、こゝは過し明和の比、おせんといへるいらつめの、茶をすゝめて人の心をうからかせし、ふるき跡なり、かつまかのまゝの手古奈のたぐひにして、なら坂や兒手柏のふたおもて、ひともの陰とたのみしが、ともかくにもねぢ錠の、鍵屋の錠もびんとおりて、またもふたゝひあひかぎなく、こしかけし床兒の足さへ跡かたなく、兒手柏の根つこをも、いづこの里へほりうつしけん、とんだ茶がまが樂鐘とばけて、松風のみぞ音たかき、人間萬事早馬のごとし、かたゝ油断すべからず

笠森稻荷大明神 鍵屋阿仙稱美人

土器碎爲土團子 只今唯有煮花新

又 面楯似足

笠守神祠日暮邊 醉中相伴例諸賢

殊令拙者頻懷古 曾識高名有阿仙

日ぐらしの里にいれば、七面の社あり、衆僧どきやうの聲高し、養福寺といふ寺に、自墮落先生の墓あ

り、先生は江戸の人なり、五君に鞍がへして志を得ず、髪をからわに結び、齒をかねにて染め、佯狂して誹諧師となる、庵を無思庵といひ、軒を不量軒と名づけ、齋を捨樂齋と號し、坊を確運坊と稱す、昔の反古二巻をあらはす、その中に歸去來の辭を評して、淵明元來金持なるべし、わづかのあれ地をもちて、口をきくこそにくれと、一口にはり込しまれものなり、鐘樓によりて銘を探れば、鑄華鯨工といへる、鯨の字にヲの字のすて假名をゑりつけたり、あまりにあさましく、此銘なからましかはと覺えてすてかな歎またすて鐘かまらねとも

おもしろからぬをもしなりけり

妙隆寺の庭より修性院の山つゝきは、寶曆六のとし庭つくりのたくみ、岡扇計がつくる所にして、日暮しの宮といへる、小さき宮居の前に石ぶみたてり、富士筑波あひの木がらしひく庭、といへる句をきざむ、紅葉のにしき折えがほに、二月の花毛氈もこれには過しと覺ゆ、何かしの國のかみの、宿昔青雲のみこゝろざしにて、草創し給ふ、みてらはとりもなをさす青雲寺といふ、太田金吾の船繫松あり、桑

田碧海手のうらをかへせるがごとし、石碑あり大ささほていをはたちばかりかさねあげたらんがごとし、木挽町の何かしかたつる所にして、入江氏のふみをきざむ、千とせの松の前に木挽とは、ちとさしあひなれと、入江といへる名字こそ、むかしの面影に似かよひて、おもしろし、もとの道にかへりて、紙くふひつじのさがりに、本行精舎にいたる、とぼそをたゝいてあないすれば、上人よろこびむかへものして、廬山の禁もけふはかりはと、何くれともてなし給ふ、をのふところせし木のみなどさけつ、やゝありて東面の障子おしひらけば、物見塚凸に、筑波山凹なり、田の面田の字のごとく、人家人の字をならべ、煙なゝめに霧横たはり、空あかるく地くろし、白日さとの名にしおひて、明月山からぬつと出、庭にかれたつ萩薄の根より、東のやり戸の板ひさしまて、三竿はかりさしのぼれば、人々こゝぞとかのいしすえに柱たてして、五七言の長城を、この城跡につくり出せしも、まげればみなもらしつ、物見塚に筑波山人のかける碑文あり、錦江物見塚むかしたつねてふみみれば

右と左につくは山人

ともなひし百順、筆とりて、悉にうつせるも興あり、去年のけふなん、朱樂菅江中島平五郎をともしなひて、このみてらにあそび、十月の望二客と同じく、赤壁の月みる事を興せしが、一人は枕上にふし、一人は泉下に歸す、死生存亡は委細承知なれと、あまりに造化もとうよくなり、けさ菅江のもとより見し月はそしてすめるやくもれるや

ひとり死客ひとは持客

樂きはまりて衰きたれり、こうめいりては面白からす、またあふまではさらばくと、いとままうして立出る、一寸先は闇の夜の、牛の角文字いろは茶屋、戀の手習見ならはんと、玉たれの外にたゝすめは、女三の宮のおんばともいふべきが、天のうすめのみことならで、胸乳あらはしてたてり、はだえは生漆のごとく、目はどんぐりを欺く、されともかくまゆずみのゑんなるは、一里塚のゑの木のかげより、三日月の影ほのかに見ゆるにたくへつべし、

立白不及美人腰 籠外立如野等猫
却似證文一文字 數年眉黛爲誰描

四方のあか

わが輩のといまれるをみて、走り入て座す、みたりよたりとならびて、かけたるをおきなふなるへし、あなはしたなのうかれめや、わかきものてふすぎやなき、何がし居士の三平二満、あけばまた休ぬといへるも、かゝるきはにはあらざめりと、そこくに見過して、月夜がらすのふるすにかへりぬ、こゝに一日のうちのあらましをかいつけて、千里の外のにきいたぐふもおこがましけれど、家の戸庭を出ずして、おぬひの道行と名づけぬるわざを、よき方人として、日ぐらしのにきともいふべからん、とまれかくまれなげやりてん

冬日逍遙亭詠夷歌序

たはれ歌は人のわらひのたねをまきて、よろつ人の口まめとはなりけらし、あるはうき世をまゝのかはらけまち、くだけてもとのもくあみが落栗菴、あるは本町二丁目の、いと屋にあらぬはらからの、秋人がよききぬた菴など、月次の會たへすぞなんありける、こゝに京町何がし屋のあるし、此道をたしみて、名におふかばちやのへたならぬ、言のはをのべ、梨壺の五町のうらなる逍遙亭の山里にして、と

もに心をやり水のめいぼくと、けふのまとゐのある
しまうげをなんなしけらし、われも視のすみの江の
岸におふてふわすれ草の、ねぼけし夢のかよいちも
わすれがたく、かしあみ笠にまのふ山、またことか
たの道もたどらまほしく、たゞ一はいの茶づけくふ
間に、はしがみのはしをけがしぬ、たとひ時うつり
客さき、むかひの挑灯ゆきかふとも、みせずかゝき
のいとたへす、繪半切の末ながう、くどうもく此
會に、おいでなんしといふ事まかり、天明ときこゆ
る二とせ霜月二十日あまり四日になん、
狂歌師の引つころはぬ衣紋坂

うちつれてゆく晝中の町

竹本政大夫碑

文起に代りて作れり

やつかれ二葉のむかしより、くれ竹の一ふしに心を
こめ、豊竹の生立は、筑前少様に學び、そのうち竹
本の風をまたひて、政大夫の門に遊ひき、弟子襪線
の才乏しといへとも、針にたとへし師にまたがひつ
ゝ、かの秦皇の松にゆるせし、位山にもものぼるへく
なんなりにたるを、下里巴人のいやしき曲をもて、
殘盃冷炙のむしろの末に侍る事、ますらおの望む所

にあらずと、ひたすら先師のとゞめ給ひしかど、こ
のめる道のすてがたく、あなちにもとめ侍れば、
そこは住吉の人なり、岸の姫まつ色かへぬ、名はな
には江の何とや呼んとの給ふ折から、錦大夫來あひ
侍りて、住吉の住大夫こそ、つきくしからめ
など、一言して定め給ひしもわすれがたく、ことし
文月先師政大夫十あまり七かへりの秋をむかへしか
ば、その流をくみ、その源をたづねて、大江戸に
ほりの邊にこのみたりの筆の跡をうづめ、思ひを千
ひきのいしふみにのふる事とはなりぬ、そのことば
にいはいはく、

竹あり竹あり

根を同して節を異にす

くれ竹の縁枝おれ

紅葉の錦はらわたをたつ

千ひろの陰に曲をつたへ 一字の恩に名を得たり
此いしふみを徴として 仰けは高く鑽ればかたし
天明元年辛丑孟秋十日竹本文起建

木兔引贊

衆鳥來てこれをわらふ、其智には及べし、木兔ゐな
がらこれをひく、その愚には及べからず
小鳥ともわらははわらへ大かたの

四方のあか 卷下

向島賦

花のお江戸のすみだ川、まつち山からむかふ島のけ
しきは、みめぐりのみめぐりありきても、洲崎のま
さこのよみつくしがたし、春はやうく土手の若草
火繩ともにもえそめ、牛島のつづくむあし酒樽に
雉もみし、軒端の藤波見せさきか、れば、池の
かきつばた川骨の色をあらそふ、生酔の目に青葉し
て、山ほとゝぎすおちかへりなく比より、屋かた屋
根ふね似たり猪牙もあひをつなぎ、あゆみをかく、
秋は千葉の山の紅葉、はなの高雄の色をあらはし、
ぶら挑灯のぶらつきしはては、燈籠にはかに心かは
り、いつしか時雨に落葉き、雪見酉の町のうき船
に、巨燧の灰のかきたて、いひつゞれば、みな源
氏の宇治十疊のかし座敷、いせ物がたりの乗合ぶね
のはなしめきたり、日もくれぬはや船にのれとは、
むかふへわたれといふ事歎、いさごと、はん、あそぶ
氣はありやなしや、まゐのはならぬあしのはの、筏

よものあか上終

にいり酒のあらひ鯉をもち、山椒の實は小粒でも、蒲焼のうなきの長さきにともなふ、吸物の赤味噌あかすして、どんぶりのどんぶりはまる生簀のほとりに、藝者の三線堀の名の樂研でおろすかとうたがひ、太神樂の曲太鼓、日ごとに一萬度もまはるべし、かくうかれたる世にしあれば、都鳥のはしとあしのあかきも、秋葉の猿のまりの様に覺え、晋子が夕立の句も、稻荷の狂歌の類の事かと、をのか田へひく水草の、さよき所のとつ國より、北のくにとははひわたるほとちかきわたりの、四方のながめは名におふ葛西の太郎月より、いほざきの大黒屋、夕こえくれのせはしきまで、いづくはあれどむさし屋と、地口有武がもとむるにまかせて、紫の一本ならぬ、赤良が一筆まめすになん

狂歌如^{ワカガ}湧^シ角^{カク}田^{デン}汀^{テイ} 短冊頻飛^{ハシ}秋葉庭^{アキハ}
向島風流^{ウキナガ}從^リ此^コ始^{ハジ} 武藏屋額權^{ムサシヤノカシ}三亭^{サンテイ}
はや牛もをそ牛島もよどみなく

いけすの鯉にこがれよる船 腹から秋人
いつみてもけしきはたれかあか味噌の

鯉と戀とにさしむかふ島 酒上不埒
みめぐりへたえずに船のつき雪や
花のお江戸のまんむかふ島 地口有武
牛島の亭主のすきの赤味噌は
時をゑぼしの鯉の庖丁
加保茶元成春帖手鑑序

こゝに京町何がしやとうたひし、家の風も去るく、道理でかはちやの元成は、たはれ歌のせいひくからず、ほんに猿丸大夫格子、むかふの人丸赤人や、おや玉つしまのおいらんより、その名はいちばい高かりける、ことしも例のゑい心地、内所にこぞりあふみのや、かゝみの山の手かゝみに、歌の趣向をたてたれば、かねてぞみゆる人々の、名におふ狂歌の染模様、かすみの衣すそ長く、千とせの春をかさねざらめや、天明四のとし初春、
早稻田太神宮法樂の文并歌
これ天明三年癸卯のとし、卯月のけふにめぐりめぐれる小車の、牛込の里わさ田の面に行かふうま場の、

またついは根に宮はしらふとしかたて、高間か原にちぎ高まりて、大君の御代のまもりと仰たてまつれる、かけまくもかしこき太神の廣前に、おそれみおそれみもなくまうす、百たらぬ八乙女のみかぐらをまねび、久かたのあまの鈿女のわざをまじへ、歌かきにあともひたて、絲みちに絲かきあはせ、大つゝみの大きやかに、小つゝみのさゝやかに、笛竹のまたれくり太鼓のはちあたりも、すみ酒のすみやかに、みそなへのみそなはし、みあかしの光をやわらげ、ちりからの塵をおないうし、おたいらにやすらかにまろしめして、このひと村の民くさの、汗水のひた〜とひたの水田のたなつもの、ゆたかにめぐみさいはい給へと、おそれみおそれみもなくまうす、

法樂躍長歌七首狂歌

やまと歌やはらぐ上を又ひとつ

名所 けふやはらけて法樂の舞

居ながらに歌人となれしちかつきや
さても名所はさま〜の顔

娘道成寺

時しらぬ山といり来て京かのこ

娘の袖をかへすをそみる

柱立

宮はしらふとたちよれば此神は

そもばんじやうの君のはじまり

菊慈童

乙女子は夜はの嵐にくしげぶり

あしたの雨にかみのすしめ

二人枕久

松山をこえたる波の玉くしけ

ふたりちぎりをかさね枕久

執着

春風をさらりと柳にやり水の

時しも今は牡丹さく庭

黒つくししばらくのつらね 濱邊黒人 祝髮賀鐘

しばらく〜、桐油ほくち南蠻鐵、四位黒袍天地玄黄の其中に、玄の又玄狂歌の門、入らざるもの、あらさんや、京橋中橋中黒の、黒いは北の水谷町、すみからすみゑの三番叟、色のくろい尉殿に、さあ

らばす、玉たどんの粉、目黒の不動大黒天、九郎判官
九郎介いなり、八瀬や小原の黒木うり、甲斐の黒こま
八幡黒、黒鴨の供黒仕立、香に黒方楊枝に黒文字、
にがいは家傳の黒丸子、あまいは名代の黒砂糖、黒
米めしの三きね半、その神明のおはします、芝のはま
への狂歌の御奉行、黒人新翁、おなじみの黒髪山を
そりこぼち、かしらもまろきかみ山、いさたちよ
りて黒主も、そのけといふ歌仙の中へ、つん出た
四方の赤つ下手は、人主が造化、請人が菅江、大屋
がうら住、腹からが秋人、うしろだてにはつがもな
い、わけて此道すきやがし、黒極上の狂歌仲間、け
ふのまとゐの御祝義に、おらが連中花道の、つらね
か一寸口真似と、ホ、うやまつてまうす

桐つくしきり口上

そも、桐座の濫觴は、千桐坂きり桐長桐、天の八
重きりたちこめて、まばらく休の月切日切、天のい
は戸のきり戸口、きり、とひらく鼠木戸、神をいさ
めの切狂言、これわざをきのはじめとかや、きり、
屋根をふき屋町、きりかはつたる顔みせの、やぐら
たいこのうちきりに、ちよきりちよとこれをながむ

れば、さてもみことな五七の桐、舞臺のきり破風き
り目るん、切幕さつと花道の、春狂言には友切丸、
夏は俄のひときり、きりの一葉の秋狂言、おつる
こがねをちぎりにかけ、菊桐きくきりみきくきり、
四季おりりのかぎりなく、ひつきりもなき引船か
ら、棧敷中の間きりおとし、留場まきり場火繩代、
ねぎりこぎりはわり込の、人にもまるくこきりこは、
ほうかぶりしてひざつきり、まりもちきりもち切そ
うめん、そばきり船きりらんきりいもきり、かやの
たんきりまんぢうみかん、べんとうよしかにぎりめ
し、ありきりはこぶ吸物牽引、きりめたいしき切た
めの、菜きり庖丁薙刀なり、雪踏にきりつけ桐の下
駄、切みせをる四つぎりの、茶碗酒には青つきり、
ほていふりにはきりがれん、源氏にきりつぽ平家に
は、西八條のきりかぶる、きりこは齋藤太郎左衛門、
藤伊夕ざり三かつ縁きり、序切二の切三の切、ひぎ
りとうざり、青ざりきり島、わらひ道具はきりの箱、
引きり枕うすのめきり、きり原のこまきりが谷、き
りふりの瀧きりの海、きり山三雨かしこに五雨、き
りかね曾我の切もぐさ、ねつきりはつきり病きり、

きりはたりてふきりくす、夜きりをはらふ早天か
ら、まづ今日はこれきりまで、きりのふくろをもぬ
けた名題、桐のはにすむ風風や、きりんも出べきみ
ざりとは、けふみつ指のきり口上、その口切の爐び
らきに、氣もうききりの紙ふすま、きりくくく、
右は天明四のとし甲辰、桐座はじめて葺屋町に
て顔見せの狂言せし時、たはふれにかけたるなり、
世にまぎらはしき八の字つくしなど、名をかる
といへども桐の下駄と焼味噌なり、

をはぎの露

それ七々の忌に三の物いみをつくはへ、六の齋の中に
十あまり三とせを弔ふ事は、いかるがの宮にかくれ
ませしみこより起り、何かし禪師の京華集にも、預
修十王經をひきてその事を述べたれば、くだくしく
いふに及ばず、こゝに子孫彦なん、おやよりよくつ
かへまつりし君の、十三回の齋をとふらはんとて、
をのがこのめることくさをもてるも、むらいにな
めげなるべけれど、まめにじちようなる心から、か
くははかり出ぬるものならし、はたむべくしき相
歌の題はおこがましと、ひたすらたはれたるかたに

よせて、計年思法事とかいへるを出して、思往事の
ひいきをかりつ、これなんむかしの秀句めきて、今
もわらはべのもてあそぶ、地口なりなどあざみいふ
人もあるべけれど、きやうごんきごもさんぶちのゆ
かりなりと、頓作頓寫の琵琶をきいて、青きあせと
りの袂をひたせし、むかしの人になすりの衣、をは
ぎのもちもいと露けくて、

十あまり三とせの秋の黒豆も

ほとびにけりな法のこは飯

子孫彦

つきぬ恩ながく法事のくるたびに

かぞへてとはん百年忌まで

多田人成

あつさ弓はるかにかぞふ年の矢の

十三ぞいにあたる命日

紀定庵

めしをもりてたてにし年をかぞふれば

十といひつゝみつはすぎはし

百番月歌合序

大かた月をめでしたはれ歌をみ侍りしに、三五夜中

の敷取に、十五連城の玉をつらね、又はふたよのお月
 さまいくつ、十三かねのあかつきをおしむたぐひな
 れと、かく鳥の子を十つ、十つかひしされ歌、ふたも
 うちにあらゆる月をながめ盡し、兔の杵のさきもち
 びて、三十丈の連木をはむてふ杭州のふる事を思ひ、
 桂の枝も折つくしては、神田まつりのことはて、
 宮居にかへる榊かとおやしむはかり、いち買のいち
 はやく、よつやのよついつ、とかぞへたるちりつも
 りて、あふげは高き山鳥の、尾張のみくにのすき人
 ら、も、ちの歌をよみたるに、良村安世ひとりして、
 も、ちの歌をよみあはせしは、かの良峰安世朝臣の
 水車より、よくまはりたる口車にこそ、よりにてそのな
 がえのはしに、いさゝか筆の軸をとり侍るのみ、

春日詠寄七福神祝夷歌序

孟子に三の樂をのべていはく、かぞいろともにいま
 し、おとゝゐることなきは、一の樂なり、仰てあめの
 道に、ふして人の道にはづることなきは、二の樂な
 り、天か下に秀しざえある人を教へはくゝむは、三の
 たのしみなり、まめ人にこの三の樂あり、南にむかふ
 位もなにゝかはせんとはむべなりけらし、わが家か

ぞいろ堂にいまし、おとゝゐ家をとにもす、あめがし
 たに秀し才ある人、たがひに師友のまじらひをなす、
 たいはづべきはちをえらすして、あめに人にいひわ
 けなきを、またはづべきのはなはだしきにあらすや、
 やつがれいはけたる比より文のそのにあそび、こと
 ばの林にたちまじり、からうたのむしろに七あゆみ
 の韻をふみ、敷島の道にむくさのひとつをわいため、
 身をたて道をおこなひ、名をこの世にきこえあげて
 んとねがひしも、陽春白雪の高きえらべはとなふる
 ものすくなく、下里巴人の下が、りは、いざなふもの
 多しとかいへることのはにたがはず、いつしかはか
 せだちたるまじらひをいで、ひたすらたはれたる
 かたに身をはぶらかしぬ、いでやこの身はとまれか
 くまれ、かぞいろの年をえらでやはあるべきと思ひ
 おこして、こたみたらちおなゝそちのよはひをむか
 へ給ひぬれば、をとゝしたらちめむそちの賀にま
 じろなる大黒屋につどひしためしにならひ、ふたつ
 のくにのはしのほとり、よろつ代のかめ屋のもとに
 けふのまとゐをなす事になりぬ、題もまめくしき
 和歌題は、はいかりの關のはいかりあれば、ことわ

ざにいふめる七の福ある神の御名によそへて、いは
 ひうたをよましむ、そのことばにいはいはく、

寄大黒祝

わが家の大こく柱鼠壁

こつちもつけていはふ神棚
 谷水音か新宅をことよくことは

谷水音くれ竹のよつやのさとにやどりをうつし、も
 ろ人のたはれうたをもとむ、やつがれおほけなくも
 かんつよのことばにならひ、そのむろほぎをなして
 いはく、ついたつるいしすゑ、ついたつるはしらは、
 これつちぬしのみこゝろのひろきなり、とりたつる
 みそかゝは、これ家ぬしのみこゝろのまにゝな
 り、とりあぐるたるきは、これ大きな繪筆なり、と
 りまける腰張は、これいろどれる繪具なり、とりま
 疊は、これあるじのへりくだれるかたちなり、とり
 ふくやねは、これあるじの思ひあかれる藝なり、四
 谷は竹町なり、くれ竹のよつやの里に、大三輪のな
 がれをくめる繪師たち、花のお江戸に木の根草はも
 よく物いふたはれともたち、かくほぎをはりて、ひ
 たのみにのみ、ただうたひにうたふ、そのはなうた

のはしつかたに、いさゝかほうかぶりし侍るはや、
 所から四谷丸太のことばしら

かけし墨畫の竹町の宿

鬼念佛畫贊

かたつふりの角、おれては盤觸のあらそひやみ、外
 面は夜叉のごとしといへども、内心菩薩の道にいれ
 り、身を墨染の奉加帳、つくたひごとに奥山の、か
 ねの撞木はなまいだく

富士山繪贊

そもくこの山、孝靈のむかし生れ出しより、若白
 髪的雪つもりて、千とせの末はもかけず、くす
 れず、廿一代の千言万句も、赤人の田子の浦にうち
 けされ、五山の僧の抹香くさき詩も、丈山か白扇に
 あふきふせられぬ、されど泰山はちりひちをゆづら
 す、河海は化粧水をいとはず、ふじのまら雪朝日で
 とけてとうたへば、三國一のあまざけのかんばんに
 も、をしげなく書ちらすは、また勿體なき事ならず
 や、むかしより此山をめでし人いくばくぞや、在五は
 まだらに雪舟はまろし、その中にまつ黒々の墨衣、西
 行といへばふじを思ひ、ふじといへば西行と氣のつ

くは、此山此人古今一對なるべし、嗚呼さくや姫ま
た出るとも、わが言をかへじかし、

生國駿河者 本國近江湖
三國一山外 出廊出店無

うがへばふじほどくろきものはなし

管もて天をたつた一日

酒中花のちらし

桃李物いはず山吹口なし、その口なしの色々と、た
くみ出たるひとつのもの、南の花にたはふれし、蝴
蝶の翁がふみにみえし、芥の舟のそれならで、一た
び盃の中にうかべば、花の唇はじめて動き、柳の眉
たちまちにひらく、なべての世に行はれるは、淺草
のはつかに、やなぎやのいとすくなし、いま製する
所は、よし野はつ瀬のたねをうつし、まきと沈金の
盃をいとはず、つみてはひたし、のみては興ず、も
し酒中の趣をしるものあらば、いさゝか一枝の春を
おくらんといふ事しかり、

月見のことば

ならひか岡の何がしも、よろづの事は月みるにこそ
とはいひしか、こよひぞ秋のもなかなれば、てる月次

の會はさらなり、折にふれ時につけつゝ、をのがじ
心をやれる中に、かのからうたは、もちほもちや
の、から人のいひふるしたる、清光にけをされたれ
ば、かゝけてむかふひのもの、平仄の影もたど
しく、連歌は庭の面八句に、うき雲のさり嫌おほく、
誹諧はさびたる小刀に、澁柿の皮むかんもうるさし、
和歌こそこのくにの風俗にして、いきとしいけるも
の、いづれかこれをよまさるべかめれど、この比に
いたりては、ざれたることば、あたなるすがたをの
みもてあそべば、女郎花たはれたるふりをなん、花
薄ほゝるみあへりける、それこの月をみるにつけて、
その品もまたさまゝなりや、先はき出しの高どの、
はれやかにみす巻あげ、花籃のにしき所せうまきな
らべ、すはまにたてる絲花のかげに、みさかなは何
などけいめいして、盃のそこしたみながら、何やら
んめでくつがへり、どゝわらふなどをこそ、月見と
はいはめ、酒の池にやぐゑんぼりをたへ、肉の林に
橋まちを手おり、みすぢの絲のさほかいつかみて、
なひきそみきたうべよなどざれたるもあり、五のち
またに千金をなげうち、三のふすまに二世をちぎり

舌つみうつたいこ、歌うたふをうなげいさつれて
こそ、月は月なれと思ふ人あり、舟にさほさし野に
草鞋はきて、うかれ出んと思ふも多からん、五條わ
たりの九尺たなに、軒もる影をながめ、いかきの團
子、ますのいもに、そのたのしみをあらためぬも有
べし、けふなん何がしのもとに、としゝ月のま
るあれば、ゆふけのはしをきあへず、袴のこしさし
あてんと思はず、外のかたを見やりたるに、雲は魚
のいろのごとく、月は兎の耳ながく、椽側のはし
つかたにさしいりたる、わがやどなかなつかしき
に、つもれば人のといひし、老のまさになたりなん
とするもまらず、露霜にそぼちありく、身のはかな
さまで思ひつゝくるに、入相のかね時分づかひの人
をうながし、雲井のかりも跡なが先へゆくなるべ
し、

をなじく誹諧文風俗文選の體にならふ

よろづの事は月みるにこそ、なぐさむわさなれとは、
つれゝ草の法師も申され、今宵ぞ秋の最中とは、
和名抄の作者ものべられたれど、これみな歌よみ連
歌師のぬめりにして、いつも紅葉のにしきはきれど、

里いもの衣かつく風情をしらす、尾花の袖はふりき
るとも、枝豆のゆでたてをいはず、わが誹諧の自在
なるや、宗鑑は柄をさして團扇となし、祖翁は雲お
りゝ人をやすむるとはの給へり、さるは虚實の自
山を得たらんに、尤比興の本意を正したれば、こゝ
に我輩の閉口といふべく、はた後世の活法とすへし、
世にぶ風雅の人ありて、宵から戸をさしこめて高舛
したらんも、又は夜の明るまで酒のみ物くひて、こ
れを月見と心得たらんも、かの書物によみ入て、夕
立に麥を流し、傾城に打込て、身代を棒にふりたる
にひとしく、品こそかはれ、その罪はひとしかるべ
し、されやまことの月みる人ぞ、まことの月はみる
べく、月みる人の多きにつけて、月みぬ人をかこつ
なるべし、

巴人亭記

かたつふりのつのをちいめてはいり、蟹の甲ににせ
て穴をほるも、家といふものゝなくてかなはねばに
やあらん、かりこものみだれしこもうちかぶり、露
霜の宿なしとも身をはふらかしすてざらんかぎり
は、膝をいゝの窮屈ならんより、足のばすほどの家

居なからんやと、あらたにひとつのやどりをしむ、もとより二尊堂にいまし、妻子室にみたり、そのゑんがはのはしつかたに、ひとつの妻戸をびらきていれば、ひろさわづかに十燈ばかり、こゝに四方のまらうとを迎ふ、維摩が方丈の玄關にて、八万四千の獅子を舞はせし類なるべし、その北に三枚敷あり、東面に戸をあけて、まやらくさきつくえを出せり、螢こい／＼雪／＼の場所なるべし、すべて財乏しければ物すきなし、床なれば違棚もみえず、かけ物は壁にかけ、柳は隣からのぞく、澁柿はあるにまかせ、草はところまだらにぬかしむ、土藏の目の上の瘤となり、雪隠のはなのさきにわるくさきも、かの南のやのかき、東となりの下水をいとほざりし、司城子罕かむかしをしのび、望海の亭、見山のたかどの、さら／＼しききはあらねど、張天錫が勸化をもて、家居をいとなみしたぐひに似たり、わか家にくるとしくる人、わか門に入としている人、こゝにのみこゝにわらひ、こゝにうたひこゝにたのしむ、のむものは何ぞ四方のあからなり、うたふ所は何ぞ下里巴人の曲なり、もしそれ陽春の白雪糰も、また小兒の

たはふれなり、いづれをか高しといづれをかひくしとせん、

里の春柳の五もと

宮本豊前大夫義且淨瑠璃

楊柳橋邊の川やなぎ、みどりの釣の絲たれり、百花川上の浪の花、とわわたる船もたいらかに、安國なれや君か代は、千代にひとたびすみだ川、山屋の酒の諸白髪、わかやぐ尉とうばたまの、やみをあやなす首尾の松、今一まほとゆふまほに、千里も一里こがれよる、大さんばしの春景色、まつちの山もわらふかと、うれしの森のむら鳥、かはい／＼がにくいやら、にくい／＼がかはいやら、たつた今戸のうらおもて、口も八町土手つゞき、日本つゞみの辻うらや、うそとまことをはかりにかけて、どちらがおもい露銀は、みやこそだち歎まやほんに、花のお江戸の惣花は、こがね花さく五もとの、柳のちまた花のさと、みちのく山も今こゝに、のりこむ駕籠のかよふ神、まきくめなはの松かざり、直なる竹のおいらんに、まんどろ雉が初草の、うらめづらしきはれ小袖、こぞのまきせの衣くばり、跡着のにしきこきませせて、出るい

ろはにほだわらや、だいてねまつ初買の、初會うらじろやぶかうじ、かうじ／＼て居つゞけの、れんじの窓の北おもて、のこんの雪のふうじ文、文がやりたやむろの梅、くひさき紙の未開紅、かしくのつばみ愛らしく、けふしといで、枝ふりは、花のかのさまの／＼手にわたせ、花のかのさまの／＼、手にとるからにゆらくと、ゆらく心の玉は、まき、まにしはつきぬとみもとの、ながれの末も豊なる、天の八束穂たなつもの、つみかさねたるみくらまら、こゝそあつまの都鳥、むかしもかゝるにぎはひは、ありやなしやとかたりつぎ、いひつぎ棹のみつといと、ねじめも長くまきおさむ、

春色花鳥媒

同

ならのはの、名におふ御代の撰集にも、相聞歌とは色の道、藍より出て藍よりも、こきんに戀の部をたて、花と鳥との媒や、花のすがたはさま／＼に、心うきたつ春のいろ、鳥はもとよりいもとせの、ちゑない神にちゑつけて、つかひはなれぬ二柱、はしら曆のひめはじめ、口と口とはかたために、はたとはたとの腹赤の、奏のりぞめよしの、り、氣にはいらへも

またの藏びらき、當年の恵方より御祝儀まうしいれますと、麻上下のみつ指も、いふにいほれぬ中指と、つる樂子のくすり指、これこのゆびをこう折て、まつとまめたるまめ繩の、まめつゆるめつつ、井筒の、井筒にかけし屠蘇ふくろ、その小袋と小娘に、ほんに油断はなら坂や、この手がしはのふた茶碗、われてひいてひいたけの、入間の里の里ちかき、たのむのかりの玉章は、みよし野ならぬよし原や、色で丸めてさございの、くじもたふる、戀の山、富士はおいらんつくばは新造、このもかのもは玉くしげ、ふたりかぶろの門松の、まげきみかけの中の町、嘉例の酒の二日酔、三日のけふも居つゞけの、風呂の湯上り手ぬくひの、絲ゆふなびくれんじ窓、水殿雲廊別に春をおくふかき、本間ふたまのかざり夜具、やぐら枕の床入も、おさまる時にあふみのや、かみみの山をたてたれば、かねてぞみゆるかねつけ袖とめ、とめてとまらぬ年の内に、引込かぶろいつしかに、春の水上臈のつき出し、けに三千の粉黛も、この一廓にありそ海の、はまの眞砂はつくるとも、君か代は、孔雀鳳凰おしきせの、天の羽衣いくかへり、

みほの松原氣もうき鳥、あしたか山や巫山の雲、くもとなり雨となり、うるほふ民のまくらごと、いねの間もよろづよく、猶ゆたかなる年徳の、あきの富こそめでたけれ、

春日龜樓詠初芝居狂歌序

大塊われにとふていはく、われ汝に形をかす事久し、目のみるべきあり、耳のきくべきあり、鼻のかくべきあり、手の舞足のふむべきあり、口はまた二役ありて、くふべくいふべし、耳目の欲にしたがひ、手足の勝手づくはしばらくをく、汝が口節あらずたゞ酒をたしむ、汝が口のりあらずたゞむだをばく、酒は量なくしてつねに亂酔に及び、むたは務を廢して自暴自棄にちかし、汝を天地のむだものといふ如何々々、四方山人さかづきをあげ青天を望ていはく、われ寧きんくとして大通のごとくならんや、はた黙々として野暮のごとくならんや、むしろ黒鴨をつれて五侯の門に入らんや、はた白眼にして世上の人を見下さんや、寧ふかき山に小路がくれをせんや、はた水草きよき所に岡釣をせんや、むしろ茶ににじり上らんや、はた香に鼻をひこつかせんや、むしろ恭

將基にひまをつぶさんや、はた十露盤を枕とせんや、むしろ絲竹を友とせんや、はた書畫を愛せんや、むしろ螢と雪とをあつめて、萬卷の書をよみ破らんや、はた詩と文とをつくりて、千秋の業にほこらんや、むしろ高間が原に神いちりをし、拍手のおとをきこしめせと申さんや、はた鷲の山の佛くさく、經論に目をさらさんや、むしろ老莊の徒たらんや、はた醫卜の道にかくれんや、富貴天にあり、はしごのとく所にあらず、窮達命あり、耳たぶをさぐるのみ、大塊われをわらふ事なけれ、これも同じく役者にて、もろこしの康熙帝でたのみやす、そこの仕出しはあめつちの大芝居の帳元さん、それ日月の鼠木戸、ひとよあくればにぎやかに、風雷のやぐら太鼓、はじめて聲を發せしより、百千鳥のとひよく、梅と柳の引道具、はるのはじめの初芝居、その時を得たる哉く、いさ大入の盃をかたふけて、例のことばの花道につらねん、造化のおちいき、給へ、大塊黙していらへなし、人をしてその心をのべしむ、そのことばにいはく、
顔みせが周の春なら正月は

初芝居かの時をおこなへ

春日泉亭詠雜煮餅狂歌序

芝のはすの池の水、風やゝわたり、廣小路の鉢の梅、雪なをのこれる比、あつまのひえの山を、はつかばかりかさねてむゆかといへるむつきの末、あけら館のあるじの門にあそべる人ら、うしのつねにかきすさめる、の、字なすまとのせんとして、これかれけいめいす、ことしはひのえのわらは、竹むまにのれる年なめりと、人々つゝしみおそりしが、はたして春日野のとぶ火にはあらで、もるてふ水の手あやまちより、市人のかりすまるも、野寺がいほの心地し侍りて、いまいくかありてされこといひてんなど、いひまらふもほゐなし、さばれむさしの、ひろき殿つくり、みつはよつはのみどりにかへり、つくは山のまげきいとなみ、このもかのものかげたのもしく、日あらずしてものごとくならんと、ついとりたつるむろほぎに、いはふことばのいづみやてふたかどのをかり、野中の清水むすび置し、もとの心うしなはじと、入來る人々中々ところせうなん、そもくとしのはじめのことぶきは、すでにまうしおさめつ、

なをはたもれたるまらうとやあると、日をすぎはしのとりあへず、雜煮もちといふをもて題とす、もとよりもろ人の心を大根として、よろづのことばのなのはともなれ、ば、里いもの中をもやはらげ、やきとらふのくしのたけき心をもなぐさめ、目にみへぬ鬼神に、青こぶとられんもはかるべからずと、匂ひすくなき花かつを、そのひとふしの連中の、むしろの末にもあみつらねてよ、
いもか子の髪の毛ほとな青昆布に
つなく禮者の大さうにもち

栗花集序

年ごろ栗のもとにたすゝみて、落くりのみあつめきゝあつめたる、みづくのかたちをつかねたれば、そのまゝ栗花集と名つく、みる人さゝげの花のみじかきを見て、この花の長きをいとふ事なけれ、

茶杓記

石原氏に代りて作れり
いにし寛延己巳の秋、近江の國三井寺の櫻の根をわがちて庭にうへ置しに、志賀のうら浪たちかへり、としく春のながめたへせず、ことしいさゝかその下枝をきりて、茶杓となし、人のもとにおくるとて、

そのよし箱のふたにかきつく、猶一爐の清風をそへて、百花の餘香にあかんとなり、

隣家におくれることば

むかひ三間兩となりとは、ふるくよりいひならはせど、將基のこまの銀將のごとく、うしろをおるすにしたるもおかし、小家がちなる夕がほの宿に、きた殿と聲をかけたる、もし日あたりのよき家ならば、きはめてうしろ隣にもやあらん、かならず隣ありとの給ひし孔子を、東家の久兵衛と覺しかたくなものはいざしらず、隣の醜をかりにやりしは、微生高が一生の名おれにして、隣のちやぼをぬすむなどは、孟子のよき譬なり、またその孟子のおふくろは、隣をらみのむづかしやにて、たびく豆いりをくばり、子どもあそびの土なふりに、石ころでかひ物しても、浮世小路の店をかへられ、まして寺町門前地をさらへば、淺草谷中の住居はなりがたからん、宋玉が東隣のあねさまへは、楚國一番のたてしやとまり、喜撰がわが庵は小野小町が隣にみゆ、美濃と近江のね物がたりは、木曾道中にかくれなく、隣の寶をかぞふるがごとしとは、童子教にもまゑせり、隣の糞糞は

わが内の澤庵漬よりこのもしく、隣をらすの牡丹もちは、春慶ぬりの重箱におどろく、隣のばあさま茶をまいつたとは、どうまいつたこうまいつたの口拍子にして、何の意義なく、隣の疝氣を頭痛にやむは、借上なる事ながら、いさかひ同士の軒ならびより、まだ深切なる方にやあらん、われらもとより猫の額ほどの地にすめば、馬の尻をかく長屋住居にもあらず、くらやみからひく牛ごみのほとり、東南にちまたあれば、この二方に隣なし、北には姉弟はた甥など家おしおれば、他人のはじめの隣ともいひがたし、たゞ西隣のあるじのみ、まことの隣といふべくして、またしき中の垣ねより、一もとの柳さし出たるは、彭澤か五もともまさらたるに、この比いとよりかくる春霜の、とけかゝりたるほころびくちいはんかたなし、ひと日隣のあるじ、木こりに命じて枝をかかさむ、あるじのいふ、この木はわがくりやのかたにあれば、みはやすべきかたにあらず、たゞ隣をおもにつくるべしとて、はたそのもとに桃をうへしむ、木こりなぞといへば、たゞうへよ、花さきなん時、隣のすのこにまうたげて、酒くま、しなどさ

れたるいと興あり、とをき三千年はいさしらす、まづさしあたりて此はるのながめなり、網船に棹さずして桃源の洞にいり、夜船にのらすして伏見の里に旅ねすべく、物いはぬ桃もこととひかはす風情ありて、ねふたき柳のよきはなしあいてをえたりといふべし、長嘯子がぬすみてうへしは、あくる日のわびこともむづかしく、杜子美が樹木の進物は、むしくひもまじりなん、われはたゞ天々たるをまち、灼灼たるを愛す、葉々たる葉を行水にむしり、蕪たるその實に長竿を出す、所存は青柳のいとかけて、毛桃の毛頭あらじといふ、

三年になるてふ桃を垣こしの

はなの先にもみるぞうれしき

春日唐衣橋洲初會狂歌序

けふなんくれ竹のよつやの里に、から衣きつ、なれにし友かきをつとへ、軒端の杉の丸太をまると、大三輪の酒たうべよなといひおこせ給ひしに、この比日でりうちつきて、すぐなる柳のいやな風にのみなびき、ものうきわらびのちりほこりたちまされば、水のとばしり池のいろくすにをよび、火あやう

しの夜行わり竹のふしどにひきしを、このひと日ふた日春雨をほふりて、もろ人の心もやうやくおちる侍しかば、いさやされ歌のゑにまかりて、むすべる口をひらきてんと思ひしに、よべよりわらはのねちの心地し侍りて、はたえもかのこまだらに、時々らぬ山をあげ侍りしは、世におこなはるゝもがさにてもやあらめと、ちかきわたりくすしのがりゆきてとひ侍りしに、とくきたりみて、さなりされとすんよるめり、なひやしそなどせいするに、日比は四方の人にまじはりて、三たび門をも過てしかど、かのなにがしがいいひけん、その子のは、もわれをまちてとかうやしないきこゆるものから、けふのまとるにはづれぬる事の、よにどころなき思ひをのばへて、過し折からうけがひ物せしことばのせめを、ふたぐといふ事しかり、

初雛賦

門びらきの御祝儀すみ、真綿のつむひのもてあそびもの所せく、桃のやうく咲そむる比、このこのこ、にとつぐへぎ、ひいなあそびの調度もとめんと、十軒店の二階に雲の上の雲をつかみ、麴町の室咲につ

くり花の花をかざらんと、鶏合のめどりときをす、むれば、潮干のひかぬて、親の心こそおかしけれ、内裏雛の袖はかけ鯛の尾をさかだて、次郎左衛門の丸顔はたまごに目はなつけたらんがごとし、紙ひいな雨ふりに腰はたゝすと、てる／＼法師のかたちにて事たりなんを、今は古今の雛の装束の詮議より、大宮人を裸にして、折からの桃華葉に一條禪閣のお肝をつぶさせ、ふらその壺井も義知ぎちと爪をくはふべし、小人形の寸は箱のふたにあらはれ、男ともみへ女ともみはやすべきかたにはあらぬが、長たぶの首うちかたふけ、足のうらより竹釘をうちつけられたるもいた／＼し、からくりこそ猶おかしけれ、綿やの窓に弓うつ音の心地し侍りて、唐子の雪をまろばし、亂局の獅子をまはすも、みなひとつひきなるよ、されどこれらはみな古代にして、石女のはり箱の上にはげたる蝶足の膳をすへられ、見たふしのふる道具屋にみてつけの日切をやなげくらん、近比はやしかたといへるものできて、きりかぶるのせんじをもて、芝居の下座にやうつしけん、笛小つゝみおほつゝみ、大地謡までひとつをかきては事

たらぬ心地ぞする、はだか人形ははらかけに美をつくし、六尺の手まはり鉢巻に氣をつけたり、まして調度はのり物外居のみにかぎらず、みづし黒棚は東山殿の床かざりをあざむき、簾筒長持は座敷持の二間かとうたがふ、一双の屏風は柳櫻をこきませ、式正の本膳にあさつき鮎はまぐりもおかし、毛氈まき幕うち廻し、落雁の鯛杉折のはせ、草もちのひし、豆わりの菘、山川白酒は豊島屋矢野をかたふけ、饅頭干菓子に鈴木金澤をつくす、かゝれば紫清少が筆すさみはしらす、加田粟島の故實は猶さらうとくしけれど、世におのこいもちてのぼりいかめしげにたてならべても、柏もちまきのかはをむくもうるさく、干鰯かさこの齒にはさまらんより、先何事もさし置てくひもの、多きこそ、こよなうにきはしき節句なれ、

樟腦の匂ひもまだき箱入の
むすめのことしけふが初雛

初職銘
鯉かせをふくみて、魚木にのぼり、劔さやを出て、鬼地をはしる、あがりかぶとの金箔は、延喜式の儉

約をつたへ、あさかの沼の花がつみは、中將殿の歌枕にして、比はさつき初のはり、紋のあやめもあざやかに、月ののぼりのごとく、日ののぼりのごとく、終南山の進士のごとく、柏もちのはのしげきのごとく、菖蒲刀のはかけすくすれず、猶竿竹の直なる道をたて、つけたるちゝをはづかしむる事なれといふ、

初瓜頌

二月中旬の青籠は、唐詩にあらはれ、山城のこまのわたりと和歌にもよめり、曲禮は六かは半にむき、兒手柏はふたえにつゝむ、かの青門の五色にまされる、さかりの花の江戸往來、當所の新田鳴子瓜は、四谷の馬の履をいれず、茄子のならぬ蔓をもとめて、目にみへぬ鬼をまてやる、うまいかな甜瓜、其仁にしかんやなかご

わらはべもくはまくはうりめづらしと
兩手にもちてころびうつ也

初鮭傳

はらゝこのまやうじ年魚、その先東海の人なり、文治の比源廷尉きぐるみ王にまたがひ、奥州高館の亂を

避てゑみしに入る、よりて名を變じてさけといふ、いしかりの川邊にすみ、いちごといへる妻をめとりて子をうむ、名つけてはらゝ五郎といふ、源順か和名に、その子いちごに似たりといへるはこの故なり、年魚その顔の色きはめて赤し、人呼て赤光と異名す、性急にして、進む事ありて退く事なし、その年の秋にいたりて百千隊をなし、士卒をひきいていしかりの川にのぼる、一尺の劔をふるつて鎌倉を襲んとす、佐々木三郎盛綱討手にむかひ、そのはた頭楚割四郎なるものをうちとり、首を折敷にすえ、小刀を相副へ幕府に獻す、幕府御威のあまり御自筆を染られ、一首の歌を詠じ給ふ、時に建久元年十月十三日なり、事は東鑑にみえたり、年魚たゝかひ利あらすといへども、その太刀風にあたれるもの、三年のふる疵起りて、こと／＼く死せしとかや、その時常陸下總の人、はじめて年魚が猶ある事をしり、はつざけ／＼ともてはやせり、或はいはくひたち坊海鯨なりと、又貝原翁の説には、鮭にあらす、鯨なりと異説まぢ／＼なり、年魚時のいたらず、月の迫れるをまじ、鹽引に引まじりぞき、越後の國山川のまろにかくと

いふ、あるいははいはく長門なりと、大酒公いはく、われかつて南嶺子にきけり、あるひと病中に河豚をくはんと欲して醫生にとふ、その書簡に河豚の正字をかきて鮭とす、醫生本草をえらすして、鮭の性はよろしきものなりといふ、病る人河豚を食て死すと、此説はなはだ非なり、河豚もと鮭にあらず、これなん秀の苗をみだる多田民が臆説なるべし

初霜解

初霜くをきやすく、またとけやすし、柱あれともふとしからず、花あれどもまぼむにはやし、雨冠に相の字をかきしは、雨と雪との相のもの歟、もとの露末の年の順にあたらば、さしづめまもの訓なるべし、それ青女いたりて時を感じ、君子ふみてなき人を思ふ、軒の妻さへまろくと、あらたに薄化粧したる橋の、ゆきけた所まだらにふたつみつよつ足跡の残りたる、月おち鳥なき、もみぢ橋の船のねざめ、まら菊の花の心あてちがひも、いつしか師走女の霜やけとなりて、つゝに手水鉢のかたき氷にもいたりなん、青柳の絲よりかくる春にもなれば、百たらぬ八

十あまり八の夜のわかれをやなげくらん、星と霜とのうつりかはるは、たれもえりたる事ながら、えらす明鏡のうち、かしらに霜のをきそむるこそ、ふたゞとけしなきうらみなれ、

臍穴守禪師におくることは

もろこし青州に臍縣あり、わが近江には臍村あり、天竺にては黄金のはだえに、臍くり金をたむるとかや、そもく四支九竅の必用を考え、この一物の不用をなげく事は、自墮落先生の臍人の説、也有翁の臍の頰に事ふりにたれど、名におふ臍の穴守禪師、臍下に心を落つけて、口から出臍の文をこふ、よりてすばしりの臍のなまくさきをいとはず、臍かはらけのさしも草、たゞたのまれし口ふさぎに、いさゝか臍の垢をひねるにこそ、

ざれことにお臍の笑ふ聲きけば

あななき笛の心地こそすれ

吉田李園翁を祝することは

おほよそ忠臣は、孝子の門にもとむとかいへれど、忠孝ふたつながらまたくする事かたしとなん、こゝろ見にみよ、たらちねの病をみるとて断をたつれば、

もゝの祿まで其中にあり

邊越方人をいためることは

方人方人、むかしは日のもとのはしのほとりに、朝市の利をあらそひ、今はつき地のおきつきところ長夜の夢をむすぶ、その世にあるや親につかへ、妹をめぐみ、その燕にあそぶや、詩をならべざれ歌をたしむ、その志をたつるや、あき人のよきぬきん事をはぢ、その家をおさむるや、小鮮をにるがごとし、われかつてみづからあやまてり、なれまのあたりいさめてかくさず、われかつて人にそしらる、なれあなどりをふせぎていれず、たとへばくしの子路を得て、さがこと耳に入らざるがごとし、今や時うつり事さりて、春もまた半を過ぬ、これに告んとすれば、其人花に先だちてちり、これにまみへんとすれば、其影鳥のかけるがごとし、いたれるかなしみは文なし、つかみしかなる筆をとめぬ、いにしへよりみな死あり、ひとり西の方人のみならんや、例の友どち例のされ歌、外には何も手向なし、みたまそれしる事あらば、こひねがはくはうけよといふ、天明七のとし二月廿六日

君のとのゐに人だのみをし、遠き先觸の間屋場に、具足櫃のふふをかゝやかせば、ちかき目の前のおふくろの佛間の氣をやすむる事なし、こゝに李園先生の父君、ものゝふのまねふべきわざをとりて、何がしの國の守につかへ給ひしが、遅々としてさるわけありて、そのゝちなくなり給ひしより、今の李園君にいたるまで、三十あまり八とせ、松柏のみさはを守り箕裘の業をつぎ、梓弓やなぎのはを百歩の外にうがち、かつ色みするやり梅の一枝をかざしとして、つるきたちはき庭のけいこ場に、やつとうくの家聲をおとさず、ことし天明六とせ、ふたゝひ錦をきさらきの比、もとのことくめしかへされ給ひしは、まことに忠をかね孝をそなへて、二なきものゝふの鑑なるへし、やつかれすてに先生を去り、また其子をしれり、其子よくその道をつたへて、かたはらされ歌をこのむ、よりていさゝか、たゝえごとをのべてその子にしめす、猶おやのおやのふみわけ給ひし道筋をたがへず、子の子の末をみちびける先達に、たら給へかといふ事しかり、

たちかへり李の園の花みれば

百喜齋記

すみた川を前に、まつち山をしりへに、かさゝきのわたせる橋にはあらぬ、今戸といへるはしのほとり、うれしの森のよろこびからず、もゝのよろこびを告る菴あり、かのあつまぶりにうたふめる、のびあがらねみえぬてふ、何かしの鳥居もみわたされ、高瀬の高きいかだの長き、舟やかたのちりを動せるは、みすちの絲のゆりにして、ふするの牙のはやき小舟は、さんやわたりの里ちかきゆへなるべし、春は角くむ牛島のおしの若葉、波こゆる洲の上にはしとあしの赤きとりのつゝ居たる、すたのつゝみの川そひ柳、やゝしけりゆく夏の日の長きなかめに、薫風微涼を生しては、玉樓金殿の高きをもうらやます、鴈の玉章堀にわたり、白髭秋葉の黄ばみ落て、冬がれの炭がまならぬ、瓦やく煙のかすかにたな引たるは、小野のけしきに思ひたぐへ、あづま橋の横おりふせるは、うちのわたりにも似かよひて、とりあつめたる所のさま、もゝの目をよろこばしめざる事なし、あるしは淺草の根ざし深くおさめし、よきあき人のみくらまちのほとりに生ひたち、みさふらひみかさ

にはあらぬ三の時の、よね給ふ事をつかさどれば、その身は市にありながら、おほやけの事にかゝつらひありくもいたつがはしと、ことし竹の子にゆづり松のはをかくまでも、浮世の外の路次口に茶事をのみたしみ、まらうとあればあるじまうけて、大空をおほふばかりの廣きまね、大きなふすまつくりてんといひし、むかしの人にもはぢざれば、あるじのひとりよるこぶのみならず、またもゝの人のよろこびならずや、

春夜伯樂宴集序

それあめつちは萬物の宿屋なり、光陰はもゝとせの同行なり、まかうしてきちんは闇のことし、ねがへりをうつ事いくばくぞや、古人燭をとりてはたごにす、まことに故あり、いはんや一椀われにすゝむるに、流水をもつてし、大會われにかすに、筆硯を以てす、伯樂のむまぶねに遊びて、千里のこまごとをばく、今夜の秀逸はみな曉月房たり、われらが詠歌はひとり補陀洛にはづ、兼題いまだよめず、探題すでにいづ、權焼をさいて花に座し、夕かきを呼て月にあふ、批判あらずんば何ぞ勝負をわかつたん、もし狂歌のつ

がひならずんば、ばちは角力の太鼓にあたらん、

春駒のいさむ心をたねとして

よろづの言のはく樂となる

宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれあめつちの

動きいだしてたまるものは

よものあか下終

四方の留粕

序

此あかは吾酒ならず、四方に知る赤良のうしの醸し酒ぞ、うまらにをせさゝをせくと流行唄に浮れたりし、安永のむかし、はじめてこちけいの口をひらきて、狂やく好むたはれ人にすゝめ、手酔あしゑひ酔くるはせ、一筋の路をともしに踏せしより、千鳥あしの跡久しくとまり、今も昔に仁寶鳥の、かつしか早稲のうま口なる、うしの新醜もがたと、ふみのはやしの杉をまると、たづね来る人日々絶す、げに戯もんさうは年月にさまかわりて、あらたなるをおかしと思ふ習ひなれば、何とかやの酒の十とせをへてそこねざるも、口なれたるはめづらしからず、然りとて酒つくる才なき人の、まぼり出したるは、新しきも味ひなし、かくては何をちからとしてたはれうたをうたひ、戯れ文をつくるべき、瓶のつくるは樽の耻とか、いざたまへよきあか乞にと、書屋ともうしのみもとに参りて、此殿の奥の酒

屋のうはたまり、あはれ中酌をだにとこひもとめたりしに、留粕といふ物四十枚ばかりとう出て、かう僕くさきものながら、幸ひに接骨くすしの泥鍔にもかゝらず、漬物店の桶にも入らずて、爰に留粕のときりて久しきが、さすがに人酔はすへき所なんある、かの劉伶が寝むしろに敷、億良の大夫の寝酒にあたゝめけんやうに、からの大和のねごとひ出すたねともなるべくは、そのまをすゝり、その糟をくらひて、ふみ商人の腹をこやさせよと投あたへ給へりしを、やがて海樂の櫻木にゑらせて、糟塔のかけす崩れず、幾久々と南嶽館のあるじとともに、酔くるほすもまづ粕の匂に酔るなるべし。

四方歌垣真顔

文政二年己卯正月吉日

目次

上

- 狂歌新玉集序
- 狂歌千里同風序
- 龜樓狂歌會序
- 歳旦手鑑序
- めてた百首夷歌序
- 太平樂卷物序
- 江戸花海老序
- 仙術影書はりの虎の巻序
- 飛花落葉序
- 現金論序
- 唐來參和戲作の序
- 金銀開運簀篋内傳序
- 通言無茶揃序
- 和漢同詠衆序
- 續百鬼夜行序
- 百鬼夜狂集序
- 野夫鑑序
- 織華集序

牛天神集會序

狂歌すまひ草序

職人部類序

江都二色序

送真顔旅行詞

幼戯の圖の序

鶉衣序

五葉松序

馬蘭亭舊友尺牘帖後序

筆はじめ

吉書初

箏笛といふ笑話の序

山東京傳書美人合序

八月十五夜籠中の月をめづる言葉

續阿多福面

狂歌の反古あつめたるものゝ跋

目次

下

春の遊びの記

狂歌堂に判者をゆづる言葉

二水樓の記

角田川に三船をうかふる記

此君盃の記

談洲樓記

里の花燈籠の記

岡目八目草壁紙の
評判記也

狸の圖贊

狸々の贊

織物の贊

蛙の贊

七拳圖式

新酒頌

風流狂歌盃報條

土佐麻衣報條

壁書

三谷傳來吉原細見説

悼大飯食人祭文

ひとりごと

五十初度賀戲文

狂歌三體傳授跋
 長櫃序
 旅日記のはしがき
 謎の言葉
 鬼念佛賛
 十三夜十三體
 謠武藏野
 開帳場縁起
 錢湯張紙
 御祭禮番附
 請狀
 中空祓
 巴人集後序

四方の留箱上

狂歌新玉集序

久かたのあめ、輕口をひらき、あらかねのつち、をも口をむすびしよりこのかた、神代のむかし、あまのうすめのちぶさには、猿田彦もたなうらをうち、月のみくに、何が尊者の花には、くどもも微笑をゆるし給へりき、さればきりに感せし翁も、時ありと笑ひ、胡蝶となりしれものも、笑を大方にとらん事をばづ、青樓の春の風に、ちのこがねの笑をかひ、廬山の雨の夜に、三つの笑ひの友をしのぶなど、いづれかわらひのたねならざる、わきて新玉のとしたちかへるあしたには、山もゑめるがごとしとかや、花になく鳥追も、笑上戸の盃をあげ、ちまたにうたふ萬歳も、したつゝみをなんうちそへける、や、春ふかくるみをふくむにいたりては、柳はみどりのまゆをひらき、梅はしろきはもとをあらはす、はるの詠めくさくさの歌、ざれたることたはれたるふりをのみかいつらねたるしりに、ふるとしのく

四方の留箱

れのしまひのをかしき笑ひの中に、つるぎたちはかせもちをうしなへるがごとく、ものゝふの道もかけこひにはたられし世のいとなみのたゞことまで、つゆしるしてひとまきとし、名づけて新玉狂歌集といふ、かくおとがひをとぎぬれば、飛鳥川のふちはせゝらわらふとも、さいれ石のいはほとなりて、こけたふるゝほど、うま人のうまさわらひや、いづこのやい太郎冠者、あるにもたらぬわれらまで、この時にうまれあへるをよろこび、弓は袋に笑ひ、書はひつにをさまれる代に、腹鼓うち、のどけきあしたに御茶をわかつて、わらはざらめや、たのしまざらめや、

狂歌千里同風序

改年の御慶千里同風、いづかたも同じ御事にいはるおさむる中にも、たはれ歌の道なかに、ささるれとよびあつめたる飴賣引の、いと口きれぬざれこといも、みな櫻飴の色をふくみ、ことごとく分銅の玉をみかく、智恵の袋のよねは八斗の才藏をあざむき、言葉の泉の盃は、百千の鳥追をまねふ、みやことなくひなとなく、たくみなるもつたなきも、手鞠の

五十一

歌の数あげてかそへかたく、針うちの紙のあたへ、
これがためにたふとし、木でもかねでも俗耳の耳か
きにあたり、鼓と吹ものと詩鷹のばら合によろし、
これなむ長閑き御代をうたひものせる、撃壤の歌の
はつねならんと、然苗のひとくく、羽子のこのと
をはたみそじあまり、若草のところまだらにかいつ
けぬれば、かへる雁の跡なが先なも待らんかし、

龜樓狂歌會序

そもあめつちは、萬物の大芝居にして、光陰は百と
せの居つゞけ客なり、はつ日の鼠木戸、留場のとめ
てといまらず、狂歌の大門口、會所の會たゆる事な
し、けふなむ壺屋の淡雪さへ、袖の梅のかをふくみ
春風のふく山三階のたかどのにみち、言葉の惣花内
證のはり札にひらく、舌つゞみの大鼓について前へ
くくすすみ、され歌の諸君このところへ出て遊ぶ
御老人様まづかに跡よりいたれば、御町中様ますま
す御機嫌よく、武士も長道具をわすれ、醫者の外乗
物をもちひす、張子のお馬お駕籠でこす、名におふ
かり橋三曲にまがる、すみだ川のみかふの人くく、
龜やに人くくこんなくうきのかめや、うどんげ

のたいめんは、今日が初日にして、むれつゞきのじの
題詠は、年中月次の紋日、廿日頃よりみせをひくま
で、入りくるく大入の會、くどうくも此會に、
おや馬鹿らしうおさいらめや、

歳旦年鑑序

たはれ歌は人の笑ふをのみたねとせしが、いつしか
みのあるやうにそなれりける、こゝに京町かほ茶の
元成、ふかく此道をたしみて、すり鉢をかか鶯、なか
しのしたの蛙まで、いづれかむだをいはざりける、さ
ればゑんりよも内證の客、ゐろりの枝すみ折くくに
たえず、けふなむ智恵も淺草の、市にたつたるおす
がたの、おかしきふりのすき人ら、まがきのもと
木あみを、室咲の梅の花棒として、手桶のたがのわ
れもくくと、おみきの口々よみ出せるさま、俳諧に
あらず詩にあらず、唐土のとりと日本づみわたら
ぬ先の春がすみ、其たちうりのなかごもよく、とう
なすのとをはたくくそ、よそくくしうかいつくるこ
と、はなりぬ、

めでた百首夷歌序

抑めでたいと申は、天竺にてもはじまらず、大唐に

てもはじまらず、我日本の夷三郎、めでたいつりの絲
より鯛、此めでたいを釣上しより、めでたい事のか
いみ鯛、末の代までも引出す、延喜の御代のひだひ
箱も、ふたあけて見ぬ京物語、今や四つの海波静に
して、沖釣のめでたいかゝらぬ日なく、十日の雨風
さはりなくして、一升のつちくれ金一升の富にうる
ほへり、されば弓は袋棚の上にする、お太刀はさ
やがたの小袖にまとはれ、よろひかぶとは笑道具と
なり、鐵砲は樂ぐひのたねがしまとなり、酒は酒屋
に、もちほもちやに、たけき親分も太平樂をならべ
あやしの百性も萬歳をとへて、誠にめでたう候ひ
けるとは、今この時をや申へき、かゝるめでたき御
代なれば、かの唐土の何がしが、何でもかでもよし
くといひし跡をふむとはなくて、よるもひるもめ
でたいくといふ事を口癖にして、めでた男と名た
る人あり、われもまためでたい事をほり川の、流
のまゝにのみ出せし、めでた百首のたはれ歌を、め
でた男にしめさんとて、覺へずひとり笑ふ門に、今
福といふ昔林の來りて、春待花の櫻鯛、あまたひの
あまねくつたへ、たいいしのはほともなるとほね

の、なみくくならぬめでたい中のたいのあらを、三
ッ道具のすきものともにせんといふに、まづ手を
うつておまつたひ、いく千代かけしかけたひの、尾め
でたいとも見給へかし、

太平樂卷物序

天竺の婆羅門組は、偏袒右肩の片はだぬいで、せん
だまどろぎや何んの事だと張込ば、もろこし燕趙ひ
がぬ氣の俠者は、ちんぷりかくさく、ちんないらう
じや、ぐわんくでけつかれとほざく、わが日本は
柔和理と、あなにへやのうま事から、二柱の親指が
國々の小ゆびをうみ給ひしより、二千年來おみこし
をすへた蒼生、唐天竺にけちりんほども、ひけをと
らぬ太平樂、其太平の御代につれて、此頃はやる狂
歌師の、とつと昔のお師匠さん、曉月房が酒百首に、
酔てのち太刀ぬく人は酒の人、太平樂をまふかとぞ
見るといふ句があるが、太刀をぬくだけまだ野夫だ
よ、拔べき處をぬかりんと、ぬかぬ太刀の高名は、
虚はないてふ本所の親分、相生町のはへぬきの桃栗
山人、太平樂の一卷に、ちよと兩國のばしづめまで、
出てもらはふと聲懸られて、かた山の手も足もない、

よもやに懸る巻のはしに、是がじよさいの序の字でも、ないじやア〜〜ないか

江戸花海老序

めでた〜の若松さまよ、枝も榮へて葉もしげる、その千代の子の目出たき顔見世、名もあらためて海老藏と、尾ひれをふつてふりしきる、時雨のあめの晴間もまたで、登蓮ならぬ東牛子と、四方山の手のかた隅から、住吉町の成田屋をとひはべりしに、あるじは盃とりあへず、折からのにひ酒みさかなに何よけんよ、あつ蕎麥のあつきもてなしにて、天地一大戲場の外に、又四疊半日の閑を得たり、いでや最負の腕をこく、吾黨の連中のはなしの種ともなれかしと、此たびおくれる狂歌うけとり、自筆をとつて梓にちりばめ、世に傳ふる事左の如し、

仙術影書はりの虎の巻序

抑仙術影人形は、人の目玉をくらま山、まつくらやみから牛若丸、鬼一法眼の弟子となり、ちよ〜らをもつて娘をあやなし、得給ふ所の虎の巻、新かげ流のかげ人形、一子相傳の秘書として、おそばさらずの影辨慶にさづく、其後辨慶衣川にて、立往生

のかげ法師、水にうつれる姿をみて、なんたら法師の柿のたねと、とつかへこうと鳥がなく、あづまの方の去御屋敷にて、此書をもとめ得たり、夫影の數さま〜にして、かげまかげみせかげ芝居、かげはりかげせんかげひなた、月影日影花のかげ、松かげ帆影柳かげ、山かげ木かげみかげ石、鳥かげとかげかげの病、歳旦帳に初日影、勘當帳はわかかげの至り、おかげでぬけた伊勢參、七尺去て師匠のかげ、人ごといへばかげがさす、形にかげの廻燈籠、まはつて来たは〜、親もかげとき子もかげ季、かげ清かげ政勘解由左衛門、湯かげん火かげん七かげん、かげの奉公かげ這入、芝から神田のかげ祭、七ツのかげの將門が、鬼かげといふ名馬にうち乗、木の下影を宿として、物かげくまなくさがしても、こんなかげ書が唐にもあるか、日本一のかげ勝團子、ひとつ御覺なされても、月待日待庚申待、御人影のすたらぬあそび、見るかかげもないかげとは違ひ、ちつともおかげのない商賣と、思ひつくばの山うりが、まげまかげ書の長口上、おたち合の御方御用はござりませぬか、右に願すかげ人形は、すつと口もとの處にして、初學

のいろはに本屋の望み、此外かげ角方の四十八手、相馬の將門七ヶ條の傳、日待の夜食の夕さりあるいて、どじよふみならふ鷲の足どり、今きりかけたは兄さんか、あふ内々のお縫が秘説等は、予が家の奥秘なれば、猥に他見をゆるさず、御執心の御方は、來つて口傳を請給へ、處は鐵砲町の百丁目、あいた口から出格子にて、おや〜どう四郎が隣、とんだや萬八が筋向ふ、雪隠がくさい店ちんが高ひ、弟子入が五百疋、盆暮が千疋宛、暑寒はお心待まだひ、秘傳のゆるしは七兩貳分、壹分自慢の座敷藝、八人げいの目のあく法もあれ、八天狗の鼻をそぐとも、是が出來たらまてごろうじろ、打身くぢきかこて療治、けがの基と笑は、笑へ、飽までくらひ媛に着る、うへつ方の御目覺し、お子さま方のはらつこなし、これをするも猶己にまさらん、

飛花落葉序

春の朝、中の町にちる花を見て、山屋豆腐の雪かとうたがひ、秋の夕正燈寺の落葉をわけて、淺茅が原のつゆをあはれむ、こ〜にどこのか風來山人、一文紙齋の絲きれしより、かさおかれたる狂言綺語、讃佛

ならぬ六部集など、すでに書林の櫻木に、ほひて、茶屋にことはる紙花のごとし、たゞ相對の紙花は、風前の塵とひとしく、根なし草の根に歸らず、廊下座敷の箒にはかれて、終に砂利場のすきかへしとならむ事をかなしみて、千早振かみ屑を、くれ竹のよ〜ひろひあつめ、近からんものは目に見なんし、遠からんものは音にきく、耳搔寮の腰張の張交とはなしぬ。

現金論序

いにしへ穴の中にすまゐ、恙の用心計りして、酒薦一枚もたぬ世はいざえらす、其後呉服の二女、唐の請人入主にて、日本の飯につきしより以來、開帳で見た十二一重、雛さまの装束はいともかしこく、麻上下の纏々たる、黒仕立のきん〜たる、衿袷の身柱もとから、裾はきの跟にいたるまで、其情をのべその穴をさがして、百馬があらはす一狐の腋、誠に千金かけ直なし、正札付といひつべし、嗚呼天人の羽衣も、青樓の跡着にしかず、呉綾蜀錦も三ヶの津の貨物にまかすと、むかしの人の魚綺羅を忍び、今の通の見え坊を歎じ、かけ硯の向ふから聊筆を染くの

み、

唐來參和戲作の序

夫支那の地まはりは、漢に遊女ありとうたひ、天竺の貝多羅は、街賣女色とかきのめす、わか日本のふたばしらは、床柱にもより給はず、蒼海原の青傘に萌黄さなだの紐といて、出合のひとつ穴にえやと、天神七代御代參、地色ばかりをかき給へは、人の代となりて、伊勢源氏の物語にも、ゆびきり髪切のまことなく、二條の後若紫も、おいらんの意氣地心もとなし、今や京の女郎に江戸のはりをめたせ、長崎の衣装をきせて、大坂の揚屋で遊ぶ自由自在の樂を得る時にあひて、和漢の人の大一座、晦日の月のまん丸山に、むすび卵子の四角な文字を、唐來參話といへる中位なる色男、あらゆる数にかきねの外、ぶらりとさがる瓢箪で、餘をおさへた大あたりは、體成ものから我等請人にたつものならずし、

金銀茶盤内傳序

謹て管から天ちよくを窺ふに、雲井の菊を天つ星とあやまち、老父の顔を梅星かとうたがふ、爪に出るを物着ほしとよび、軒端につるを甘星といふ、外眼

星は内眼星にちかく、竿はしは物干にかゝる、丹星は太々講中の爲に、抽揚星は遊女の迷惑星たり、津輕の分野に臘腸星、松坂こえてやつと星、是らは二十八宿の、問屋仲間にあらず、茶宇の袴の星入の類なるべし、このころ星見世の書肆何某、篋盤内傳を携來て、頻に序がほしいといふ、是又金銀開運の種なるべしと、星をさすことまかり、

通言無茶摘序

武は戈を止るとは、蓋典舖の藏の内にして、花は三芳野人は武士とは、豈名妓の言の葉ならんや、されど長壽臺の安に居て、猪牙船の危を忘れざるも、太平の代の御子様かたに、昔のきつたりはつたりを見て、今の悠々寛々をしらしめんと、おもひつき地のそれならで、芝全交がきたへし名作、それから御覽なされよと、さしつけられてお小柄は、ありやなしやとしかいふ、

和漢同詠衆序

天神七代地神五代の間の宿に、通神十八代といふとさありき、この時世界通にして、天竺にては大通佛、唐土にては漢通とも、梵字の阿字の夕がしを、蓼び

やしにし、文字の四角な玉子をも、ふはくにしてのみかけければ、まして和國のいろはにはへと、ちりてつとんと連彈の、口三味線の調子にのる、道行和漢同詠衆、からもやまとも色事の、中は丸山たい丸かれと、思ひそめたる筆ささみ、時代をおして考れば、凡十千萬八千年以前、わい／＼天皇の御宇にあたりとぞ、

續百鬼夜行序

子怪力亂神を語らすとはいふもの、口の下から木の石の怪を襲魍魎、水の怪を龍、土の怪を墳羊とは、魯の季桓子の井戸の中から、羊を一疋堀出して、問たる時の御挨拶なり、されば中華の歴々たちの、書おける山海經を始として、搜神述靈の諸記録とも、うそ八百の百物語、聞から出る牛に汗し、ヲヤ堂上の棟に充り、今此續編百鬼夜行も、石燕叟が繪そらごとを見て、摸摺窩の口あいたまかせに、ある事ないこと書あつめぬれば、もし箱根から先にすむ、石部金吉金かぶと、かぶりを掉つて嘲るとも、たんない／＼大事ない、ないものはふの化物はなし、東坡が野人とはなせし如く、しばらく是を妄言せん、そ

れ妄聽して可也、

百鬼夜行狂集序

あやしきを見てあやしまざれば、左傳の化物ばなしもつらしく、怪きを見て怪めは、六部の地獄の沙汰もまことならん、今の學者のおし事と、坊主のふしぎすきより、あやしきをあやします、かへりてあやしからざるをあやしむ、それ月日の眼風のいき、雲のびんづら雨のあし、海山かけてよく見れば、あめつちの間もまたひとつの化物やしきならずや、うば玉のやみの夜に、百のあやしき事をかたれば、かならず其しるしありといへるふること本づきて、此頃たはれたるうたの友どち、鬼神をもとりひしぎつべき體に、くるへる水をうしろたてとし、富が岡のきた深川のひがし、青きともし火の油ほりのほとり、鬼一口にわんぐらとかいへる何がしのみさうにして、物語を狂歌にかへ、其數百にみたり、もとより箱根よりこなたに野夫とばけ物なし、ないものはくひたく、こはい事はみたし、よりに奈良のさくら木にちりばめ、子どもだましのがごせにかませぬ、よむものこはきや、はたをかきや、

野夫鑑序

穴の中に猪あり、これを得んと欲するにかたし、一人曰、猪は睡を好むものなり、試に枕一ツ酒一徳利生姜味噌一片、細引を付穴の中におろすべし、猪酒をのみとろくと、枕を引よせひとねいりする處を、かの細引にて縛る時は猪を得べしと、一人曰、これ甚迂遠し、井戸釣瓶を落せしごとく、細引に碇をつけ、穴の中をかきまはすべし、猪の目鼻か、體の中へ引かけぬ事あるまじ、とり逃しは仕方なしと、一人曰、所詮むじなは人を魅すけものなり、人間の智恵才覺にて、効を奏する事かたかるべし、其細引を縮にして、穴の口にて三味せんを引、つろなく、猪をつろなとうかすときは、萬に一ツもまぐれあたり、猪を得まじきものにあらすと、按ずるに腹の中の病は、穴の中の猪にあらすや、はじめの一人後世家也、其次の羅漢は古方家なり、跡のくのせんじやう、常のごとく七加減、古方ともなく後世でもなく、せう事なしの山師の玄關、見ん豚びんたる時は、胸だくたる牽頭坊主のはやり醫者なり、駿河の國の富士の人あな、穴のむじなの野夫鑑、化

繼華集序

生ものか魔生ものか、いざ立よりて御覽候へ、玉くしげふたよの月は、中御門右府の保延元年の記に見へ、寛平法皇の明月無双のみことのりより起れり、菅家の十三夜の詩は、三五十八の桁違ひ、十五夜の字のあやまりにして、兼好が妻宿の説は、八月九月の間の宿、さらに本宿と定め難し、十三夜の影古に勝れりとは、法性寺關白のからうた、あけらけき御代の昔の影よりやとは、草庵集の和歌、十三夜の月花やかにと、源氏の巻に出たるは、あながちこよひの事にはあらず、たとへば五雜俎に田家のことわざをのせて、九月十三晴といふがごとし、此頃横川禪師の京華集を見れば、津の國住吉の社、此夕べ月なれば、巫祝の夜をつかさどるもの、かならず左遷せらる、事ありとて、齋戒沐浴する事つねに百倍すとなむ、その京華集で思出せり、九月十三夜を繼華會と名つくる事、建久二年に顯せし、眞俗交談記といへるふみに見へ侍り、きぬかつぐいもの土くれをうち、枝豆のさやけき後の月をめぐるざれうたをあつめて、しきりに序をかけといふ、繼華會の名のおもし

るければ、繼華集ともよぶべしといふ、

牛天神集會序

あら玉のやうなる日の若みこのおれませる、むつきのはじめこそ、竹に雀の百になるまで、いそぢの翁こおどりするときなれ、思へばむかし月代の空青みたる頃は、つねきく鶏もわかわかと、二日三日のきそはじめ、抱てねのびの一丁の蠟燭、沅湘日夜東に流れて、はやくたちまちにけふなんなく七種の、日本のとりと唐土のとりの、わたらぬ先の聲きけば、生れぬ先の心地して、みな大人の人の日なれば、かの物の部の翁のいへる、牛天神は大人なるべし、

狂歌すまひ草序

そもすまひてふことのおこりは、たはれ歌えたりぶりにももれにたる、野見のすくね當麻のくゑはやははじめり、また野かはづのなき聲よりぞ、太鼓に雨のふることはなりぬ、また歌合のはじめは、亭子とやらの御亭さんにおこり、ついでつてん天徳のころ、判の詞をまゐらせしより、三葉よつはに富札の、六百番千五百番の出ばんすけとはなれりける、こゝにいにしへの事をも、今のことをよみあ

らし、ちさとの馬もわいたためつべき、名におふ市のいち人ら、おのれがえてに最手をあげ、初會のお客をうら手とし、はれとなく雨となく、小とりつかひの鳥の子の、十日のむしろをはり、四方のまゐるしのみつ巴、あふぎもてうちわにかへしむ、もとより西も東もまらねど、右から左いなみがたく、つたなき心の内取に、出來合の判をくはへぬ、左右のかたやの人々ら、すまひとらならくはと雄たけび、まぐれあたりの點にあへよといふ、

職人部類序

そのはじめや、觴を浮べる江の流に筆をそゝぎ、百の工のわさをうつして、梓弓つくれるもの、子の、箕をつくるために奪はれ心たくみの老畫師も今は其國の底なき人の數にさへ入ぬるを、玉くしげふた、びうつはものをとくして、花咲春の櫻木にちりばむる事とはなりぬ、よりてそのことわりを冠師にかうぶらしめて、硯の海に棹さし侍るも、かのたくみのはじめ終りをまゐり侍るものならし、

江都二色序

わちはべの遊び物を書で（巻末）と記せし圖あり、北尾氏の筆に寫し、弄簞子の狂歌を添て、一ツの草紙とはなりぬ、繪はと、の目を悦しめ、歌はあわ、の笑ひを催す、てうちく、の拍子よき、はなしの鹽のまほの目に、かゝり出し糸口の、いと面白き筆を見て、硯の海の鱗形が、よき繪ざうしの種なりと、思ふ心の花にかけて、兒櫻木にゑる物ならし、明和十年睦月のころ、四方のあか人、飲懸山の麓に記、

送眞顔旅行詞

むかし丁寛とかやいへるもの、田何に従ふて易をうく、其東にかへるにのぞみて、易すでに東すと田何はいへり、今狂歌堂のあるじ鹿津部眞顔、たはれたる業すでになりて、四方の春秋に遊んとす、これなむ狂歌東西南北すともいふべし、

幼戯の圖の序

おほちうばの物がたりは、虎關禪師の異制庭訓にまゐるし、ねすみのよめいり猿のむことりとは、羅山文集のことばにも見えたるをや、かのみちとせになるてふ花の、名のみことく、しういひけたれたる何がし太郎が物がたりは、うなひ子あげまきのかしらさ

しつどへて、かたりつきいひつきつ、めに見ぬをにのすめる國の、たからもとぬしことくさは、まらきの國の旁色とかやが、こがねのつちのふることとも、うち出つべし、なべてかうやうのはかなきことわざも、今様はむけにいやしうのみなりもてゆけば、うつしるにもものして、まろきをのちのいましめともなせりけんぞ、いとかしこき、

鶉衣序

いにしへ安永のはじめ、すみだ川のはとり長樂精舎に遊びて、也有翁の借物の辨を見侍りしが、あまり面白ければ寫しかへりはべりき、夫より山鳥の尾張の國の人にあふごと、此事うち出るとひはべりければ、金森桂五うさぎの、裘にはあらぬ、鶉衣といへるもの二まきをもてきて見せ給へり、翁なくなりぬとき、て、なを馬相如が書殘せるふみもやあるとゆかしかりしに、細井春幸天野布川に託して、其門人紀六林の寫しおける全本を送れり、巻返し見はべるに、からにしまくをしく、頓に梓のたくみに命して是を世上にはれぬとす、翁の文におけるや、錦をきてうはおそひし、けたなる袖をまどかに

なして、よく人の心を寫し、よく方の外に遊べり、鶉衣の百むすびとは、みづからいへることのはにして、くつねのかはのちのこがねにあたらさらめや、右のたものとみじかき筆はなへたるもはづかしけれと、たいにやはと、けにもはれにもかいつけ侍りぬ、

五葉松序

二葉の松の色ようて、三つ葉四つ葉の殿作り、さがゆく里にひとしほの、色そふ君の名寄の株、けふゆづり葉を口にふくみ、五葉の松と題せしは、松にからまる蔦屋の板是は正直正銘の、相違あらざる自筆の文、返すくも十かへりの、花のお江戸の大都會江口神崎はことふりたり、嶋原新町はいざしらす、千代萬世もよし原細見、これより毎月あら玉の、としのはじめのときはの松、つきせぬ下葉をちよつとかく、

馬蘭亭舊友尺牘帖後序

王羲之が十七日の手紙は、唐づくへの上にあげられ、光源氏の二の町の文は、雨もりの腰張にすけたり、かの顔氏が家にをしべむ、尺牘書疏は千里の面目にて、雲州消息三月庭訓も、もとは錦帯のくじら帯、

これも去年の品川の噂、五十の翁のくり言なるべし、そのくり言はやめにして、夕霧がふじの山を張ぬきたらん文の数はいざしらす、（り）ではかどらぬ、かほよ御前の用事にはあらぬ、近比世に名たる狂士醉客の書簡を、一駄ほど馬蘭亭のあるじのあつめ置しを、馬の尻の後序ともなれかしとて、もえ杭に火のつきやすく、古川に水たえず、筆をとれば物か、れ、盃をとればいつでもかくのごとし、

筆はじめ

春は曙やう／＼懸取を戻してより、雑煮の餅も咽につまらず、祝ひ銀燭と詩に作れば子細らしけれど、古行燈の心の田づまとも化さうなるを、はしごの下にかたよせ、やぶれ障子はれ／＼と掃出すべきを、元日なれば箒もとらず、陳子昂が福如三東海とかけし掛物、目ざしのむきみ馬鹿がたけれど、初春の延喜を祝ひて、あやしき三尺の付床にさらりとかけ、伊豫籠は却て巻あげたる庭のけしき、そらるごとの浮み出るを、試筆とかいひてしたりかほに書つけたるも、大つごもりのくるしさを忘るゝに似て、巨燧辨慶とや笑はれなんとをかき、されば清女がすすみ

も狭衣の發語も、少年の春をめざるはなく、いつもうれしき正月心に、願はくは二十年あとへ、猿江りのごとすべりかへれと、我のみおもふかも、

吉書初

大つごもりの装束椀に狐火を見むといひ、洲崎の日の出を七つ起して見むといひ、二日は茶屋にゐる日の約束皆あらしめて、年禮の膝くり毛に鞭うち、日傭のかみの諸太夫を召つれて、玄關の式臺のあがりおりに、二三日の光陰を費しぬ、もういくつねて正月とおもひしをさな心には、よほど面白き物なりしが、鬼打豆も片手にあまり、松の下もあまた、び潜りては、鏡餅に齒を立がたく、金平牛房は見たばかりなり、まだしも酒と肴に憎まれず、一盃の酔心地に命をのべ、一椀の吸物に舌をうては、二丁鼓の音をおもひて、三線枕のむかしを忍ぶ、やみなん、我年十に餘りぬる比は、三史五經をたてぬきにし、諸子百家をやさがして、詩は李杜の腸をさぐり、文は韓柳が髓を得んとおもひしも、いつしか白髪三千丈、かくのごとくの親父となりぬ、狂歌ばかりいひたての一藝にして、王侯大人の懸物をよ

ごし、遠國波濤の飛脚を勞し、犬うつ童はも扇を出し、猫ひく蕨者も裏皮をねがふ、わさをき人の羽織に染め、うかれめのはれぎぬにもそこはかとなくかいたりすてぬれば、吉書はじめともいふなるべし、

鶯笛といふ笑話の序

春の山の端のわらひ初て、雪間の氷うちとけたるに、梅が香いきを吐かくれば、柳の絲もはらすちをよる、笑ふ門には福壽草、三つ葉四つ葉とさき草の、はなしの種を蒔初て、花さく春を待ものならし、

山東京傳書美人合序

花の色をうつせるものは、その匂ひを繪かく事あたはず、月の素を後にするものは、その明らかなる影を得る事難しとは、からさへづりの言にして、鳥が啼あづま錦繪は、柳さくらをこきませて、都の春の遊び物とし、千枝つねのりもおよびなき、時勢の粧ひを盡せり、わけて姿もよし原や、二のまちならぬいつの町に、名たゝる君のかたちをうつし、それがをのくみづからの、水莖をさへそへたれば、物いふ花の匂ひをふくみ、晦日の月のあきらかなるがごとく、見るに目もあや心もときめき、魂は四ツ

手駕籠といもに飛こいし、身は三ッ蒲團の上にあるかと疑ふ、かくうつくしき寫し繪には、僧正遍昭もいたづらにこゝろをうごかし、吉田の兼好もつれづれをなぐさめざらめや、因て此はしつ方に其ことわりを書つけよと、五葉の松の蔭たのむ、蔦の唐丸がもとむるに、いなふねのいなまむもこがましければ、猪牙舟のちよつきりちよつとつくり出て、立ならひたる中の町、櫻の花のかたはらに、深山木ともく、すつとみやまの山の手から、こはく筆をふるふにこそ、

天明四ツのとし辰の初春

八月十五夜蘆中の月をめつる言葉

蘆中の人々とよばれば、向ふの人々のそれにはあらで、吳の東門に目薬の看板かけし、さる人のことになん、海陽の江の邊には蘆の葉の笛をふき、難波の賤のひとふしには、あし苳の名を傳ふ、蘆のかりねのひとよゆるとは、百人一首の耳近く、あしの花ちる遠干潟とは、老葉集てちと耳遠し、抑天地ひらけしより蘆がひの如くなる、豊あし原の中津國に、名たゝる蘆づゝの親類より、したしき友どち、今日の天

氣のうらやみ、蘆屋の道満大うち鑑、大うちよりて月をかながみ、あし屋の里に蘆火たく、蘆の丸屋の原庭の、蘆のうちに圓居しつゝ、蘆葉の達摩の禪にもあらず、あし屋かまの茶人でもなく、蘆火浅水の舟さす漁父とはたしか見しり越、あし手にかける大和詞に、蘆荻の花の杜律をかじりて、蘆花の雪をほしいまゝにする、米顛か草書になく、紫塵のわかき手を握る色氣はなけれど、碧玉の寒き、蘆錐の囊のもぬけの才子、蘆水がかきし兩岸一覽、月の最中の郷に、あし分舟をさし入れて、蘆毛の駒のあしなみに、てる月なみをかぞへこむ、片葉のあしの片手わざに、此頃世上にもてはやす、五箇の冊子の一箇の奇會、畢竟一部の西園雅集の、あすは東渡の分解をきけ、

讀阿多福面

夫美人は天上より落、牡丹もちは棚から落つ、さればさかさにつるす硝子の危からんよりは、立白にまく薦の全からんにはしかし、此おたふくの面もかぶらす、罷出たる教訓本、ことばのはなは卑しといへども、燈籠鬘の透間かぞへて、二枚櫛の齒にきぬ着せ、

す、羽子板の殿さまかみさま、駒下駄の娘子達、お意
見をたまの上になさすかんざしの耳搔より、耳つとう
世の諷諫ともなれかしと、今大通の通の中へ、この一
通を書のこせしは誰そや、破鍋にとち蓋すてに、粥腹
得心が腹ふくるゝわざなればなるべし、

狂歌の反古あつめたるもの、跋

花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは、そ
の花も根にかへり、月も山にかたぶきぬ、今この一卷
を見れば、げに花ならば花筐、月ならば影法師

よものともめかす上終

こりしかの三人、橋の小島を先として、朱樂菅江く
わん／＼と長居すれば、四方のあからめもなく、歸
る方角をうしなひて、東方の明るもしらす、やゝあ
りて銀燭天井にかゝりやき、花氈地上にみち、棧敷の
障子に穴ぼち／＼とあき、樂屋の咳ばらひるへんる
へんと高く、三弦長うたはやしかなどいへるもの、
列を正して居流れたり、先一番に劔鳥帽子とかやい
ふめるうたにあはせて、あたりも照葉のきかづきを、
ひとさし舞しなりふりに、おもふ心のあればこそ、
跡の／＼の名にしおふ、いざ／＼なしに都鳥の一曲、
業平も氣はありやなしや、次に吉原すいめの、品よ
くとまりし竹の葉の、みたれし髪もいはけなき、乙
女の姿や、しばし、感ずるも猶あまつ風、雲のかよひ
路吹とぢし、樂屋の唐紙とあきて、二八ばかりの
たをやめ、燈籠鬘の透額、鳥帽子水干きの國の、道
成寺へとよひ出たるにぞ、作りしつみもきえ／＼と
して、君が名字のよだれをながし、名さへおみきの醉
心地、思へば／＼この子の金箱を引かついでもうせ
まほし、今迄あるじの繪にかける女を見てさへ、いた
つらに心を動かせしに、これや誠にせうのものをせ

よものともめかす下

春の遊びの記

論語しらすの言葉にも、繪の事は素きを後にす、曰
お禮はのちの事かと、上下はかまから栗も、歳神の
棚へあげて、白衣の三人御見舞申す、頃は安永八ツの
年、むつきはじめのよかの日、御代はめでたの若み
やのほとり、萬づよしたの何がしにて、寫繪の書ぞ
めあり、御座敷の上客は墨繪の雲のごとく、御勝手
の膳部は彩色の繪具皿に似たり、みなひとほけの霞
をくみ、硯蓋に燒筆をたつ、隣松が畫がける松魚は、
左慈が鱈よりあたらしく、蟻車が役者の似づらには、
壺屋が壺も底ぬけなるべし、蘭雨のおとり持、御舍
弟のおとり込み、銚子のかはりははかまをぬぐにい
とまなく、盃のまはりは錢ごまもはだしなるべし、
上戸は酒をのみ、中戸は飯をくふ、下戸は肴をあら
しふく、三寶山の紅葉の色にけおされてや、小松は
みどりの龜の尾を、泥中にひきしりぞき、雁奴も同
じひとつらの、こしちのかたへや歸りけん、跡にの

うで見たりし諸見物、僧正遍照から五節句をとり、
祇王祇女の真中へ、佛の來迎し給ふがごとし、長う
たいと竹つゝみやうのもの、みな世中のえらみを
盡したれば、梁の塵もちり、空行雲も闇雲となり、
ひたのみにのみ、たたくひにくひ、無遠慮に腹打た
いき、方外に口うちたたく、門松の葉のちりうせず、
わかざりのわらななき夜の、とをのねふりのさめや
らで、千秋樂をやうたひけん、萬歳樂をやかなでけ
ん、一向酔てしらすかし

右は書人東牛齋蘭香畫の書初の夜の事になん

狂歌堂に判者をゆづること葉

いにしへもかくやたはれけん、今もかくこそたはれ
けれ、抑久方のあまの岩戸のわざをぎに、おとがひ
のかきがねをばづさしめ、あらかねのつちの形をあ
きつのとなめとみたてまし／＼き御利口こそ、神も
人もたはれたることのもとなりけれ、かゝれば代々
の物がたりにも、いせの飯匙つくも髪、源氏のひか
くひすゑつむ、狭衣大将のいたち笛ふきさるかなづ
などこちけいのをとりなれや、さるを歌によみ出る
事は、ならの葉の名におふ集には大寺の饑鬼のしり

へにぬかづき、夏やせによきむなざとりめせなどの
たぐひあまたなるべし、古今集えらばれし時にぞ、誹
諧歌の一體をたて給ひき、これなん狂歌のはじめと
もいふべし、是よりのち代々の撰、家々の集にの
する處、あげてかぞへがたし、まことや水無瀬の離
宮にして、有心無心のふたつのすかたをわかちたま
ひしぞ、栗のものとめいぼくなるべき、あるは百酒
の味をなめしするもの、子には、定家卿の力のほど
を見せたまひ、あるは三井のふかきをくめる、雄長
老の百詠には、也足軒の判のことばをそへ給ひき、
其外長頭丸を頭として、郡山の自歌合をむすべる八
百首の歌、入安が大坂の雲井はるかに、未得が吾吟
の山田歌にも、其世のふりは思ひやらるゝよ、かの半
井氏の子などはかれをさへやゝ、かけまくもか
しこき何某の院の第八の宮ときこへしは、あやしく
たはれたるかたに御心をよせ給ふとぞ、此時にあた
りて難波の行風といへるもの、古今後撰のふたつの
集をえらびて、かの宮にさゝげしかば、院の御所にめ
でさせ給ひて、始て夷曲とも、夷歌ともよぶべしと
いへる、みことのりをさへ下し給ふぞかたじけなき、

しかるに新撰狂歌集には、落書をかきまじへ、銀葉
夷歌の頃よりぞ、こがねのひじきもうつろひにたる
に、言因とかやいひしれもの、いかなるゆえんの
侍しや、雲の上まですみのぼる、煙の名をたてしよ
り、其流をくみ、そのひちりこをあくるともがら、京
わらんべの興歌などいへる、あられもなき名をつく
りて、はては、は何の玉とかいへる光なきことの葉
もいできにけり、鳥がなくあづまふりは、わづかに
はたとせばかりこのかた、我輩よりもてはやして、
其名きこゆる人々の、のべの紙の風に吹ちり、林の杉
の葉門々をたてたれど、四方の巴の扇の紋、赤とのみ
おもひて、其味しらぬなるべし、爰に鹿津部眞顔ふ
かくすきやの河岸にありて、西河の思ひ淺からず、
すでに狂歌の堂にのべれり、其室にいらんの志、い
たく切なるにめで、玉簪はこ傳授めくもをこがま
しけれど、鳥の跡久しきものながら、馮婦が手うち
けむとらのとしのはじめ、河原崎の翁わたしと、も
に、三體の傳ことくく傳へぬ、われすでに此道を
すて、陸羽が毀茶論の思ひをなせれば、さいつ頃
何がしのもとめによりて、おしては人におくりぬ、

なを吾家のふるきかもと、ひめ置し文つくへひとあ
しにそへて、此一巻を興ふ、今より四方の道しるべを
とはい、南をさせる小車の、わが一流の狂歌堂なる
べし、

欲開^レ狂歌堂^ニ
寄^ス語^ヲ諸^ノ連^ニ中^ニ

先開^レ枝折戸^ヲ
勿迷^ス四方路^ニ

二水樓記

東岸西岸の柳橋は、淺草のわづかに見わたされ、南
枝北枝の鍵梅は、兩國のはしの上にたへす、駒とめ
橋の駒に鞍おけといふ山里の使來りて、藤代町の藤
の紋に、あるじの家の名もしるし、春はやうく霞
わたれる川面より、夏の涼はをほよそわが國六十よ
くにが中に、いづくはあれど兩國にしくはあらじ、
よし野高尾の舟屋形、玉屋鍵屋が花火船、秋の月冬
の雪、この二水のはとりに盡たれば、二水樓ともよ
ぶなるべし、

角田川に三船をうかぶる記

遠くいにしへをあふぎ、近く今を思ふに、山城の國
大井川の水上にさかのぼれば、詩歌管弦の三つの舟
をうかべ、言さへくから國米内史のこのみにしたが

ひては、ふみとうつし書ふたよのあしの葉をた
よはず、あるは敷島の道にたどりて、からうたの林に
たちまじわらざりしをくゐ、あるは蘭亭のいしぶみ
をうばひて、うたかたの水にきえなむ事を思ふなど、
すびの松の葉末の人は、しひの木のしひてもとめず、
あまさかる火な箱を枕として、ふすみの船の夢に
だもしらざりけりな、爰に鳥がなくあづまふり、家
々にとなへをそのたはれを道々にすきてより、いに
しへ今のことくさを、行かふ蟻の穴ぐりもとめて
朝けのはしのあげをろしにも、こはめづらかなりか
はあたらしなど、ゑみ栗のてうちならし、うち柿
のじゆくしくさく、はては盃のそこともわかぬどち
から錦たちきらぬことをなんせりける、ことし
水無月のあつさをさげんと、かの中川の方違も、し
うとのもの、ゆかりあればにや、薦のから丸がそ、
のかしきこゆるに、あし引の山の手都合よく、まく
らふまの口々にいひの、しり、すきやのすきにす
きたるたはれうたびと、むさしの國としもふさの國
の中川に、みつの舟やかたをうかべ、歌は心なきを
すがたに、詩はくるへるをむねとし侍りき、絲竹こ

そ猶とよばらの流につきて、さだすぎたるかぎりをつくすべきを、もろこし何がしの國のかみすら、いにしへの樂をきゝてねぶり給ひしとなんきけば、かぐらのもとすゑたしかならんは、五節の舞姫の花やかなるにしかず、名管秘曲の手をつくさん、三筋の糸の心ゆくにかじと思ひおきて侍りて、柳橋のまゆにこもれる親のかふ子のよきをえらみ、やぐゑん堀のほりするものに、大みきのさゝとらせつゝ、詩をもて歌にあはせ、歌をもて詩につがひ、かてるはほこらかにはなをこめき、まくるはばちの盃をうく、其争はまめびとのすさみにして、其遊びはいにしへのたはれなり、たとひ山水のきよき音のみめでし梁の太子の嘲ありとも、ひがし山に白拍子めしたる、高潔翁のうなつくところならし、しかりやあらずや

左方人 右方人
 各賦狂詩 各賦狂歌
 飯盛 眞顔
 定丸 金塚
 秋人 光

吉人有正 裏住
 三和 米人
 唯取 高彦
 躬鹿 森角
 酒船 唐丸
 講師 紀定丸
 讀師 鹿津部眞顔
 判者 四方赤良

道中双六のふり出しなる、橋の邊にすめる月知とかやいへる人、四方赤良が書おける、七賢圖式を見て、ひとつの盃をおくれり、盃中に竹をえがく、よりに名づけて此君といふ、それ盃はさまくありて、羽觴玉爵あふむ盃きんくしなど、見ぬもろこしの京物語にて、其かたちをだにわいだめす、我日のもとのいにしへは、汗尊杯飲の風すなほにして、かはらけのみもちひたり、されば三つ組のみつ指にて、左様しかればの挨拶も、候べく候のべく盃となり、引に引かれぬ引盃は、さいつおさへつあいの手もとに入りくるく大盃、百樂のてうどうけて、椰子の

毒けしをたのみ、しつぼく臺の一つの隅をあげて、こつぶを三つのすみにめぐらす、何某門院の黒木の詠は、大原盃の製をのこし、難波江のうかむ瀬も、淺草川の淵と變ず、たとひ時酒うつりうまごときり、たのしみかなしみゆきかふとも、天さへ酔へるはなの朝、あたまもふらつく月の夕、雨のふる日も雪の夜も、日々酔て泥のごとく、一年三百六十日、一日も此君なかるべけんや、

此君はいづくよりぞとふたれば
 わらつてこたへす心かななへ
 君ならでたれかはくれんくれ竹の
 色をも香をもさか月そしる

談洲樓記

豎川の流れ市川に通じ、聲と響の相生のまちに、淡洲樓といへる高どのあり、一たび此樓上によれば、三階のたかきに登りて、登ればくだる稻荷町の情をしり、大日本の東側より、天地の大芝居を見るがごとし、嗚呼此樓の高き事、あるじが自慢の鼻柱、はなの高ひはたらちねの、讓ものせし飛彈たくみ、うつすみかねの筆とりて、帆柱たてる橋柱に題せし、

夫は司馬氏これは馬馬子、あはせて兩面年代記のむかしより、基太平記の宮城野を、しのぶにあまる語路の露、萩に薄に玉菊が、狂歌燈籠數度の月、いま酒力さめ茶番歌で、たゞ牛島の牛のよだれ、ながきはなしのたねのみぞ、洲崎にたてる松のはのちりうせず、はく事は長鯨のしほをふくがごとし、談天の術、雕龍の爽、こしきのあぶらしばれどもつきず、大鋸屑の粉ゆはいゆはれん、たとひ蘇秦張儀がさかやきをそり、富樓那子貢が皮羽織きて、夫子を以て鐵棒とすとも、主人のしたを卷もの、太平樂に及ぶへからず、かの晋人の清談などは、錢ごまのはだしなるべし、嗚呼つがもない、

里の花燈籠の記

九の枝をつらね、よろづのともし火をかゝげしは、みぬもろこしか西域か、日本堤の二のかはり、三河屋が燈籠見んと、きつゝなれにし北の里、はるくきぬる旅ならで、うかれ女の道中姿、たちならびたる家々の、ともし火の花のかたはらに、みやま木ならぬ山人の、ひなふりをかいつけてよと、二日酔のさけの上、ふらちの大人がふらくと、たしかもとめしやく

そくは、ぼん／＼盆のけふあすと、うちは太鼓のう
ちすてがたく、釣燈籠の手柄のあと、高燈籠の松の
やかた、山の手の舞どう籠、名に高彦の揚燈籠はいふ
もさらなり、八百八ちまたのはじめにおす手くるま
の本川町、おほんたからのやどりとる、かり草の馬
はむ町、馬にくらをく／＼らやみの、はぢかはしきこと
のはを、四方のあかるみになひ出ること、はなり
ぬ、もとよりすきやとうろのすきめなき、きりこの
あみの目にふれなんは、はづかしのもりならぬ、水
ぶつかけのつるべてふ、名に大門のそばきりそうめ
ん、御免候へたわい／＼とかいふ、

岡目八目 草双紙の評判記也

右に見えたる位附、大極上や黒吉より、上々等にい
たるまで、かならずあてにし給ふべからず、御旬到來
次第不同、にくい／＼はかあいの裏、善悪不二の片
手打、拍子を揃へて打ておけ、まやんとか小褌をと
らの春、正月二日の初夢見て、とんち早咲早梅の、
うみ出したる趣向なれば、三千世界を尋ても、こ
んな作がと人さんが、笑はんすのも大事ないが、そ
りやこそ鳴いたは透頂香、波鏡一本うそ八百本、向

に通ふるは清十郎じやないか、笠がよう似た花菖蒲、
いづれあやめとひき／＼を、頭にいた／＼つうるの
羽重、千秋の雲晴やらぬ、朧夜のつれ／＼なるま、
に、青柳硯に向ひ、一寸二寸三寸の、つか短かなる
筆と墨、つかひ果して一部の書と、ならの旅籠や三
輪の茶や、合の宿にて隣村の、おかげで腰が抜参り、
嶋さん紺さん中乘山人、おつ／＼ら馬の後に記すと、
敬てござへすヨヤヨウ、

狸の圖贊

一荷の土船のあやうきに乗らんよりは、八疊の金玉
の安きに座せんにはまかじ、狼のそのまたくびをふ
んで、其尾につまつかんよりは、己が臍に茶をわか
して、文福の毛をはやさむにはまかじ、

壽の長地にうつや腹つゝみ

たん／＼狸ち、千歳經ん

狸々贊

あしの葉をふき竹の葉をくむあしの、よもつきじ竹
のよもつきじ。

織物の贊

相生町の松にはあらで、竹屋町のきれを織出して、

柳櫻の錦にかへ、書畫の床の詠めとなさんと、思ひ
月夜の鳥亭のあるじ、馬馬のあやまりさらになし、
竹屋町／＼、此君なくはあるべからず、

蛙の贊

花になくうぐひすにともなひては、催馬樂のちから
なくして、あめつちをも動すべく、月のかつらもを
りをえては、不死の樂をまとかにして、おのがよは
ひも久かたなるべし、むしろ香山の石となるとも、ゆ
め／＼鄭門の蛇にならふことなかれ

七拳圖式

唐山にては酒令といひ、吾朝にては拳酒といふ、天
竺にては酒のむもの、五百生が問手のなきものに生
れしゆゑ、此拳の沙汰を聞及ばず、抑此七拳は、も
ろこし晋七賢の直傳にして、竹の林のふしはかせ、
聊相違なきもの也、今幸に一巻を得たり、つら／＼
閲して其傳の絶なんことを、伊丹諸白、鴻のいけど
りの圖式をあらはして、四方のあからさまに弘むと
いふ、夫賢は拳なり、十目のちらつく所、十手の指
さす所、それ拳なる哉、富は酒屋を潤し、徳利は身
を潤す、心廣く體よろ／＼と、足もとのさだまらぬ

こそ、上戸はよけれ、

新酒頌

酒々儀狄つくり大禹なむ、ふるきはあたらしきにま
かす、おもきはかるきにまかす、かろくすめるもの
は、暫時のあたまにのぼり、重くにされるものは、
二日酔の枕となる、たちまち酔ひたちまちさむ、日
々に新にして、又日々にあらたなり、

風流狂歌盃報條

そも盃の濫觴は、ちよくらちよとこれをかう持て、
三日月などの形を表し、左のきくは天の道、そこ
をしたむは地のきよめ、天地のあい手本となる、
人と生れて酒のまぬは、玉の卮かつちりのごとし、
見ぬもろこしには金屈卮、わが日のもとには内ぐも
り、其土器のすなほなる、ためしを今に引盃、また
三組の三指より、候べく候のべく盃、小原たつも、
とらまへて、酒のませんとの一興には、狂歌をよも
に過さるべしと、例の赤良の筆をかり、すゝむる酒
の徳孤ならず、かならず隣の松蔭も、今一しほの色
をそふ、枝も榮て葉もしける、千代のこの／＼盃が、
まはつて來たは／＼、まはらぬところは御目長に、

へ、吸ものゝもみちかざして、しはすの間の鐵砲汁、戀の煮こり雑物のし草にいたるまで、いづれか人のことの葉ならざる、されどきのふけふのいままいりなど、たはれたる名のみをひねくり、すりもの、ばかしの青くさき分際にては、此趣をしることかたかるべし、もし狂歌をよまんとならば、三史五經をさいのめにきり、源氏萬葉いせすり鉢、世々の撰集の間引菜、ざく／＼汁のしる人ぞしる、狂歌堂の主、人真顔にとふべし、其趣をしるにいたらば、曉月房、雄長老貞徳未得の迹をふまず、古今後撰夷曲の風をわすれて、はじめとともに狂歌をいふべきのみ、いたづらに月をさす指をもて、ゑにかける女の尻をつむことなかれ、これを萬載不易の體といふべきかも

長櫃序

萩を姓とし藤を名とし給へる人、たはれたる名を紫のゆかりとよふ、とし頃赤良が筆の跡をもとめて一卷となし給ひぬれば、やがて長櫃とは名つけはへりぬ、ゆめ／＼人にみやきの、露はかりも／＼らし給ひそといふ、

旅日記のはしかき

それあめつちは萬物の問屋場にして、光陰は百はたごの旅人なりとは、沈香亭にもてあつかひし、生酔の名言なるべし、いづれ旅ほどおもしろき物はなし、朝の雲助長櫃の長／＼と、姫路をとりやるとうたひつれ、夕邊の月ひたひ鏡臺にかたぬき向ひて、晩におじやれの約をなす、本宿よりもあひの宿にぎやかに、名所よりは名もなき所に山のたゝすまひ、水の流れと人の行衛のはてしなき、松原つかみじかなる棒ばなに筆をとる、

謎の言葉

謎のよりにて来る事久し、左傳に山鞠窮の庚詞あり、後漢の世に黃絹とかけて絶と／＼、其こゝろは色絲なり、幼婦とかけて妙と／＼、そのこゝろは少女也、などは此頃の謎に似かよひたり、其外瑯琊代醉編、または寄園寄所寄の類に見えし商謎の數々、猜燈のはんじ物等かぞふるに暇あらず、我日の本には小野の筆の無惡善をさがなくばよからんとよみ、子子の子の／＼子子の類、枕草紙のなぞ／＼、小野宮右衛門督家五番三番の何會歌合、つれ／＼草の馬のきつりやう、後奈良院の御撰の何會など多かる中に、慶長の

十三夜十三體醉月樓會今闕三體

詩

嶋臺野菊尾花前、 卽席詩歌雜俳連
團子夜中新月後、 十三里海鎌倉先、

歌

十五夜につぐ山流の琴の曲

雲井もすめる長月の影

連歌

置露やしろきを後の月の影

俳

賣のこる薄に早しのちの月

詠武藏野

草より出て草に入る／＼月の行衛を尋む、是は北國がたより出たる僧にて候、我しらく正燈寺にこもりて、紅葉の落葉を觀じ候へしが、いまた武藏野の月を見ず候程に、此度思ひ立素見ばやと存候、またよきついでなれば、千川上水の源をもきはめばやと思ひ候、道行あやめさく馬ぐその中を立出て／＼、驛路の鈴を追分の、宿につき毛や黒駒の、甲斐あるけふの門出で、いのる熊野の十二所の、名に高井戸の

比洛陽に宗鐵居士といふものあり、謎百句をつくりて酸物圖といひしは、羅山先生十八歳のときつくり給ひし謎癖の序に見えたり、そのうちいつの頃にやありけん、なぞ／＼なめに菜切庖丁長刀、納戸のかがねはつすが大事といひし、むかしのふりをつたへて、寶永の御所謎の本、明和の讀うり謎かけふしなど、老の耳にもこのれるを、ことし淺草寺大悲さのかたはら、正月屋の市にさきたちて、人あまたつどへるを、何ぞと／＼へは、みちのくに二本松より來れる、都春雪といへる盲人の、謎をとく事とくほんの十念の口よりも大に都下に流行して、辻々に謎の番付をひさき、家々に謎の警句をしたふ、まことに謎の世界といふべし、

鬼念佛贊

蝸牛の角をれては、橙觸のあらそひやみ、外面夜及の如しといへども、内心菩薩の道にいれり、身を墨染の奉加帳、つくたびごとに奥山の、鐘の撞木はなまいた／＼、

南無阿みたぶつと悟りし發心に

鬼も早速滅無量罪

草深く、はやむさし野に着にけりく、

開帳場縁起

是にかけ奉るは、忝も菅丞相、つくし安樂寺にて御詠歌に、宵の間や都の空に照もせて心つくしの有明の月と詠せられし、この靈驗あらたなる、一挙勝負一口三なの尊像、唐高麗には御座りませぬ、たつた日本に一體の月見でござる、近うよつて拜あられませう、雲切よけの守はこれより出ます、盃は左りへくと廻らつしやい、

錢湯張札

- 一暮六ツ時より相始明六ツ時迄月見仕候大風大雨之節は相休申候
- 一足留の御方式度の月見御無用
- 一まっひせん惣て悪敷病ひの御方様岡場所の月御仕舞可被成候
- 鼻へかゝり候小唄淨瑠璃御免可被下候
- 一薄三文
- 一子芋衆十六文
- 一枝豆付八文
- 一毎月晦日は闇と御心得可被下候以上

醉仲間月行事

月日

御祭禮番附

- 壹番 勘當町 内は野となれむさしのいだし新造の付祭りし原雀の惣仕廻たいこ未社あまたのの前てござり大勢
 - 貳番 いき間町の對の小袖見え坊あまた かうまんの萬度鹽やたい大通人來朝の體黒仕立
 - 參番 川井新五左町 かつほふしのだし淺黄うらついの小袖すけん大勢
- 請狀
差上申御請狀之事

- 一此照平と申桂男さやかなる影に付我等御請に罷立當丑の八月十五夜より同九月十三日迄御奉公に月出し申處實正也御給金は價千金に相定爲御取替摺物一枚被下置儘に請取申候事
- 一御家之御工夫月見の御趣向爲相背申間敷候若此月見に付外々より如何様の半疊打込候共我等罷出急度致八分可申候若又鳥影客來仕候は、早速料理方え可被仰下候は、其節臺のもの成とも御給仕成共御望次第可仕候事
- 一御好物様御はつこうのきりまたん棹にてばてれん三味線にては無御座候銚子之儀代々上戸宗と而新川満願寺旦那に紛無御座候爲其通帳取置申候後日

の月醉而如管

酒のかん田長のみ町すぶ六店

天明元丑年九月十三日 受人糟九郎印 人主 芋助印

野嶋地藏様

御用人中様

中空祓

天窓乃上仁酒止利座須茶頭茶屋船宿乃命於以天薄
賀本平燒鎌乃燒木杭仁火乃付安俊事乃如久柳橋加良
猪牙船乃鐵砲玉仁帆平掛太留如久四手綱乃八乃御耳
平振立天後乃月見平仕舞給邊茶屋乃負債平拂給邊止
申須

十日目三日目晴給部陰利給奈

巴人集後序

巴人集は四方赤良が家集なり、按するに寶曆本繪草紙に云、鯛の味憎ずで四方のあかのみかけ山の寒がらす、いかにと今の本に載る事なし、筑地善閑御説を以て、さまよがどうだと考るに、鯛は魚の名、進上目録に云、鮮鯛一折と是也、みそずは舊説、みそずといふは非也、みそずは味憎汲物の下略、四方は

江都泉町の商家にして、酒醬をひさくもの、赤はあから也、また文選ござ花ござにいはいはく、宋玉が陽春白雪は和するものすくなく、下里巴人は和するもの多しといへることあり、四方の家紋、扇に三巴なり、かれこれ合せてかくは名付たるか、或は四方山のはなしにかけて四方山人ともいひ、或は丈夫四方の志をいたく思われなきにしもあらず、委しくは先の辻番にとふべし、

天明四のとし皁月十あまり八日

たれかしるす

杏園詩集

序

夫人生而形具矣形具而聲發矣因其聲而名之則有言矣因其言而名之則有文矣故文者言之精也而詩文又文之精者以其取聲酌合言之文而爲之也豈易也者乙丑初春始得先生之詩於譯者劉子見之未嘗不愛及是秋先生復將生平著述彙輯成稿郵筒遺示僕讀先生之詩愛其思致清遠則秋空素鶴迴翔欲下而輕雲霽月之連娟也至其文彩綉麗如春花翹英蜀錦新濯其才氣俊逸如秦華秋隼之孤鶩先生之詩可謂能盡其心焉豈彼粗疎不寔固滯不通有若秋螢夜燐可同日語哉誠東都之詩宗也蓋先生心倦乎應答身勞于將迎而抱廉退之節慎出處之誼方且謝春夢於繁華矢嘯歌於泉石縱情花月遣興琴樽殆將返其初服逃軒冕而即韋布者乎故日與幽人逸士唱和於山嶺水涯聊以自寫其樂天知命之素懷誠有得于古人之趣者僕愛先生之詩而略述其大概云耳時乙丑仲秋漫題于崎山洋寄樓葬花菴主張敬修

杏園詩集卷一

多西大田覃子招著

題壁明和三年丙戌作時歲十八

生長牛門十八秋。濁酒彈琴拊_レ醉遊。人生上壽縱滿百。三萬六千日悠悠。功名富貴浮雲似。笑他文綺羨_レ穢牛。滿堂盡是同懷子。無_レ酒須_レ典_レ我貂裘。濁酒一杯琴一曲。一杯一曲忘_レ我憂。時人若問_レ行樂意。萬年江漢向_レ東流。

望嶽

日出扶桑海氣重。青天白雪秀_レ芙蓉。誰知五嶽三山外。別有_レ東方不二峰。

雪中訪隱者不逢

東郭先生去不_レ逢。山中唯有_レ履行蹤。回看欲_レ記_レ重來路。雪沒門前一古松。

病起

三伏炎蒸彼一時。高秋病起出_レ茅茨。市中年少驚相問。閉戶先生何所_レ之。

冬日飲田間

步屨村非_レ遠。開樽地自偏。漁梁通_レ亂水。樵徑入_レ

疎烟_一臘盡三杯酒。封餘_二頃田。但期多種_レ秫。麴孽屬_三豐年。

戊子元日

北斗迴_三雲物。城邊曙色新。謳歌裁_二白雪。雨澤裏_一紅塵。未_レ遂_三三冬業。徒逢_二弱冠春。牀頭樽酒有。隨意賞_三良辰。

春日與諸子集東江源文龍宅

知君草聖晉時傳。更見群賢會_三此筵。彩筆縱橫稱_二古絕。春風灑出墨池邊。

秋日蒼山上人山房盆荷未開

愛此疎荷色。已合_二初發姿。漣漪盆水足。不_三必羨_二滄池。

賀龍門劉文翼先生五十壽

雪滿階庭玉樹林。青葱兼見_二歲寒心。社中遊好存_三兄弟。都下才名重_二古今。斜日題_レ詩羅館上。初筵醺_レ酒篠池陰。謝家况復多_二群從。更勸_三飛觴_一宴樂深。先生所居曰羅館

俠客

此處少年場。遊豪日作_レ伍。欲_レ酬_二匪吡讎。一劍猶懸_レ柱。

古意
昨栽桃李樹。共約及花時。花老子還結。佳人無見期。

夏日寄香山上人
青天落落兩三松。影入山窓積翠重。別有夏雲朝暮變。日裁佳句闢奇峯。

漁樵

漁海樵山一放歌。長將丘壑對烟波。江流滾滾迎垂釣。谷響丁丁答伐柯。拾葉行隨棹路去。得魚時向酒家過。羨君各自安生計。世上機心不_レ耐_レ多。

贈江州野子賤

江州山水傍幽居。勝地風光自不虛。何暇登樓裁八詠。還應閉戶愛三餘。帳中日月銷書卷。湖上煙波足鯉魚。千里猶能通尺素。時時莫使好音疎。

至得盤字

無恙陶家九日歡。更迎上客官情寬。風吹綠髮_一款烏帽。露冷黃花映玉盤。何處登高工作賦。一

清樽醉物華。素服淡粧何處女。欲乘明月問君家。

田家春望

一望東菑晚。烟斜積雨晴。行車何處過。應是勸春耕。

遊僊

神藥叢生若木端。紫烟滄海路漫漫。盤中沆瀣清堪漱。松下靈芝秀可餐。絳節步虛朝帝闕。瓊簫傳響落仙壇。吾今更把浮丘袖。一舉飄然倚玉欄。

遊飛鳥山有感

春風曾記舊花源。鷄犬相迎處處村。路自巢龜通北郭。山凌飛鳥望西原。翠芳氣暖開千樹。獨酌杯空冷一樽。多少絃歌人已散。丁丁伐木送黃昏。

南都覽古

二分鄉縣幾千秋。寧樂江山自古丘。春草空侵麋鹿徑。烟花曾遍帝王州。金仙閣上開黃面。采女祠前冷碧流。勝地唯餘禽向侶。時探靈異此經過。

題柿本祠

千載遺編有國風。長將詞筆代天工。古祠秋色丹

時携酒醉相看。東籬此會應難遇。遮莫林端月色寒。

早春哭劉文翼先生明和八年辛卯正月四日下世
人間一自失劉郎。流水桃花隔石梁。重到天台山_一下望。煙霞無路訪仙鄉。

七夕對雨

西風飄雨暑初收。一葉梧桐落素秋。人事蕭條佳節逝。園林颯沓早涼流。橋邊月暗迷鳥鵲。河上雲飛隔女牛。今夕家家耽乞巧。誰持針線倚高樓。

壬辰元日

鼓聲遙響鳳城邊。北斗闌干沒曉天。日上扶桑千丈外。鷄鳴高樹萬家前。珠袍錦帶趨華省。柏酒辛盤醉綺筵。朝野共逢春令至。謳歌擊壤樂堯年。

春日懷江東梅花得香字

江東一樹隔林塘。遙憶梅花動暗香。玉燭應須催淑氣。瑞姿猶自倚冰霜。坐疑疎影杯中落。還妬新粧夢裡長。解道兔園標物序。詩成誰不擬何郎。

江東賞梅

一枝春色媚晴沙。低發江東野水涯。風繞疎籬香黯澹。根含細石樹橫斜。曲中瑤笛憐飄落。林下

青落。猶自園林柿葉紅。

俠客行

京華遊俠日相邀。一飲歸來酒未消。纔向市中人自避。不知曉馬爲誰驕。賦得雙玉贈關叔成季成

曾憶崑岡剖玉年。一雙寒色闔嬋娟。青山尙抱陵陽璞。赤水還探罔象玄。響和清風金石外。光分明月_一乘車前。由來共見連城美。高價同應天下傳。

楚宮詞

細腰輕著紫羅裙。粉黛如花映楚雲。縱說東隣桃李好。君王休信大夫文。

寄懷大久君節臥病

憶昨牛門幾結盟。比來何少一人名。呻吟久抱清羸疾。詩興偏憐太瘦生。但道幽居耽藥餌。不妨高臥鎖柴荆。期君早晚牀頭起。佳句寧無示弟兄。

雨後堰口郊行同公修賦

散步平田十畝間。愛看雲碓激潺湲。飛流忽散煙中樹。積翠全含雨後山。稚子時驅黃犢去。漁翁晚釣白魚還。與君聊爲耽幽興。自使人生若等閒。

幾時。

癸巳八月二日 御舟大閱遊泗

傳聞漢武校昆明。遊泳于今練步兵。彩鷁朝飛瀕海殿。錦帆秋下大江城。拍浮遙入長流去。齊汭爲反从于日之曰與。還凌積水行。共浴恩波追隊伍。當相羅之謂不同。場叨列賜衣名。

讀觀海集贈觀海先生

何管文章奪化工。清高兼仰古人風。微音自和龜山操。芝草曾攀角里公。萬頃波瀾迴筆底。千秋日月揭寰中。只今誰掣鯨魚者。一片扶桑碧海東。

送錦子保還二株松

落落雙松覆鎮城。流灣更入鼎中清。還鄉已遂懸孤志。暨國猶存報主情。黑塚陰風迷鬼火。白河秋色斷人行。極天關塞如相憶。好託飛鴻一寄聲。

哭南條山人四首 山人名孟祥字仲裕川名氏房州人

日月悠悠獨臥情。風塵咫尺負柴荆。徒思伏枕扶病。豈計殊途隔死生。蒿里挽歌誰執紼。邨山涕淚轉霑纓。由來信士稱難得。深愧當時范巨卿。

其二

柏樹村西孤草亭。蕭蕭木葉下空庭。澗橋流水長如

此。中野悲風不可聽。災厄難消重九日。月光偏

其三

知君身世本相忘。濟勝看將遍四方。西海煙波通客跡。南山薜荔倚僧房。生前負笈輕千里。病裡備書任數行。試賦大招招不得。孤魂安在白雲鄉。

其四

壯歲行藏思不群。長看高尚出塵氛。折腰難屈陶元亮。遊履將圖宗少文。情話偏遺親友愛。詩篇每恐世人聞。千秋房嶠鍾神秀。誰識南條舊隱君。

早朝口號

早朝車騎暫徘徊。共待平明玉漏催。坎坎鼓聲猶未盡。殿城鐵鎖曙光開。

和答公修見寄

一時同調屬青年。絕唱彌高白雪絃。下里數人憐我。和。中原三舍避誰賢。花含彩筆詞場色。月照冰心酒肆前。夙昔牛門稱四友。看看詩卷最先傳。

暮秋同遊金輪寺

金輪一轉鳥山西。古寺寒陰鎖綠溪。皇子陂通秋水漲。梵王臺入法雲齊。郊天落木迷鴻影。野色過

橋送馬蹄。憶昨春風雙樹下。探芳拾翠自成蹊。

歲暮獨酌

獨酌清樽一醉歌。玉山頽處正嵯峨。胸中磊塊應須澆。身後功名豈足多。日月能開青眼少。風塵轉逐白駒過。人生幸有忘憂物。遮莫年光送逝波。

甲午早春送大年禪師還峽中

峽間天險鎖岩巉。錫杖歸飛上碧霄。五歲一朝丹鳳闕。三車幾度白猿橋。春風別後花應發。關塞行邊雪未消。唯有支公能愛駿。驪駒山色爲君驕。

早春觀海先生邸合集得春字

此日高堂宴。銜杯眺早春。神門佳氣外。雉堞御溝濱。草與玄經長。花窺絳帳新。不須南郡妓。已醉問奇人。

獨酌

獨酌望青天。青天何所識。唯憐濁酒杯。不帶浮雲色。

題虎溪三笑圖

終年不出山。一日不知禁。借問遠公心。相忘爲誰甚。

過池上本門寺

長榮山色碧嵯峨。十里松杉帶薜蘿。日出園林一鼠走。雲生梁棟老僧多。門前古磴穿苔蘚。池上幽香識芰荷。總爲法華能可轉。迷心頓欲託巖阿。

秋夜吟

秋夜漫漫不可極。展轉牀頭復反側。木葉飛爲風雨聲。欹枕仰看明月色。悲莫悲兮秋氣悲。秋來秋去長如斯。襄王屈宋忽焉沒。短歌一曲激楚辭。

遊仙曲示山子訓

劉郎惠然攜我手。行行且酌紫霞酒。一醉飄飄何所之。天台山北洞門睡。洞門纔開大道通。屋舍儼然倚簾櫳。簾裡絃歌聲宛轉。陌頭銀燭影玲瓏。遙指瑤臺十二欄。玉簫吹落彩雲端。縹緲疑步太虛上。

二女環珮鳴珊珊。相見如舊偏纏綿。笑言郎等來何晚。瓊觴持贈沆瀣漿。羊肺交薦胡麻飯。帳外東西各有床。蹤履遲遲入曲房。羅幃自籠九微火。翠被徐薰百和香。雲行雨散情何歇。鐘鳴漏滴夜未央。罪根未滅對別顏。忽忽長風須臾還。古來流俗何所樂。悔失仙骨落人間。

贈澗上僧

一謝人間事。安居絕洞中。遺身甘寂寂。鑿影觀空空。後夜孤松月。清晨萬壑風。猶嫌迹淺。洗鉢入林叢。

東橋新成

飛虹欲飲大江流。結構新分古總州。元凱建橋通萬里。相如題柱幾千秋。彩雲斜落金龍影。白鳥空浮墨水洲。昔日扁舟爭渡處。憑欄却憶王孫遊。

西鄰加藤氏之子八歲為詩。稱謂者山上人。同諸子賦。西鄰童子氣清高。八歲幽情入綵毫。未向龍門通請謁。還陪蓮社喜周遭。渥洼名種駒千里。丹穴將雛鳳一毛。支遁舊耽神駿愛。更令詞賦風吾曹。

將進酒

君不見扶桑白日出。海天。驚風倏忽沒虞淵。人生雖壽必有待。莫將大年一笑小。不知何物解紛紛。唯有清樽動微醺。樽中竹葉綠堪拾。何可一日無此君。為君沽取千杯酒。一飲應須傾數斗。已當玉杯入手來。何中復有磊塊否。世人汲汲名利間。歡樂未極骨先朽。千金子萬戶侯。於我如蜉蝣。與君樂今夕。一醉陶然寫百愛。滿酌勸

君君滿引。有酒如海肉如丘。

除夕同公修尋元石師水月菴分韻得天字。同游携手去。散步野橋邊。日入西山氣。春回北斗天。寧知除夕興。偶訪六時禪。笏室新營後。柴門古寺前。赤城臨短壑。白馬激飛泉。鳥集孤村樹。人歸十畝田。果蔬甘草食。爐火冷茶烟。未定浮生計。空憐此地偏。談玄諧夙志。觀世感流年。水月能相照。重驚石上眠。

早春喜森周夫見訪得吹字

青山詞客訪茅茨。偶坐偏憐白日遲。風色纔從蘋末起。梅花還待笛中吹。高歌一曲誰能和。濁酒三盃醉莫辭。離索春來求友處。與君先已聽黃鸝。

暮春弔梅兒冢得香韻

十里墨河橫北郭。千秋風博倚東郊。生前佩鞶餘芳草。冢上垂楊拂露梢。一自歸鴻徒失侶。偏令乳燕獨辭巢。行人弔古三春暮。雨泣紛紛灑白茅。

春夜同公修山士訓邀熊阪子彦飲城東樂庵時子彦自東奧至。千里驛驅冀北來。周旋一喜得龍媒。開筵四海迎

兄弟。當戶三星映酒盃。與縱黃公壚上飲。歌憐白雪曲中才。城烏啼送春宵月。共樂新知醉末回。

春日同山君忠岡修岡叔成季成熊阪子彦山道甫陪觀海先生宴山士訓得虛字

門下風流御李初。幽期卜得故人廬。中原鞭弭從詞社。負郭閭閻簇客車。開宴新花迎几杖。當歌啼鳥近階除。由來斯道稱山斗。喜列群星聚太虛。春夜同士訓道甫河惟寅野美卿宴蘇百韻。主人千石酒。迎客醉春宵。賦就看華燭。更閑弄洞簫。黃鸝花外嘯。彩鳳曲中調。已接初筵坐。從茲不待招。

送熊阪子彦還東奧二首

故園東望白河關。客裡行裝計日還。驛路朝過阿武水。錦衣春映信夫山。鴻書各地何能達。鵬翼垂天不可攀。知汝已酬千里志。羞同兒女動離顏。

其二

春風携手出江城。共送鄉關萬里行。都下煙花臨祖道。輿中形勝指歸程。秦碑半入莓苔沒。宛馬齊銜首肯鳴。更向香山歌古調。千秋不淺美人情。

梅雨新晴

梅天三日雨。一夕入新晴。莫使商羊舞。猶看蜺蜺生。殘雲凝積翠。落照引餘清。罔兩隨孤影。徘徊觀物情。

夏日同山道甫登金龍山懷叔成士訓

金龍臺上夏雲多。結作奇峰落墨河。徑遠藤蘿千樹合。風吹蘆荻一帆過。已同臨海登山屐。更和滄浪鼓枻歌。醉裏賞心移白日。詩成誰不憶羊何。

夏日寄懷栗士弘

天邊玉水下溝渠。無復東流送鯉魚。春草臨岐芳甸外。晴雲荷鋤麥秋餘。祇緣一日如三歲。轉似離群嘆素居。高尾山頭讀書處。時時來往故田廬。

七夕同井玄里關叔成大久君節山道甫山士訓島子諒蘇百韻野美卿河益之邊公僚栗士弘集元石師水月庵。白馬臺南十畝田。田間一路訪栖禪。與同晉代諸賢會。歌入幽風七月篇。天上銀河通瀑布。簷前祇樹散秋煙。虎溪今夕憐三笑。不羨星橋鶴影懸。七夕同諸子集水月菴既夜月下郊行六首。佳節星河會。閑房水月心。為耽塵外賞。自絕世

問音。坐借同明一照。杯憐許禁深。未_レ知幽與極。携_レ手出禪林。

其二
蟹水清流淺。椿山片月孤。石苔隨意步。野火入_レ看無。橋斷臨_レ青壁。人稀度_レ白蕪。浮游皆率爾。不_レ必哭_レ窮途。

其三
斷岸千尋水。奔流萬壑雷。玉龍行_レ驟雨。白馬撼_レ香臺。不_レ得_レ支機石。唯含_レ濁酒杯。還疑尋_レ碧漢。一犯_レ斗牛_レ迴。

其四
疏鑿從_レ何歲。長堤猶水通。煙迷蒼鼠谷。松古馮夷宮。真露侵_レ衣冷。流螢向_レ月空。何須搖_レ羽扇。散步足_レ涼風。

其五
山徑藏_レ茅屋。依稀八九椽。荆榛堪_レ代燭。土甕轉生_レ煙。不_レ辨青帘色。行吟素月天。欲_レ酤_レ墟上醉。自有_レ阮家錢。

其六
松下班_レ荆坐。風林破鏡飛。高田收_レ素影。大壑隱_レ

清暉。猶帶_レ雙星_レ去。偏尋_レ一徑_レ歸。明年逢_レ七夕。此會復應_レ稀。

中秋同并玄里大久君節山道甫山士訓蘇百順河益之邊公僚栗士弘高田郊行至鼠山作十首
絲管紛紛萬戶聲。共迎_レ良夜_レ候。陰晴。無_レ人_レ不_レ道_レ看_レ明月。別有_レ吾曹_レ非_レ世情。

其二
野外同人且自將。清風當_レ飲勸_レ飛觴。怪來片片浮雲散。恰似_レ東林_レ月出光。

其三
高田一路兩三家。斷續疎煙接_レ水涯。忽見月光分_レ兩岸。皎如_レ風露灑_レ蒹葭。

其四
鏡影橋邊鏡影懸。流光如水水娟娟。禽魚應_レ復窺_レ吾輩。濛濛幽情此地偏。

其五
鼠山秋色見_レ歸啼。十里荆榛踏_レ作_レ蹊。唯有_レ空中孤月色。荒煙何處辨_レ東西。

賦。散步徒歌明月詩。

其七

風外松杉帶_レ白雲。東山咫尺難_レ分。七盤行轉藤蘿月。佇立思_レ君不_レ見_レ君。風山南有東山七曲

其八

圯上青苔踏_レ月行。長流一曲入_レ看清。尋_レ溪欲_レ望_レ犀淵色。遙隔_レ幽篁_レ聽_レ水聲。

其九

棟棠村落隱_レ清輝。今雨偏隨_レ舊雨_レ飛。欲_レ向_レ幽人廡下_レ宿。不_レ知何處借_レ油衣。高田一村曰棟棠村。相傳。太田道清公遇_レ雨_レ借_レ油衣。

其十

行雲引_レ雨霽_レ西郊。月氣新含滴露梢。三五清光携滿_レ袖。好乘_レ歸醉_レ叩_レ衡茅。

送栗士弘之駿陽八首

東海長亭數十程。輶車何日駿陽城。同行盡是青雲士。一曲誰聽_レ白雪聲。

其二

重關遙望白雲間。黛色逶迤不_レ可_レ攀。我寄_レ文章_レ還_レ造化。勞_レ君欲_レ託_レ玉函山。

其三

清暉。猶帶_レ雙星_レ去。偏尋_レ一徑_レ歸。明年逢_レ七夕。此會復應_レ稀。

中秋同并玄里大久君節山道甫山士訓蘇百順河益之邊公僚栗士弘高田郊行至鼠山作十首
絲管紛紛萬戶聲。共迎_レ良夜_レ候。陰晴。無_レ人_レ不_レ道_レ看_レ明月。別有_レ吾曹_レ非_レ世情。

其二
野外同人且自將。清風當_レ飲勸_レ飛觴。怪來片片浮雲散。恰似_レ東林_レ月出光。

其三
高田一路兩三家。斷續疎煙接_レ水涯。忽見月光分_レ兩岸。皎如_レ風露灑_レ蒹葭。

其四
鏡影橋邊鏡影懸。流光如水水娟娟。禽魚應_レ復窺_レ吾輩。濛濛幽情此地偏。

其五
鼠山秋色見_レ歸啼。十里荆榛踏_レ作_レ蹊。唯有_レ空中孤月色。荒煙何處辨_レ東西。

三島神山鎖_レ鬱葱。祠壇映出彩雲中。到時如得_レ長生藥。應_レ笑秦皇使未_レ通。

其四

騷人獨立田兒浦。軍監行吟清海關。猶有_レ鈴聲過_レ驛路。長看_レ雪色表_レ名山。

其五

長松落_レ影氣蒼蒼。三穗原頭望_レ夕陽。神女當年游_レ此地。翩躚遺却素霓裳。

其六

能山宗祀肅微微。丹雘新添古殿扉。想見漢高三尺劍。于_レ今草木有_レ光輝。

其七

莫道前期更易逢。願乘_レ飛夢_レ一相從。應_レ知我寄_レ愁心_レ處。皎皎天邊吐_レ月峯。

其八

西望三峯落日斜。碧雲縹緲隔_レ天涯。佳人別後能相憶。持贈芙蓉一朵花。

九日臥病

三秋日月遇_レ重陽。萬里風霜臥_レ一堂。抱_レ疾空牀徒撫_レ枕。登高何處不_レ飛_レ觴。天邊白雁嗷嗷下。地上

黃花細細香。覽物感時聊俯仰。百年心事正蒼茫。
桶季成將之西肥時余臥病闕面別情見乎辭三首
聞君萬里自茲辭。九月風霜滿路岐。伏枕難臨離
酒處。行粧遙憶授衣時。阮家清賞誰青眼。馬氏才名
最白眉。莫恨離筵遠而別。心交十載獨相知。

其二

雄藩世子出江城。千騎東方借寵榮。京洛雲迎飛
蓋起。浪華風送挂帆輕。詩篇已有驚人句。伎術
新從就國行。到日阿蘇神嶽下。寧無大藥得長生。

其三

誰道談天不可窮。九州遙在二區中。遠遊殆欲觀
寰外。壯志何唯盡日東。鶉火列星連紫海。熊城百
雉倚蒼穹。行人安穩帆無恙。吹送煙波萬里風。

秋夜病懷二首

九月寒衣擁臥牀。病來秋思轉淒涼。鴻聲斷續秋風
裡。漸覺天邊夜有霜。

其二

通宵不寐淚闌干。無奈秋光病裡殘。多少昨遊行樂
事。一時還作目前看。
觀彥嶺龍草廬咏牡丹餅詩步其韵

觀彥嶺龍草廬咏牡丹餅詩步其韵

杏園詩集卷二

多西大田覃子相著

戲詠福壽草

東風纔入碧窓紗。喜見正朝發異花。影似青葵傾
日切。色疑黃蝶透離斜。幽奇爭賞移春檻。擔荷時
過種樹家。縱有一枝稱富貴。芳名那得獨相誇。

遙和龍草廬吹火竹筒韵

美名曾擅會稽東。直節虛中截作筒。窮谷陰隨吹
律暖。寒灰色變滿爐紅。漢宮熟食傳鑽燧。楚竹
炊烟起釣蓬。大塊非唯稱噫氣。更看人穎巧生
風。

三日感懷

賞心易負時易失。桃李花飛將結實。暮春春服浴
沂時。永和少長修禊日。我思古人悲昔遊。千載
之下感如一。自慚奄奄地下人。見在偏同蝮志
匹。去秋伏枕度冬春。轉覺烟霞爲痼疾。美景良辰
雨兼風。柴門一杜都不出。偶逢三日好風光。力
疾窺園立夕陽。閒關啼鳥背人語。流亂遊絲惹恨
長。縱把羽觴臨山水。愁來恐似九回腸。

唐代繁華滿帝城。芳餐更借一枝名。紫霞蒸出團雲
色。素月疑開搗藥聲。康樂七言連雋永。何曾十字
不分明。竹間水際時攜饌。豈讓秋風把落英。

哭觀海先生二首

安永四年乙未冬閏十月二十三日下世

龜山秀色舊鍾神。君自丹陽一俊人。少小才名稱顯
悟。由來經術正紛綸。空餘淵客盤中淚。忽失侯門席
上珍。慟哭應傾天下士。何唯吾輩苦沾巾。

其二

十載曾窺數仞牆。追隨門下未升堂。後生謬比通家
愛。函丈時陪隱几傍。一夕風颺白日照。千秋奎壁
失精光。只今已絕微言緒。徒抱遺文仰彼蒼。

杏園詩集卷一終

川口曉發

如雲千騎出郊關。川口風煙驛路間。舉首東方猶
未曉。天邊何處日光山。

雨後次巖月驛

郵亭花落子規啼。細雨如煙綠樹迷。殘堞不懸巖月
影。空濛夜色古城西。

栗橋渡題浮橋

刀欄橫流渺碧空。阪東形勝最稱雄。千尋鐵鎖連
沙上。一道清塵起水中。要地曾看如帶色。造舟新
作濟川功。共知雲從天行日。何處津梁不可通。

小山詞五首

小山何所有。歌舞滿娼家。不見叢生桂。唯栽
解語花。

其二

朝辭東奧客。夕送下毛郎。借問二州路。別離誰短
長。

其三

聞歡發小山。爲歡攜所有。莫將一椀茶。未
及千鍾酒。

其四

東方千萬騎。來宿小山下。何用識使君。中有紫騮馬。

其五 朝看思川水。暮看思川水。假思若川流。君思亦何似。

大駕次宇都宮

欲笑漢皇封泰岳。還輕鎌府獵芙蓉。江都大道通侯服。毛野名山謁祖宗。星動千門傳列炬。天連萬幕帶崇墉。今宵駐駕孤城下。羣從如雲馬似龍。

上日光山五首

斷岸架雙橋。深山通一路。欲探額下珠。恐遇驪龍窟。

其二

流分大谷川。雲抱高雄石。散步踏殘虹。天風吹絕壁。

其三

曲磴誰能步。垂蘿尚可捫。徘徊撫孤石。或恐動雲根。

其四

曠宿二荒山。曲肱風雨裡。起看孤月光。明滅奔湍水。

其五 斜月隱山中。松杉風色冷。忽聞傳曙鐘。誰不發深省。

丙申四月恭觀 大駕登祀日光山

日光神嶽嶽嵒。五彩卿雲映九霄。瀑水中分青壁色。飛虹忽動赤欄橋。塵清警蹕千官列。溪轉松杉一路遙。應有鳳凰來候駕。似聞仙樂奏簫韶。

其二

太祖威靈鎮寢陵。陽明門外望峻嶒。黃金榜映中天出。白玉階含宿霧凝。萬國盡歸三尺劍。四夷來貢九華燈。請看百世神如在。赫赫東方赤日升。

其三

晴雲捧日透高居。縹緲群神降紫虛。清廟絃歌陳俎豆。薰爐香氣襲簪裾。百年難遇升平節。太史應裁封禪書。不作周南留滯客。縱觀偏喜近階除。

晚下日光山

松栢含風積翠分。巖然曲徑下斜曛。歸來滿袖攜何物。鬢髮山頭一片雲。

哭栗士弘

憶爾才情總角年。由來言笑轉相憐。已逢家難嗟淪落。更接詞筵說豁然。屈指汝南論未定。爲郎地下賦空傳。千行涕淚如流水。好去殷勤到九泉。

同諸子集者公山房得冷字

久在塵網中。心神不能靜。幸因紆勝引。重得遊幽境。點綴雨後雲。蒸微空中景。餘清入晴軒。宿陰凝翠嶺。身忘纓絛牽。坐愛繩牀冷。吾師一揮塵。迷心頓可省。談論淵且玄。欲汲懸短綆。

詠松壽家君六十一初度

長松殊乘木。偃蓋倚高堂。自在風塵表。安生培塿傍。雲霄何落落。楨幹且蒼蒼。宜避千峰雨。偏凌九月霜。根株多節目。樛柯後彫傷。身學蟠龍熱。心同野鶴翔。守門無變操。施厦厭爲梁。玉樹全爭色。芝蘭互讓芳。不孤因庇廡。吹萬奏笙簧。豈但家庭美。兼開翰墨場。清談堪作柄。並坐勸飛觴。更待流膏滴。看生琥珀光。

送野子賤還湖中

彥嶽高城淡海灣。尊鱸一熟故鄉還。白雲立馬嶠函

谷。明月鏡人石鏡山。正始遺音寥落後。中原良會有無間。送君轉作千秋思。不是尋常動別顏。

九月十日同公修叔成尋白黃墅

忍海上人

青山辭負郭。白黃訪荒園。帳裡聽鳴鶴。牀頭古畫猿。塔空苔自上。節去菊猶存。憶昔披榛路。追隨客滿門。

水仙花

忽怪凌波出。還看帶雪新。鴉黃兼粉白。髮髻洛川神。

墨河雪望

風雪霏霏灑笠簑。獨乘清興且行歌。孤村暮色迷牛渚。一帶寒流辨墨河。水上白鷗馴自近。沙邊翠竹望愈多。不知何處尋安道。時有輕舟鼓棹過。擬晴雪早朝

千門白雪欲晴時。落月流光照羽旗。積素曉開三殿色。凝花春動萬年枝。恍看玉佩連珠履。爭逐鸞行集鳳池。天子應裁黃竹唱。侍臣羞獻郢中詞。

送滕童子陪權僧正與公重遊高尾山分得麻韵 山在

八王寺

西鄰一童子。嬉戲厭鳩車。總角耽辭藻。清言發齒牙。詩書時已誦。聰慧日愈加。愛見青衿色。來窺絳帳紗。遊方聊負笈。省覲暫歸家。非擇三遷地。重攀百里遐。行裝裁彩服。飛錫伴袈裟。驅馬駒關外。褰裳玉水涯。七盤緣路轉。絕頂插天斜。雲鎖盤王院。風薰優鉢花。深林隨鹿豕。大澤臥龍蛇。突兀層巒秀。霏微積翠遮。山空雨寶玉。瀑響彈琵琶。庭上馴鴉。窓前亂宿鴉。幽情放丘壑。逸興滿煙霞。佳句多神助。沈吟避世譁。偶陪彭澤酒。或侍虎溪茶。去國經冰雪。離羣送歲華。寧將寒劣退。莫以才豪誇。力作千秋業。揚名報阿爺。

戊戌新歲作

新正冠蓋自紛紛。公子王孫日作羣。碧水冰消春澹蕩。丹樓霞起氣氤氳。開盤已頌椒花色。對酒還憐栢葉醪。三十無為遠夙志。羞將小伎設相聞。

早春寄豆州淳上人

曾飛錫杖託深山。幾見年華往又還。雪滿十峰天突兀。春生君澤水潺湲。牀頭一卷經無恙。石上

三衣坐自閑。身在樊籠猶未脫。何時躡屐試躡攀。

病中喜尾陽岡田挺之見訪

茅土宗藩擁海隅。天分參尾白雲殊。遙辭蓬島群仙侶。更訪牛門一病夫。幽獨客來堪倒屣。遠遊篇就報懸弧。亦知愛弟耽詩賦。二陸風流與不孤。

三日臥病

憶得良辰樂事多。風流王謝近如何。煙霞不負蘭亭會。歲月空隨洛水波。氣暖桃花浮白醉。日斜羅綺踏青過。只今俯仰爲陳迹。伏枕三春一放歌。

送東園上人之高野山

欲尋玄壘踏遺蹤。直指摩尼第一峰。南紀遙通千里路。上方長響六時鐘。談經後夜聽靈鳥。持咒空潭掣毒龍。自是海公留卓錫。于今深洞有孤松。

贈岡田挺之

青春一抱疾。朱明猶未起。自使人事遠。若在空谷裡。門庭無梵音。散帙讀書史。以之當芻豢。悅心於至理。茂陰重成幄。清風灑隱几。流眄

嘉卉長。眷戀同懷子。客自蓬萊來。颺颺柱玉趾。惠然顧我笑。賞心無窮已。傾蓋如舊識。古人言乃爾。今日會一堂。他時阻千里。死生與契闊。永矢彌終始。

山士訓紫藤

夏簾清風吹酒香。紫藤花發竹林傍。杯中不怪龍蛇影。上有三千尋老蔓長。

送岡田挺之還尾陽

良時傾蓋轉相憐。無奈今朝共黯然。懷袖空餘離別淚。歸裝唯有遠遊篇。湖平月色生鳴海。暑退秋風滿熱田。聞道蓬萊宮闕近。知君日夜接神仙。

七夕同山士訓山道甫野美卿諸子遊高田有感

梧桐一葉影纔飛。牛女二星期不遠。天上年年良會是。人間歲歲昔遊非。會卜幽期在今夕。于今四年命山展。舊交零落似晨星。始信人生如過隙。路入城西早稻田。高田直走下田邊。古松老杉森爲列。下有茅茨八九椽。構棠村冷多時雨。蒼苔峯高落日天。漸辨銀河流左界。忽看明月映前川。手把瓊觴望素秋。枕簟無塵爽氣流。醉後揮毫詩興動。臨風吟咏意悠悠。千石忘憂長自滿。一時乞巧又何

求。悲歡不定炎涼變。昨日華屋今日丘。君不見。雲漢乘槎奉漢使。綵山駕鶴謝人事。唯餘天上謫仙人。長得年年會此地。

公修宅觀老君像得風字

遺像誰陶鑄。乾坤橐籥中。人間唯柱史。李下一仙翁。望氣情空切。猶龍嘆未窮。光塵如可仰。坐欲接玄風。

少年行

碧蹄輕踏滿城花。意氣翩翩白鼻騮。囊裡千金何足惜。揮鞭直入杜娘家。

齋中讀書

楊子守泊如。漆園遺吏務。或可嘲寂寞。庶以消世慮。虛堂絕羣塵。閑居多暇豫。嚴霜灑滿地。北風吹庭樹。感此歲時移。俯仰思今古。隱几讀我書。濡翰且作賦。寥寥千載下。且暮一相遇。九原如可起。尙友將誰慕。

題蘇子瞻遊赤壁圖二首其一得人字

赤壁知何處。風烟畫裡新。舟疑浮一葉。天自絕纖塵。作賦嗟陳迹。披圖憶古人。如聞洞簫響。明月滿江濱。

其二得山字

當年蘇學士。一讀謝朝班。二客黃泥下。扁舟赤壁間。月明空木葉。霜落古江山。孤鶴隨毫末。颺颺不可攀。

歲抄與關叔成山士訓森周夫非伯秀子厚集著山上人山房得一東韵

滔滔江漢流向東。悠悠日月去無窮。風塵爲吏驚歲晚。劇思晉代諸名公。東林結社十餘歲。歲歲賞遊幾回同。柴門朝叩青山外。塵尾閑揮白社中。蓮漏頻移催短景。梅花欲笑待春風。臘酒三杯纔犯禁。醉顏已映夕陽紅。到來一絕風雲思。不管人間窮與通。此生荷悟無生理。將歸釋部談空空。

讀陽 崇德廟得支韵

先皇遺廟白峰陲。零落丹青日月移。戎馬曾生周甸服。牝雞空廢漢朝儀。自書玉宇沈滄海。不見金與反赤墀。流恨無窮千歲下。使人長誦鶴鳴詩。

鎌倉懷古得虞韵

源大將軍有新圖。英風忽掃虎狼都。八州形勝朝千里。三世豪華占一區。明月空低星井沒。白雲長

傍鶴岡一孤。當年第宅今安在。唯見春光滿綠蕪。

岐蘇懷古得二冬

旭日纔晴積霧重。將軍躍馬倚崇墉。當年叱吒千人廢。唯有悲風度亂峰。

七娘詞

城北佳人字七娘。房年幾日託僧房。幕中巢得紅襟燕。籠外窺看白面郎。鮑質曾經迷下蔡。幽期一失憶西廂。如今火底蓮花。在。縱死猶生並帶長。

牡丹得真韵

京洛豪華日夜新。遊蜂戲蝶趁佳人。詩篇擬擬謝康樂。濃艷爭稱楊太真。宿露凝香籠錦幃。輕風拂檻隔紅塵。請看桃李成蹊後。一種名花別有春。

春日即事

日暖春風度綠蕪。花間黃鳥隔林呼。相逢不嘆無知己。天下高陽是我徒。

霞關春望

城南大道接櫻田。花覆樓臺柳帶煙。白虎門臨滄海出。紫霞關並綵雲懸。原骨意氣三千客。草杜豪華尺五天。不見東都如此壯。寧知春色遍山川。

題李白看瀑圖

金粟如來出世間。偶看瀑布匡廬山。鹿襟一洗銀河水。髮髯青蓮醉後顏。

三叉口避暑

兩國橋南炎暑少。三叉江上爽涼多。賢豪不似袁劉飲。歡樂兼看趙李過。

又

樓臺夾岸大江灣。三派清流避暑還。願得浮家兼泛宅。時時來往二州間。

夏日遊戶塚村題小芙蓉

九仍新成一策功。芙蓉忽見秀晴空。偶凌絕頂攀高樹。滿袖攜歸六月風。

小芙蓉

不假天工妙。殘山富嶽開。坐看千仞勢。似起九層臺。洞口移巖石。林間剪草萊。還疑巨靈力。一夕劈崔嵬。

其二

突兀小芙蓉。攀躋出古松。功應盈一策。山自象三峰。疊石層雲起。臨池積翠重。爲耽塵外賞。聊欲進孤筇。

薛井玄里初度引

曾聞城北紫芝園。如雲茅子盡攀援。借問當時受業者。至今海內幾人存。唯有井春傳經術。猶自紛紛事討論。兼看好事通方伎。聲名往往來高軒。時探青囊授盤樂。或攜黃卷避塵喧。華甲今年六十九。爭稱上壽客滿門。賓客盡是名下士。吾儕敢得陳一言。幸遇高堂陪几杖。先進貳膳飽盤殮。別有上池水不盡。灑入銀椀與金樽。芝蘭玉樹看羅列。趨走庭前弟與昆。九如宛轉歌聲起。五色斑斕舞袖翻。南薰吹送南山頌。一時傳誦遍中原。

三派江觀煙火戲

三派江頭八月秋。樓臺如畫映清流。樓上燕歌催趙舞。橋邊桂棹駐蘭舟。就中豪華誰可比。東方使君居上頭。上頭高居臨江渚。彩棚半捲玉簾鉤。簾前更命煙火戲。斯須小舟盪漿至。初疑霞彩水中飄。漸見天花空裡墜。積水茫茫宿海星。明珠滴滴蛟人淚。別有崑崙十二臺。九枝華燈次第開。慶雲五色呈祥瑞。爆竹一聲送怒雷。此時魚龍亦潛躍。此時明月且徘徊。幻似秦石驅海隅。影如六鷁過宋都。南鄰北里看來往。西舫東船共一呼。何但中人十家

產。一夕千金盡。歡娛。五夜鷄鳴百歲能。冠蓋縱橫散。九衢。

十三夜月

莫道婦嬾。猶思織綺年。欲謀連夜醉。不待中秋天。秦鏡縱分面。齊章已作篇。銀箏十三柱。恰是好彈絃。

十四夜月

今宵比前夜。月色似還多。不羨西園讖。聊爲下里歌。漸看開桂樹。試欲酌金波。三五看相近。陰晴定若何。

十五夜月

萬戶乘明月。絃歌徹九霄。南樓情不淺。北海客相邀。自覺清虛近。寧知碧漢遙。此時無盡醉。何以報良宵。

十六夜月

如待佳入至。沈吟日暮雲。露微星彩散。皎潔月華分。攀桂愛芳歇。開樽任酒醺。清輝猶未減。對影轉憐君。

十七夜月

三秋明月下。數得卜幽期。玉兔仍圓夜。蟾蜍欲

缺時。浮雲看變態。冷露欺凄其。但願携佳客。年年及此時。

暮過山寺

白日收餘照。幽溪鎖積陰。不聞孤磬響。寧入數峰深。無事僧歸院。爭栖鳥滿林。上頭何處遠。昏黑恐難尋。

余聞烏石山人之名久矣及見者山師及河子昌竹岡子益慕山人之爲山人而想見其瀟灑拔俗之標矣今歲山人甫八十四方之士皆賀余亦因者山師致一詩以代華封之祝且寓景慕之意云

烏石山人烏角巾。隱囊匡坐絕風塵。胸中磊落都無俗。筆底縱橫自有神。曳杖時看鳩嶺色。臨池日對鴨河濱。壽筵分得金莖露。洛下聲名逼縉紳。謝諸子賀生子

家園杯酒賞芳辰。忽見仙桃結實新。應是荊州豚犬種。謾稱天上石麒麟。

羅漢寺

峻峭碧瓦出林叢。第五橋南一徑通。四八珍祥盈妙相。半千羅漢住虛空。曲廊宛轉行應遍。飛閣逶迤望未窮。更有大悲新示現。長懸慧日照江東。

時大悲閣新成

賀藤童子加冠

堂上清歡對玉壺。新加冠服過庭趨。知君已試遊方志。莫作尋常小丈夫。

八島懷古得東韵

一自蒙塵出紫宮。山東諸將氣何雄。風聲忽起孤松下。日角空稱八島中。傳國瓊還秦地府。乘流舟失楚人弓。千秋陳迹今安在。唯有煙波滿碧空。

立春集賀耶先生勝賞樓

門外如雲簇客車。煙霞自入立春初。簾前勝賞分青句。樓上清歡望紫虛。雪滿芙蓉翻一曲。水消鵲雀進三魚。更逢蘋末東風起。藻思翩翩興有餘。

海門春望

寰中淑氣動陽和。出海雲霞望更多。天霽曙光看浴景。時平風色不揚波。百川水逐流漸下。萬里帆凌宿霧過。唯有坐茅垂釣客。春來猶著舊漁蓑。

壽者山上人七十

綠嶽曾推第一名。早辭官寺謝浮榮。回思白足三千坐。獨抱明珠十五城。欲向空門稱上壽。笑言人世本無生。吾曹幸得忘年愛。長此青山結社盟。

芙蓉館開非金峨先生講詩

十年離索憶當時。儒雅名流復有誰。躋壽館中曾奪席。忘歸亭上數題詩。風移北海諸侯國。舉起東方一世師。今日聞君論四始。非唯匡鼎解人頤。

東與熊阪子彥惠酒錢同岡公修關叔成山士訓遊曹司谷宴向耕序

共弄春光一步綠蕪。曹司幽谷接城隅。一雙北雁傳書素。千里東風送酒須。稽阮元非白眼侶。河山轉遼黃公墟。美人爲是投金錯。我輩猶能對玉壺。

春日馬景德樓上送佐賀文學石仲車還肥前高臺百尺類城池。千里春光送客時。風雨幾年違舊識。鶯花滿地入新詩。前肥直接飛蘭島。西海遙攀若木枝。此會爲關離別意。停杯轉愛夕陽遲。

春日即事

春眠漸覺又移牀。坐臥呼童進一觴。遲日閑花看自落。遊蜂戲蝶爲誰忙。

鈴木猶人宅山茶

一樹山茶逼酒清。春光添得寶珠明。醉來便臥閑

庭上。落地殘花聽有聲。

東叡山看花

帝子名園耕龍靈。天台勝地鎖巖扃。新花掩映瑤瑤殿。曲磴盤回白玉屏。凝黛蛾眉連步履。銜泥燕。初夏遊日暮里。雨歇郊園外。新晴長。薜蘿。山光收。彩翠。風色屬。清和。野寺尋幽入。村園探勝過。何須愁日暮。醉臥綠陰多。

其二

丘墟多古意。薄暮進孤筇。誰道三河島。猶餘百尺松。桑田看海變。石逕破苔封。欲識千秋事。班荆問老農。

雷雨

突兀雲峰白日奇。陰森雨足暴風吹。一聲忽送驚雷響。正是前山欲破時。

五日同伴忠順從鷓鴣集木子莊巢松館得庚韵

五日園林夏木清。最看涼氣滿松棚。葢如巢鶴驚前舞。鱗似盤龍鏡裡明。華露時侵蒲酒落。薰風自入葛衣輕。牀頭更有長筇在。繫得留連醉後情。

步入龍興寺。慈雲帶夕陽。芽茨如許結。芟草倚林篁。慈雲山名

其三

晚出襄荷谷。人煙冷野垌。前邨酒旗色。先入眼中青。

其四

龍劍精無恙。冰川水自寒。千秋思帝子。遺廟出林端。

其五

巢鴨村中樹。鳴鷄谷裡聲。疎籬見煙火。薄暮叩柴荆。

其六

邨落分門巷。園丁種菊花。花開千萬種。爛熳壓陶家。

其七

日落園林下。煙迷澗水濱。杖錢行買醉。不負小陽春。

其八

雨衣何處借。風雨暗千邨。始覺幽栖客。終年不出門。

晏起

窓外日三竿。晏眠猶未起。寄言當路人。吾懶真如此。

須磨懷古

勝迹遙臨赤石開。晴沙漠漠望悠哉。黃門遠謫三年淚。形管幽情萬古才。雨過長松風色老。天高絕壁鳥聲哀。不堪江上聞吹笛。月下蕭條送落梅。

送關叔成遊熱海

傳聞靈液有仙蹤。豆海湘山瑞氣重。地勢斜通函谷險。泉源直指日金峰。登樓一碧堪窮目。染翰層雲欲盪胸。幽賞更耽玄對趣。浴來何但洗塵容。樓名

苦熱

一堂難避暑。三伏氣交蒸。驟雨何時注。奇峰幾日崩。吳牛應喘月。魏井未分水。徒待涼風至。窓前且曲肱。

初冬同山士訓川伯温熊仲弼郊行八首

偶伴兩三人。聊移六七步。餘霞散赤城。陰映丹楓樹。

其二

冬日同松子長六如上人及東叡諸尊者遊東漸院後山

東山古院絕塵氛。路轉閑園木葉分。霜露已荒三徑菊。煙霞忽散二陵雲。池邊滿酌移床坐。巖下清談隔竹聞。一醉相忘賓主態。徘徊不覺夕陽曛。

水僊花

瑞雪晴來月色斜。玉人將采水仙花。窓前未見寒梅發。一種清標透碧紗。

猿江曉望

兩國橋東一水通。千家曙色望無窮。雲間落日低西嶺。岸上寒林起北風。霜滿猿江人跡絕。邨連龜戶野煙空。更看五百阿羅漢。遺像儼然古寺中。

春日同岡田忠卿伴忠順石井子彭赤松大經磯田仲繁集服右父信古堂

芳洲何處訪君家。滄海晴光射白沙。席上談如鋸木屑。窓前春對玉蘭花。雨過苔蘚沾三徑。日永牙籤滿五車。城北城南非不遠。坐忘歸路到昏鴉。所居地名鋸木。匠街築地。

賦得花柳一園春壽與田蘭汀翁八十

平安舊耆老。五瀨獨推君。養性看花柳。開園避

世氛。紅侵綠帳亂。綠映金樽分。弟子皆稱壽。春風酒半曛。

春日遊望沐欄

欲解劉伶五斗醒。江頭遙指一旗亭。遲遲暖日含煙白。楚楚新松映水青。鸚鵡杯中浮北海。大鵬天外擊南溟。春風吹面晴光好。遮莫吾生醉不醒。

贈歌妓阿仙

楊柳橋邊二水涯。如雲名妓妬蛾眉。爭傳一曲新歌譜。誦得唐詩知是誰。

春日遊牛渚

春草侵牛渚。風光好繫船。三園攀社樹。萬戶滿花川。何用燃犀照。唯看脣鯉鮮。青旗行處有。取醉且留連。

峽中懷古

忽聞鼓下楚歌聲。天目悲風振樹鳴。蠻觸從來爭底事。英雄割據果何情。一時空恃山河險。百世長添日月明。巖邑不封歸版籍。只今唯有中陽城。

幽居

一自杜柴門。風雨不復出。唯逃濁世名。敢比幽人吉。晏眠猶未起。杲杲三竿日。花間時灌園。月

下或開帳。問我何所為。居閑心且逸。蘭膏徒自煎。蛾眉多見嫉。不如守其愚。養此楞散質。

晴景得色字

昨夜纔聞度雨過。今朝更見新晴色。花間黃鳥莫停聲。如此風光不可得。

寄滕童子

清時無復覓遺賢。對策何須舉妙年。欲向空門稱白足。頓含微笑坐青蓮。

童子遙辭北海隅。一朝聲價動東都。久無蕪苑生蘭蕙。豈計香風起芘芻。清賞驚看巖下電。新詩割得蚌中珠。人間未識金翅鳥。謾道龍駒且鳳雛。

十五夜宴醉月樓

欲傾天上絳河流。今夕重開醉月樓。飲笑齊歌三婦絕。分光爭賞一輪秋。合樽促坐忘更漏。墮珥遺簪作酒籌。多少人間良宴會。無如是處美遨遊。

九月五日同伴忠順將過岡田忠卿賞茉莉花有事不果間一日至則花已謝矣因賦呈主人

茉莉纔開日。幽人折簡傳。佳期空自失。外物動相牽。豈駐殘雲色。花辭積雨前。暗風吹不盡。猶訝麝香

蕊不。可求。豈謂一朝如戶解。颯颯頓作采真遊。先生居越坊一名星岡一所居揭采真字

歲暮題酒家壁
富貴功名不可求。楚雲湘水望悠悠。今年三百六十日。半在胡姬一酒樓。

壽者山上人八十
官寺元稱二字班。為嫌榮利浩然還。三千社裡曾揮塵。四十年來獨閉關。躋壽域應通赤阪。不羨詩欲歷青山。此筵何假常珍饌。笑汲清茶供破顏。

眠。茉莉一名華東。坡名曰晴巖。

江城春望

春滿江城八百衢。豪華到處見雄都。氣晴餘雪含山色。日出颺霞散海隅。柳外塵埃誰並馬。花間粉黛共當墟。醉來寧伴諸年少。不作乾坤一腐儒。

七月十二日有饋泥鱸魚者盡放諸溝聊作短述

平生我輩在樊籠。籠鳥池魚思不窮。晚向通溝放鱸尾。悠然好去大江東。

癸卯十月八日下總州相馬農夫遇父仇于東都牛門市闕而登之詩以記之農夫名富吉仇名甚內

十七年前一失怙。藐焉天地泣諸孤。甘心若不殲讐敵。結髮何堪列丈夫。未相舍來身伏匿。寶刀揮處血模糊。北風吹雨牛門市。一日英聲振大都。

冬日登青松寺後山寺稱萬年山山有千里遠跡

曲磴攀幽峻。寒雲擁化城。亭窮千里目。松負萬年名。積水帆過影。空山葉落聲。滄洲看不遠。忘却吏人情。

哭河子昌先生

星岡夜色少微幽。君去悲風動九秋。曾在市中甘隱趣。更臨池上接名流。右軍修禊誰當繼。道士籠

杏園詩集卷二終

杏園先生博聞強記海內具瞻不敢費也其於詩早歲之嗜至老益篤是以冰瓠雪梳之什積溢書厨今此所刻自明和丙戌迄天明初年歷々若干首皆少壯染指王李之日所作譬之一櫛耳未足以厭飲也若夫八珍九鼎之豐三鸞七菹之美則當咀嚼全集而知其味也
文政二年己卯臘月念四日

門人鈴木文謹識

杏園詩集跋
蓋聞神戀野鶴翹翔為清迥之音山桂蘭蘭鼓盪得馨香之氣依永和聲之律皆本性情幽人達士之章載分比興崇臺綺閣紫玉白紵之歌曲市橫塘小漿瓊浦之唱益徵海外之才思洵推東國之風流大田南畝先生高才宏志逸思殊資摘文吐鳳麗管雕龍每搖筆似夙構偶出言而成文桓驕十四之吟早驚座客陸機二十之賦妙絕時人希逸之文江東固當獨步太白之句濟陽靡不流傳念夫卓犖之氣本似劉楨不羈之才原同阮籍然而清瑤白玉不矜雕琢華露耳騏驎難受羈縻之制况乃耽情邱壑欲謝銀黃留意琴書寄懷風月簾床石几頻對月以微歌釣渚花林亦命儻而嘯侶昔者玉山主騷人之會暨今前庚園建詞坛之旅鼓遂使山川潤色遐邇傾心猶歎東都貴有斯人茲夫素柯墜葉宛舒青女之容蒼卉含英已結玄仙之氣迺當東郊饒飲南浦送行越禽代馬暫為萬里之遊跨羽乘軒少作三秋之別花晨月夕難追萍寄之踪飲酒分題夢想杏園之勝因飲白雪庸修詩非之詞回首青山聊誌別離之概云爾
乙丑仲秋月中浣日於長崎旅舍偶跋山山佚民錢德

蜀山文稿

呈耆山上人

前日之會、誠不可忘、上人十笏之室、能容諸子、公脩叔成君節子諒、或馳才沈爵、或覃思澹雅、或勃蹶、或輕俊、亦各異其撰、君忠雖初見、如舊相識、心雜若僕、未絕於蓮社、上人廣長舌、片言可以摧百萬之鋒、剖析玄理、問展戲謔、故能至使人々無不厭心、且自謂一坐玄度舍我而誰也、及歸、僕曰、復舊路、則熟而可厭、不如乘月異道遊隱田、隱田之勝有可觀者、諸子從之、唯君節不願而去、過原驛村、入酒家、主人頗醉、大可人意、相對嘲笑、雄飲犬嚼、肉拔山、酒傾海、飄々乎有御風之意、有潤曰、赤土、過橋則隱田、荒煙一帶、北風振稿、霜華滿天、寒月映水、水激巖石、月光注射、為環為玦、為鈎為珥、如珪判而璋合也、如碎金之銷鑠也、千狀萬態、不可縷形、田間一丘有熊野祠、履山蹊、披茅塞、飲石泉、蔭松柏、排闥宮之闕、叩玄牝之門、當是之時、三山之神未遑飛柯低枝謝逋客

蜀山文稿

百五

耳、嘯歌笑敖、空谷和響、山下一夫手白挺、來曰、何物狂夫昏夜闌、入祠壇、子諒暗以杖頭餘錢、唯々而去、宛然乎謝康樂驚臨海郡、歸家就寢、耿々不寐、屋梁落月猶攀、上人提諸子、嗟、出則折腰小兒、入則室人交譟、未嘗一日不爵々思前日一爾、狂奴酒態、豈敢颺之長者哉、上人固海鷗、諸子狎之故也、請恕、

呈大年禪師

今春會者——朝東都也、主我吉見氏姊家、吉見氏與僕同居、且暮相遇、親炙貌座、獻歲發春、尋常稱慶者慶至、應接不暇、僕雖疎懶、未能免俗、禮法中、無可與語者、當是時也、一談一笑、排遣俗塵、令我儉浮生半日閑者、會者之賜也、別後辱翰覘、僕無一驛使嗣音、負荆負荆哉、不腆若菜併酬詩、謹呈左右、苦托浮沈、詩表相思、歲暮寒甚、伏惟自愛、弟子大洞佳否、煩侍者致意、寒族亡恙、勿以為念、

賀替水母子遷勾當序

蓋國家替者之官、至檢校極矣、勾當次之、四分次之、除為庶、自檢校以至庶、荷籍替者、皆隸總

檢校、總檢校、擇檢校中最故者充之、有二宰、世祿、曰兩職事、總官黜陟詳審、參謀職事、不煩、縣官、唯總官所令也、凡遷者必納貨總官、以得所欲、總官分其貨於檢校以下、各有差、蓄有官而無職、或鉞醫、或道引、或操靡靡之樂、出入王侯、與侶優佚儒伍、或殖財利、藏於子錢家者、比比皆然、蓄者水母子、武州兒玉人也、幼喪、明、學、俗樂、不成、學、鉞又不成、而皆非其好也、性好吾邦典故、沈潛國史、諷詠和歌、排排憤永、異乎時者之撰、博聞強記、暗誦書萬卷、論辯如流、每負一笈書、撻地而行、使人語之、側聽之、有疑不敢不質也、質之不、得、恨乎如無相也、退而有得、昭然如發、隱也、至國家興衰之所繫與、忠臣孝子之所履、便未嘗不泣然淚下也、其徒咻之、世人笑之、曰、國學非吾所業、曰、迂濶不近事情、水母子自奮不顧、終始典于學、其志彌固、學彌進、弟子彌衆、安永乙未春正月遷、勾當、平生所遊諸貴、及弟子有力者所、响濡從與也、於是乎咻者緘口、笑者大慙、一如蘇季子佩六國印、歸、昆弟妻嫂側目不敢視也、不亦榮乎、人皆賀之、吾貧無財、不能資子、又懸面國

學、不能補子、姑序吾所聞以祝之曰、昔者丘明傳春秋、繼獲麟之絕筆、子夏序詩、闡四始之業、此二子者、明之人也、其所撰述、傳于天下、萬世受其賜、以彼觀我、國史猶春秋也、和歌猶詩也、彼何人也、我何人也、吾雖昧國學、幸有自知字、子負子書來、吾以吾字讀、曰某在、斯某在、斯、而後子將有所擇焉、則有疑者矣、有恨乎者矣、有昭然者矣、有泣然淚下者矣、子勉脩其學、不安小成、傳國史、序和歌、問俾子專美彼士、則不啻有餘師矣、謂之國華可也、若夫咻者、笑者、慙、則鄉黨自好者之所榮、而僅足以驕其妻嫂而已、豈足榮子哉、余深知水母子志在此、不在此、始從賀者之後、而論及如此、雖曰無以與乎文章之觀、庶幾相師之道與、

送熊阪子彦序

東奧熊阪子彦少西歷遊三都、而不復知天下之大也、盡天下而唯知天下之大者、有觀海先生矣、恐先生之文章散逸、手書體別其什、還先生一通、藏副其家云、其信先生之篤、而所以有功先生者、不亦偉乎、以子觀於天下、自物子倡古文於

寶享之間、海內之士、聞風而興起者何限、其徒一開口、則稱左氏復起、不亦易言矣、而司馬可運之掌上乎、顧其所著、亦唯僅僅數人可耻其言矣、諸雷同之者、徒篋藏、以要一時之譽、至今世、彼此竊則、若獸相食、空言溢、紙不發、一見、方諸國初、諸儒學雖不古、其博可以顧問、文雖無法、其事或足以徵、未知其孰優也、於是乎、吾誰適從、方今之世、濯於江漢、暴於秋陽、俯俯乎獨立一世者、其唯觀海先生乎、吾不阿其所好也、在昔東奧僻在海隅、與毛人接境、王化所不及、忽巨忽叛、臣魁一麾、務從蜚起、故鎮非其人、亂兵不輟、升平百年、民舍干戈、而操鉛槧者、間有之、即有豪傑如子彦者出、歷遊三都、不屑一世之士、唯以觀海先生親受業於物子之門人、經術文章為天下法、信之篤、令先生之文章可以傳天下後世也、於是乎予益知先生之德足以服人、亦猶源鎮守之鎮與也夫、今歲子彦候先生東都、予一見論天下文章、相得驩甚、及其歸也、不無一見、子彦之文見稱先生、吾儕不佞豈敢贊一辭、予唯述子彦有功先生、有功先生、則所以有功天下後世者、如此偉矣哉、

贈加藤童子序

塗羹塵飯、土城竹馬、童子之所嬉戲、而童子不以其嬉戲為嬉戲也、讀書檮櫟中、誦言如流、乃祖諄諄、教而不倦、其効乃爾、乃祖逝矣、乃父令子教之、吾幸居東隣、僻好讀書、亦猶以為賢乎、慕問街賣之事乎、塗羹塵飯、土城竹馬、童子既不以為嬉戲、則何在、三遷而擇焉、今茲九歲、其學益進、才益奇、吾與、其進、試令賦詩、援筆乃成、未始沈思、亦不欲速成、其非互鄉關黨之比可知矣、雖然、苗而秀者、蓋有之矣、秀而不實、不如黃稗、童子務時敏以來、厥脩、所謂立身行道、以顯父母者、舍童子其誰也、吾贈言童子、以為乃父壽、壽乃父、以追思乃祖、詩曰、貽厥孫謀、以燕翼子、乃祖有焉、童子姓加藤名昌藏

形氏躑躅園詩序

井浦氏兄弟三人、隸百夫長、伯仲同伍、卒、叔氏贊、形氏、以叔受正能之經、令我攀棠棣之華、叔之為人、抱淳朴之質、從先進之野、雖實樸、椒乎士林、未敢隕稜於世塵、兄弟翁矣、和樂湛焉、鄉曰、栢樹、戶多躑躅、爰自青春、以及朱明、斑斕五彩、芽

蒐一色、其莖挺秀、如太乙之燃藜杖、其葉參差、如百草之待藉鞭、其上如赤帝與赤旗、其下如蘇草之跗注、近而見之、如丹甲、如朱羽、遠而望之、如二十三華殺轉、朱輪而薰灼、如五十里步障、製美錦、以爛熳、石榴羞奪、其朱、桃李為之閉口、颯紅羅、亦自成蹊、雖、然、江南之梅、何香范擘一枝、河陽之縣、唯稱潘岳百里、是以知花得人而益顯、人得花而流芳、因舉一鄉之美、以名叔氏之園、曰、踰園焉、於是擇四美、卜一日、携吳蘭、遊芳園、截邨縣之竹筒、致左慈之行厨、羽觴隨眼波、而流、花茵與醖顏同色、揮彩毫、成章、煒兮形管之將贈、持如章擊節、繁兮珊瑚之未碎、遂將五渡溪頭、唐詩奪張籍之句、常盤山上、和歌傳真雅之艷、或芟蘭佩、麟驟、固與狂簡於進取、或兼葭倚玉樹、豈容勝負乎其間、聊裁緒言、以弁詩卷、苟采詩非、無以下體、

遊井頭源記

余抱繁東都、日見宮闕之崔嵬、與街衢之方正、願一見山水之勝、不可得、而思其次者、則培塿可以當山、漸洳可以當水、故其在莽蒼、當三食而足、

棟梁、東甍嘗營瑤瑤殿、取材於此、豈其餘材乎、久之松杉如堵、人家間見、曰松邑、邑有二大姓、是其園云、數里溪水割野田之半、蜿蜒而下、是為井頭之委、左灌莽、右松林、乃行松林中、林中多薇蕨、且采且歌、介然山徑往茅塞、林盡得水濱、蘆荻苗焉、水衣被焉、岸有沈舟、豈積羽之為哉、隔岸遙見蒼翠滴瀝中、若施一點朱者、左緣水濱、紆餘而進、回顧所歷、亦猶向所望、蓋溪水至是環為池故然、有二洲、置天女祠、丹青剝落、向所謂若施朱者、是耶、滄池潏流、大旱不涸、井頭之源、自是出、鑿諸東方、長流如帶、都下十萬戶、獲仰下流而不渴焉、其利亦大矣、池多萍蓬、洲多柳樹、相傳猷廟嘗植蘭木、遂為鄧林、側有湧泉、是神祖汲以烹茗處、想當不減中冷水矣、諸子臨池、流觴甚樂、惟寅善畫、盤薄池上、規度其可圖者、而去、歸到大宮、日已暮矣、途遠步艱、強勵不憊、就形生所識農家、借燭、幸免顛覆、是日也密雲不雨、令我輩盡一日遊賞者、造化亦厚哉、大田子曰、東都草創之時、東南瀕海、廣斥而卑濕、民居難、以井矣、朝廷深議於廊廟、命工鑿井頭、達于神田、鑿玉河、達于四谷、鑿仙河、達

者、東窮鴻臺、真間、西盡武野、玉河之美、而未嘗遊井頭源也、安永乙未之春、吾友形生語余曰、多摩之郡、井水出焉、原泉混混、草木濯濯、子從我乎、吾將導焉、遂下四月三日、從行者友人河惟寅、蘇百順、野美卿、朝步大窪、過形生于百夫巷、其兄井氏從、形生令奴齋酒脯、由柏樹村而達淀橋、水確蘇般、鑿廬舍間、酌一斗酒、併齋形家奴、數步曰中野、五層浮圖湧出林中、是中野長者之墟、有寺曰寶德、中有亡友南條山人墓、徒吞聲宿草已、同游不識山人、亦為之墮淚、左取提數百步、過十貫阪、漸近松樹村、或徑麥隴、或圮溪水、忽見一丘如覆手、臨田間蹊而上、上則山村四圍、縉雲無際、綠疇平楚、霏微乎指掌間、北見樹抄露碧瓦、是為妙法寺、班荆而坐、箕踞而望、饌所齋酒脯、醉飽杲然、徐睨前路、一計吏之騶御緣延樹間、若意氣揚揚、薰灼田舍者、吾嘆俗吏敗人意矣、待騶御不見、而後舉觴、數里至大宮祠、祀應神皇、千丈之松、夾道而立、大三圍四圍皆東北偃、問之土人曰昔者源鎮守將伐東奧、謁祠禱祀、至誠所感、松皆偃、奧而偃、門前一松、名懸鞍松、是其繫馬處、其餘喬木不下

于寂麓、伏陰溝于三處、以通市井、今仙河之溝亡、唯存二水耳、諺云、不飲陰溝水、不稱都人士、民至于今、受其賜、日用不知其源、民之趨末、寧獨一井頭哉、而今而後吾知窮河源也、夫井頭蓋言井水之首也、猶汾陰有瀆魁也、惟寅圖之、諸子詩之、而吾為之記、

送山岡明阿一序

今之學者詳于彼、略于此、取斷野乘、不按正史、豈管不、按正史哉、目未嘗略正史者有之、故方其叙國事、不免目睫之譏矣、其意謂彼夏也、我夷也、中國之事可學矣、我方之事何足觀也、不知先王禮樂刑政炳焉可觀、百世之下、猶存告朔之餼羊矣、今之稱和學者流者、詳于國字、略于文字、拘泥和讀、不知大義、故方其援彼方之事、不免顛覆之譏矣、其意謂、是異方之事、何與我方之事、殊不知先王因唐禮典、損益以作一王法矣、甚之至、曰道不同、而不相容、要之五十步百步之間耳、山岡君創、其若時、卓爾異乎二者之撰、洞視古今、沈潛國事、上自國史律令萬葉誓牙諸語麗華二十一代國風之變、下逮稗官小說諸子百家、靡不博覽該通、

也、至勞、援彼方之事、未嘗失檢也、優而學之、時然後出、默而識之、時然後言、人莫能測其蘊奧云、然其資器磊落、豪爽自快、不欲抗顏為一閭里師、與彼和學者流率、作貴人態、喋喋自喜者、何啻天淵、今年西遊、京師、夫京師王者所居、縉紳所禮、樂可觀、文獻可徵、水土可樂、山川可賦、凡以我方之文、紀行者多、唯紀三士州一記、孤行海內、其餘寥寥乎無聞焉、君一載筆于此、則出源入勢、提挈清挈、赤所謂啓牙麗華者、縱橫筆端、若使、人疑其從神化、來、則君之塵垢糝糠、固將陶鑄紀氏矣、君其有意哉、引領待之、

與栗士弘

方足下之駿陽也、僕患疥癬、不復醉一卮酒於祖道、以為恨、爾來伏枕、且百日、閉戶蕭然、一切謝客、時來剝啄者、僅公脩叔成若二騎士輩耳、之數子者、每相逢、未嘗不曰、栗生亡恙、咄咄士弘近狀何如、別後不見、足下詩、芙蓉三峯鍾、造化之神秀、久矣、發之歌詠、多多益奇、託西風、便寄峯頭一片雪、來、試屬數子而和之、恐必有難和者矣、僕病間得詩若文數十篇、聊賴呻吟陶寫、亦覺快快無欣樂

與山士訓

昨會河益之、聞今日足下與之與、道甫百順益之輩、遊高、曰之東山、以采松栽、是月也以子日、天子賜菜羹於宮中、士女采松栽乎野外、是皇朝故事也、甚矣三子之好古也、雖則告朔之餼羊、亦可觀先王之遺風矣、去年之遊、僕有故而與焉、今年之遊、亦有脚疾、而不與焉、未可知明年何如耳、嗚呼東山不負吾、吾負東山、久矣、仰屋大息、呻吟不已、聊得五絕句、各屬所思、瓊瑤之報、僕不必望、若足下之文、道甫之和歌、百順之詩、益之之畫、之與之俳調、各所長也、以其所長、報其所、贈則幸甚、

與槿季成

大成來示、季成客中詩、讀之如阿蘇之嶽、鬱律而吐煙、筑后之海、紫瀾迴而陰火然也、辭文藻拔、與山水關奇、壯哉此遊也、就謂官為俗物乎、於季成與改、是勉旃、季成之道遠、其在此遊乎、覃自去歲季秋、來、疥癬為痼、遂不櫛垢不頤、寤寐無為、對客若忘、當食失匕箸、日復一日、曰為改歲、每遇良辰美景、撫枕欠伸、搔首踟躕、坐臥不過一室、行止

趣、每念中秋高田之遊、恍如夢寐、噫、鼠山明月可復觀乎、猶記歸路值雨、與諸子過百順廡下、而燎衣、時雲行雨晴、風篔成、韻月露欲滴、頽乎醉臥、則鷄既鳴矣、起視、蒼欄間、明星爛矣、惠然携足下、手、踏落月、同歸、相顧而言、此遊難常、今而念之、咫尺河山、士弘士弘、一念至此、否、二絕寄憶、餘不多具、

與山士訓

古云、詩能窮人、不佞詩不及古人、而窮過之、嘗承父之緒業、家多宿資、俸錢業已為子錢家之有也、久矣、今歲室人交病、子亦伏枕、百事廢謝、囊橐屢空、足下忠之與、道甫一謀、並同好及諸弟子資見遺、通財之道、義之與、比、敢不受乎、噫、丈夫窮矣、非吾黨之、一且有一緩急、則視如路人、不啻如路人、又從而為之辭、以間、執他人之言者、聞吾黨之風也、寧無赧顏而汗背也耶、所謂文人無行者、於吾黨一酒之、敢謝諸足下及道甫、幸轉致同好及諸弟子、

畫鼠贊

不過數步、譬如籠鳥之籠、池魚之池、波也、猶且仰人飲啄、嗚呼、雖有山、不能奮飛、雖有江湖、不能游泳、欲假羽毛而決起、掉頰尾而圍洋、豈可得乎、加之天不憐遺、一老、觀海先生、以季冬逝、山頽梁崩、吾誰適從、覃沈痼之餘、遭此大喪、廢頓數日、甚矣、覃之窮也、季成亦嘗蒙容接、可不一慟哉、昔人窮而著書、如失明之史、腐刑之令、文園移疾、玄亭閉關、誰昔然矣、覃雖不敏、私竊留意於此、然才盡思窮、不能結撰、屬稿未脫、亦復遺棄、遂欲燒筆硯、則亦不忍、失其為故也、既乏才思、又喪良師、雖成一章、不知所以裁之、固不免、一世非笑、惡在其為千秋之業也、恭聞君侯起泮宮於邦內、黃金白璧、於式群賢、維日不足、以季成之才、文之以禮樂、游焉息焉乎其間、則季成道遠之秋也、勉崇明德、以達其道、窮達有命、不可徵幸、人之有技、若已有之、季成之達、則吾黨之達也、覃雖窮乎、亦何恨焉、一託東流、致書問病夫、不悉、

水月菴記

元石師翁介不羈、不苟容俗人、又不能為叢林之徒、一衣一鉢、固無住著、嘗師西京俊鳳上人、口學夙

成傍好、爲詩、與予交、出東都、平門可一里、赤城之陰、白馬之陽、田間有寺曰宗傳、入門而右、有菴曰水月、置觀音大士像、師請而居焉、其居也前水田、後丘壑、循除植一撥、水鏘鏘鳴、餘波溢乎畎澮、爲千頃、田田如棋局、葦笠如子、或耦或耨、或儲或讓、或把耒耜、或挾槍刈耨、春耕秋收、可坐而閱焉、山林四却、人家點綴、其間、鬱乎翠者爲蔭涼山、巖然精者爲赤城、黃雲凝、白日隱、積陰散、朗月出、一望皎然、千里改觀、玉田新墾、金波可掬、水得月以清、月得水以淨、觀彼清淨、以名此菴、良有以也、嗚呼、竊方袍、濫圓頂、入則飽煖逸居、出則騶御辟人、意氣揚揚、奔走於公卿之門、不則殖貨財、而問米鹽者、滔滔皆是也、而信奉之者、滔滔又是也、則非師不容、俗不容、師必矣、師令予作記、予曰、師也、東西南北之人也、一衣一鉢、固無住著、則不可、以久、勉繫乎此也、他日聞曉猿夜鶴者、將有感於此記、

報日淳上人

雁塔之雁、繫尺素來、因審尊履益佳、聊慰渴想、大慈所及、至情溢紙、玉澤神符、田子海苔敬領、并謝、

帖之門戶、以辟百鬼、湘之綺釜以供二親、感戴可知、謹呈福壽草圖并詩、不願蕪陋、唯祈上人多福多壽、敢望拈華微笑、不佞筆硯依舊、勿勞慈念、

箸銘

借而籌乎、震而失乎、抑食粟而已乎、一賢一愚箸惟一、

爲元石師題鍾巖下摘石耳圖

若屬于垣、維石生耳、絕而下壁、采以礪齒、

題伐木圖

送元石師序

元石師濃北人也、夙游學京師、師事祥光鳳公、明和己丑之歲、來于東都、居八年而將還京師焉、謁余一言、余曰、先王之道則嘗聞之矣、釋氏之道未之學也、姑以吾所傍觀者言之、夫釋氏之道行于天下、未、有盛於此時者也、民之尊信之、未、有甚於此時者也、其徒之於天下也、占福地焉、居大利焉、育弟子焉、膜拜以爲禮、鐘梵以爲樂、芬陀以爲教、凡一講法、聽者如堵牆焉、比諸閭巷

儒生、居環堵之室、仰其佔畢、仰口於弟子、束修者不可同日而語也、氓之蚩蚩、唯佛是趨、其民信而後可以施教矣、未信則不可以施教也、未信而教、如逆風而呼之、信而後教、如聚沙而雨之、吾聞釋氏之道雖多矣、片言以蔽之、曰諸惡莫作、衆善奉行、苟能充之、是乃仁術也、今之釋氏之達者、少留意於此、循循然善誘人曰、去汝諸惡、而行汝衆善、則民之從之、如湯之灌雪焉、不、是獨善其身也、兼善天下矣、如不然、而窮居山林、清靜無爲、獨善其身、不亦善乎、師請擇於斯二者、吾觀今之講法者、大抵馳無用之辯、以作募緣之資、野史以緣飾之、戲謔以厭心之、其窮不類、俳倡者幾希、嘗聞風公著德積學名于一時、師歸而學焉、親而炙焉、則其道之成有日矣、乃安窮與達、而勿做類、俳倡者則善矣、余所言于師者、是已、師其擇之、

與河益之

間者、道甫來致、足下所描高田十二勝、焚香展玩、取次流觀、一丘一壑、雲蒸霞蔚、病夫霍然、不知身在室中、恍如探神穴、步高田、道遙於猪水之濱、浪蕪萍乎鼠山之野、昔日所遊履、一舉以爲臥遊具者、敢不

拜足下之賜乎、業已分命諸子而詩之、唯恐狂簡之章、不敵盤礴之妙也、吾家無長物、舊有扁題玉清二字、不知何人所書、字微墨猶亦異乎近世奴書輩、輕俗可厭之比、足下嘗自號桂園、桂月樹也、玉清天也、宜相比近敢助清燕之賞、豈報前日之賜云乎哉、

答龍草盧

覃幼聞西京有草盧龍君、而未相識也、客歲有人、傳足下詠物二篇、擊節之餘、學步高韻、亦即鄆甸句耳、因大藩野子賤、得觀佳作數篇、及所著二詮、尋惠華牘、言及二詮、覃黃吻年少、何能贊一辭哉、然特辱高誼、猥承千里面目、敢拒雅志、而默默耶、大抵豪傑一起、天下慕其風、國初北肉羅山諸公起、天下皆言性理、近世伊物二君子起、天下皆稱復古、夫苟駁前師、駁前師見孔子家語序以成一家說者、必不得不好辯也、好辯者其未必不能無弊也、簡髮數米、愈精愈失、概而論之、則寸木岑樓之說、堅白無用之辯而已、足下豈好辯哉、必有不得已者矣、唯恐世未詳其意、而概以爲寸岑堅白之比矣、覃亦卒業一過、未詳至意所在焉、略陳固陋、以答

高誼、問者、有從徇日光山之役、稽報已久、幸勿罪焉、不悉、

答日淳師

遠惠芳訊、沛如二雨、乃知慈雲所覆、無所不至也、
貶損道德、賞譽過當、稱引古昔、比義甚高、讀未數行、使人汗背、聞有貴恙、既差、伏惟攝養、所示二詩、留珍篋筒、麥粃敬領、并謝至意、將重修道場、使僕題掛聯、敢不唯命是聽、尋當具草以呈左右、唯恐書漫之質、不免代匠之譏也、書中及大駕登日光山一事、實國家盛事也、僕自去秋來、患疥癬、遂為脚疾、閉戶數月、至首夏而愈、愈而數日從野州、跋涉數百里、塗路亡恙、賴天之靈、得縱觀山嶽之秀、宗廟之美焉、竣役而歸、則父母倚閭、室家相慶、樂飲浮杯、謳歌太平、不亦吾生大幸乎、上人慈愛、勿勞過念、有詩別具、人歸甚逼、不復一一、

在中將東遊圖贊

洵美中將、出自平皇、閑麗其貌、金玉其章、駕言出都、薄遊東方、攬轡仰止、富嶽之陽、維嶽班々、盛夏猶秀、永言千載、干雪有光、

與野子賤

不絕如綫者、何也、僕始遊於賀邸之社、稠廣中唯知有足下一矣、時足下歲十四、僕長足下二歲、青衿往來、殆無虛日、尋得岡園雅、號牛門四友、日以文會、麗澤講習、倦則杯酒相歡、劇談終晷、亡幾足下出仕、僕亦多事、或往而不來、或來而不往、一旦淵焉離索、如此罪在僕乎、將在足下乎、抑不知其何謂也、今書來言僕學業大進者、過賞殊甚、徒增愧赧、僕進不能取、榮明時、以顯父母、退不能樂、道陋巷、以待天命、疎放之性、淪為酒人、遊戲之文、大類俳倡、苟安自棄、不知其非也、若足下一則不然、日就月將、其業倍於前日、觀所示數詩、可知矣、舉以示三兄弟、則亦莫不應應以為金石聲、此書也僕當先、而足下先焉、書云、人惟求舊、足下之謂也、有是哉、足下之戀々於故舊、於我心、有戚々焉、罪果在僕、而不在足下也、自今以往、復尋舊盟、則三兄弟、亦虛左以俟、徒曰故者、勿失其為故而已乎、非僕所望也、若夫淵焉離索之罪、則僕與足下一共問諸水濱、

復日淳師

神符貼壁、苔菜充膳、敢不拜賜、捧讀惠書、如

天之於斯文、何如哉、有時乎興、有時乎衰、其果有意邪、將無意邪、在昔皇朝一葉杭于唐、皇華之穠、摘藻揆天庭、中葉干戈相尋、斯文幾乎熄矣、及國

家勃興時、則有若藤欽夫、林道春、有若山開齋、熊伯繼、元寶之際、於斯為盛、有若伊源佐、龍躍於洛澗、有若物茂卿、虎嘯乎江左、有若源君美、感會風雲、大化滂流、斯文復興、升其堂、入其室者、人立門戶、家極淵源、而其門者、風流雲散、天遣一觀海子、而使典刑於斯文、吾雖不敏、苟志于學、竊材以為得名師矣、不日而道成、成則千秋之業如俯拾耳、觀海一朝易簪、天下不怒遺一老、其果有意邪、將無意邪、餘子碌々、噫、吾就適從、方今之時、可與共論斯文者、唯淡海有足下耳、吾雖不敏、不欲與一時碌々者爭長尺寸也、願足下不遐棄我、而討論潤色、使我無慙於千秋、則幸甚、書不盡言、伏希照察、

答平昭德

舊盟不尋、邈如河山、忽獲手教、悲喜交集、僕與足下、未始有一言逆於心、又聞流言、而不信、然且契濶數年、離群索居、莫逆之心、肝膽楚越、結交之誼、

灌醍醐、上人法臘既積、道德益進、不啻吾儕私竊、躍、不亦叢林一大休徵乎、狂乘博愛、下存老親、即西嚮膜拜、以報盛意、客歲所約柱聯、久負諾責、謹此錄上、不知中上人意、否、可則取之、不可則舍之、更思改作、固所不辭、神史三本、聊供一笑、幸以消待者欠伸耳、
聯語云、金輪一轉蓬峰下、玉澤長流豆海中、

復岡公修

見還高雄鐘銘墨本、足下好古之甚、賞鑒備至、猶蒲室之音一破冥闇也、昔人嘗以橘序皆銘藤書為三絕、足下一書、頓為四絕矣、

又

日者、託僕陸歸、還所借書、且致一鳴、則見謝以手書、平原督郵一得與足下、雖不亦幸乎、足下訪僕者、僕訪足下者、一而皆不遇、可不悵然哉、時屬孟夏、草木扶疎、偶觀淵明讀山海經詩、至窮巷隔深轍、頗回故人車、憶足下甚、故為足下一誦之、

送藤好本藏序

覃嘗與山田君忠、同學於觀海先生、退而言君忠曰、斯文於本邦、寶享為盛、及仁齋與於西京、徂徠

起於東都、而學稱復古矣、自二子沒、五十年于此矣、斯文將衰、而未興起者也、夫伊尹發於農夫、傅說發於胥靡、太公發於漁父、其未得志也、或耕有莘、或築傅巖、或釣渭濱、若將以終身於耕築釣焉、其得志也、或佐湯伐夏、或啓沃高宗、或爲文武師、一隱一見、無入而不自得焉、自非下學而上達、以成道德者、惡能如是耶、隱則獨善其身、見則治天下國家、古之學爲然、隱見有時、學而以待矣、學無古今、惟在其人而已、今之所謂學者、非吾所謂學也、叩其學、則僅攻章句、略綴文辭、察其志、則道德仁義舍而無論、是何異乎、食於一材一藝者、其志將以求重精也哉、君忠曰是也、初君忠在西京也、與藤君友善、義如兄弟、藤君事字和侯、字和屬南豫、南豫去東都二千有餘里、君忠敬君、嗣音不絕、實三十年一日也、會藤君來役東都、始見君於君忠所、安永丁酉夏四月、將歸南豫、請言於予、予嘗讀其與君忠書、而察其學與志矣、藤君蘭岫之門人也、蘭岫仁齋之子也、去名師未遠、極知藤君之學、非今之所謂學也、孔子不云乎、晏平仲善與人交、久而敬之、藤君有焉、君忠於

單父行也、藤君君忠所敬也、單豈不敬乎、遂誦其嘗所與君忠言者、以爲贈

書答簡

不耻惡食、不羨和羹、咬得菜根、百事可成、

復日淳上人

五月從惠光寺、得尊札及嘉貺、世故紛紜、緩報至今、擻髮未足謝也、聞爾時病瘡、不能把筆、想當既愈、痛定思痛、勉旃攝養、時方季秋、霜露冷、木葉下、不知山中白雲、覬尊者高臥否、不堪遙懷耳、賤族無恙、因僕致意、

復岡田仁卿

捧讀惠書、大慰契濶、伏惟老兄益佳、稻氏以本月八日來見、且致老兄意、不佞縷線之才、豈敢抗顏爲師哉、亦唯教學相長、則吾所願也、老兄若見稻氏、善爲我謝、

與日智師

不度虎溪者六七年、會與一客遊戲東山、遂訪上人于本行精舍、里名日暮、真日暮而至、至則上人許遮戒、勸以般若之湯、供以醍醐之味、磊塊一澆、落念冰消、劇談間作逸興、欲飛開軒、則一輪寒月出

足下病齒、僕病瘍、敢不同病相憐哉、靈殮之惠、大勝饒飯、敬此申謝、

遊高田一檄

昔日之高岸者、爲今日之深谷矣、今日之深谷者、無乃他日不爲丘陵乎、岸谷丘陵猶然、況於人乎、乍聚而散、乍存而亡、俯短隨化、哀樂推移、欲開口而笑、其可得乎、尅期七夕、于今三年、其地依然、其人僅存、歷西郊之金埒、眺左界之銀河、烏鵲成橋、牛女命駕、班荆乎棣棠之里、謀野於早稻之田、若夫寫情者詩、寫景者畫、解憂者酒、此三者不可闕一也、飛檄同志、更主齋盟、來者猶可追、時哉不可失、安永丁酉秋七月七日、右告岡公俯開成山士訓山道川河益之邊公傳

送廣瀨子一序

夫懸桑弧蓬矢者、爲有事于天地四方也、遊通邑大都者、爲廣其瞻視、報其壯志也、人々孰不欲遊四方哉、然而遊覽既周、壯志既報、則雖信美、固非吾士、人人又孰不欲歸桑梓哉、廣瀨子豐白杵人也、遊東都、依稻公、吾因公事、一見廣瀨子、今歲將歸鄉、嗣其宗族、且壽令姊、使人乞一言、予曰天下孰不欲爲廣瀨氏哉、豐去東都、千有

自東方、漠々水田、與天無際、戶田之河、筑波之峯、宛乎在几案間、既醉而歸、月光滿地、人影可盪、離立往參、歌呼相應、將過蓮池之坡、予願謂二客曰、是夜也十月之望也、此非蘇公遊赤壁之時乎、月白風清、二客亦在、唯憾上人比佛印有餘、我擬東坡不足耳、去者安在、來者爲誰、今日之樂正在我輩乎、二客唯々得詩一首、併附一笑、

題下妻大夫壽詞卷首

下妻大夫高階君、七十初度、亡論國中士大夫、與四方諸君子、博徵壽詞、集爲一卷、其爲體也、有唐詩、有和歌、下至若所謂連歌俳諧者、附載不遺、累々乎如貫珠矣、吾聞大夫歷事三世、如一苟不賢而能之乎、他日太史氏采國風、而及觀此集、則知下妻有賢大夫也已、

青木翁遼才家銘并序

上毛青木翁、久客東都、既老、自收脫牙齒、歸陸于鄉、噫男兒有生不得志、頭白齒落者、而觀此碑、何啻峴首一墮淚哉、翁名安都、字鄰卿、銘曰、曆未乾、齒先寒、

復山田君忠

餘里、四方之志遂矣、衣錦之期至矣、子之歸也、宗族迎之、鄉黨敬之、祭其祖先、侍其令姊、樂飲浮杯、萬壽無疆、是皆人之所欲也、吾非公事、未嘗見子也、未交一臂、而接殷勤之歡也、不知何以中子意否、故道吾人所欲者、以贈行且代壽詞、庶乎足以見吾志矣、

書田季婉集後

多田氏名順字季婉、嫁佐野源內者、生一子、名成之、字子信、源內仕于越後黑川侯柳澤氏、為世子傅、多田氏自幼讀書善詩及和歌、及長通諸子百家、好讀通鑑源語、出入侯第、教女公子者數歲、安永丙申之秋罹病卒、成之從吾友井伯秀遊、故得此集於伯秀所、余擊節而嘆曰、昔皇朝之盛、僅有有智子一律、照映千古、其餘女流若清紫者、口多微辭、徒步趨國風、而未陶鑄唐詩、及東都起、桃仙中山二稿行于世、今閱此集、可為之執箕箒矣、嗚呼、上下千歲、有一婦人、形管有煒、閨閣生色、才難不其然乎、安永戊戌仲夏

答日淳師

上春有脚疾、至夏漸起、不佞數病、脚、嘆人而不加

起信、大器所利傳之無疆、

畫鶴贊

猗々皓翅、楚々玄裳、延頸鼓翼、羅列成行、一飲清流、不羨稻梁、與其乘軒、寧沖天翔、

移柳記

南畝子種二柳樹數年、春色夏陰、秋風冬雪、未嘗一日無此君也、有松齋者、豪爽不羈、新營一室、且脩園庭、謂南畝子曰、子贈我以二柳乎、南畝子曰諾、乃使庸夫數人舁致松齋門、其樹大七圍八圍、不可自戶、即破藩籬而納焉、南畝子作歌曰、

自移楊柳六七年、枝葉雙雙大可憐、陶家五株亦不羨、金城十圍還復然、颺揚落絮白於雪、流亂輕絲翠似煙、松齋主人何豪爽、氣干青雲將直上、草屋新營八九間、願乞此樹供幽賞、不惜為君長轉移、長歌一曲縮一枝、風前風色從茲去、夢裏生財未可知、依依能攀主人圃、主人幽賞無盡時、

松齋大喜、明日詰朝有叩南畝子于門者、曰、何自、曰自松齋云、吾有旨酒、惠然肯來、南畝子曰諾、盥漱詣焉、自柴門一人、時天寒絮霜滿地、落葉簌簌、主人紅巾皮裘、倚爐而坐、延南畝子升堂、堂宇間曠、

葵耳、忽接手教、伏審安居、欣慰不已、麥夢之惠、樂草之喻、可以管法味也、可以起沈痾也、敢不拜謝、時下微雨、為道自愛、

安子潤經笥銘

白玉在匣、黃金在篋、雖有金玉、不如一經、維是經笥、有書且盈、何以比之、南面百城、

復仲忠順

疇昔之憾、實如盛論、韋編未絕、苦渴無日、由然於巖塵中、強作柳下惠態耳、聞損夫二卦、講習既畢、後期在九月朔旦、謹奉命焉、今朝授童子讀、伊吾滿室、不能即報者為是也、不、

下總州醫王寺鐘銘并序

兩寶山東光院醫王寺者、在下總州葛飾郡小金之原、刀禰之濱、寺安樂師佛、遂以名焉、安永七年冬十月、邑人戮力合資、新鑄洪鐘、以充法器、邑大姓平樂氏、致書東都牛門、命太田覃銘、蓋檀越之功、莫大於喜捨、法器之用、莫先於鑄椎、邑人於此舉也、可謂醫王忠臣已、乃為銘曰、

總之下州、地曰勝鹿、寺曰醫王、爰造書鐘、音徹瑤瑤、響應東方、山則雨寶、辟彼豐山、聲從飛霜、乘心

寂無所有、唯庭上有二柳耳、主人曰、吾性愛柳而未得也、昨所轉移、殆適我願、願帳中曰、當歌俄而歌聲起、帳中合奏三絃、其聲錯雜如急雨、歌曰、

柳兮柳兮可憐枝、依依莫厭狂風吹、歌畢異香自內出、有名妓數十輩、首簪揚柳、衣綉楊柳、以美酒嘉肴、次第而至、主人取酒置南畝子前、曰、願賦一詩、乃使童子捧硯、美人呵筆、南畝子筆不停綴、賦一詩曰、

滿庭霜雪映如花、內集團樂似謝家、千丈疎松交古柏、數椽飛閣弄朝霞、豪華自碎珊瑚樹、妙妓齊歌絳帳紗、更有山公池上趣、醉歸何笑接藤斜、松齋擊節嘆曰、天下奇才也、咄々曹子建、稱正平、當為子閣筆、獻酬交錯、杯盤狼藉、謔浪笑放、聲歡而罷、時人相傳、以為談柄、

紀三兒命名事

安永八年己亥春三月十九日、東都小石川諏方街仕立屋宇兵衛稱大妻、一產三男子、時妻年三十八、先有二子云、清水少傳本自某、少傳此謂用人、名三子、曰市五郎、曰松二郎、曰梅三郎、以先生者為叔、次生為

仲、後生爲伯云、

紀馬墮井事

有牽馬蹊賀郎之墟者、地陷馬墮、驚視之則晉井也、蓋數十年前所墮、蓋以板、盛以土者、朽敗以致是云、安永五年丙申十二月三日

紀吉田氏事

安永五年十一月二十七日、上獵千壽之野、步兵營衛獵場、島根村有醫吉田養軒者、謂予曰、享保中德廟獵此地也、憩息吾廬、以六諭衍義一本、白金十塊、賜吾父、今爲家珍、

蜀山文稿終

寐惚先生文集

寐惚先生初稿序

味嗜之味嗜臭非上味嗜也、學者之學者臭非真學者也、方今學者、移居於品川、思濱漢土之裏店、放驪于目黑、橋入、唐人之人、別所謂島水、練爐兵法、議論雖與鼻高、不能鈎口于天井、論語四千世說六百、以比切店、就轉名之曰、放屁、儒、孔門辻番、窺見宗廟之美、其也、御單筒町矣、友人寐惚子請余序其初稿、余讀之、詩或文、若干首、徑沿秦漢之派、直至開天之域、辭藻妙絕、外則無之哉、先生雖則、寢惚探臍、能知世上之穴、與彼學者之學者臭者相去也遠矣、嗚呼、寢惚子乎、始可與言戲家已矣、語曰、馬鹿不孤、必有隣、目之所寄、暗之寄、余有感于茲、序以傳、同好之戲家、如此爲野夫、末如之何也已矣、
明和丁亥秋九月 風來山人題紙齋堂

寐惚先生文集

寐惚初稿序

毛唐陳奮翰善脩切稜古文辭、門人安本丹以寢惚先生初稿者、徵序、余焉曰、吾寢惚先生於詩也、舊有虛言八百首、或爲祝融氏奪之、又爲大地震、震頽之、其存十一於千三者、亦以可觀焉、詩則陽春白雪、開天嘉隆、一枚看板、文則左氏司馬子長、先秦西漢、跳而逃矣、不折者櫻木、不味者目玉、何不以黃色表之、以白絲線之哉、況先生年若、即二稿三稿、數頭出矣、豈不大極、愉快乎、余掉頭曰、舊矣、舊矣、吁、表面一通也、至其內、則抑亦名與物之相談也、名曰、名聞物指、錢金恭、惟吾東方朔、八千歲、三浦大助、百有餘年、悠悠寬々、文運大闢、猶子云、杓子云、詩文章、貴賤上下、押並、而無諺、解讀無點、當斯之時、嵩山房、不許翻刻、唐本仕立、千里必究、速授剽、沾之哉、沾之哉、千秋之業、大叶、豈不唐人一大寐

言乎先生殆寐惚乎抑亦臍也自臍二寸下而始可與言穴已矣後之毛唐人此集以盡寐言而寐言盡于此

明和丁亥秋八月

濟南郭 木子服撰
鳥山 石黃澤書

附錄 病目錢神論

與北海天民著

變寓不測之神化屬自然之理托物以彰其體隨事以見其用如彼腐艸田鼠之化吾特依月令所記以明其候而已奚知其必然否其最著明者獨於煙管見之於乎煙管也汝本是人間之玩器其勞特多日夜不離手裏焦頭於火中委尾於人口動臨唾壺中傷膺金石偶值賓客上堂之時為僮僕所磨礪則顏色雖更新羸瘦日益甚悲哉至于呼吸斷絕痿續不救列頭而謝功則化為異物受業白水真人之門然俗猶呼汝為病目錢以其不能獨行弃汝不顧焉遂隱蘆埃之間雖然方真人將舉一百之衆若缺其一則百方無應之者當此時起充其數則九十九孔方不能拒汝醜惡一舉以為天下之通寶吾於是乎知汝德之大也無一錢用而有百錢功昔人嘗著錢神論以表彼真人之德今吾

又表汝之功德以終其言諺云禍物三年亦有可用者焉其斯之謂與遂作贊曰百戰百勝一將才百文百數一錢財言未已智錢現其神罵曰嗚呼乃北海之野人徒好末學性理不能知天地之大道夫變化之無窮造物者僉然矣吾真銅亦自終其役而已豈俾人間利害而索賈錢名(賈者不直也)為乎唯願成大佛嗚呼乃言過矣嗚呼乃言過矣

寐惚先生文集初編卷之一

詩

風雅體

花之綠矣、于神于媒、拜之賴之、一夜寧來、
花之淚矣、于筆于墨、愛之憐之、一盛不陸、

花綠二章章四句

五言古

遊三洲崎一觀二新鹽濱一

名應犬門屋、乃在新鹽濱、安房與上總、數數沖漕
燐、詠此鹽波多、知彼賤女身、鹽衣裳小裙、心不
乾思頻、誰知世渡業、長與三燒鹽辛、

七言古

太平樂

太平樂兮犬之窮、天下太平國中、殿樣御馬槍打尻、
四海波靜時津風、親分子分柔和理、一杯強飲顏真紅、

年過三松下、白髮頭而無錢金、今日為姑昨日婦憶
昔一休御用心、

五言律

詠金

莫道目腐金、金生木末尋、山吹不改色、文字至
于今、縱欲口先借、其如首丈沈、還思百萬兩、夷
講付虛深、

詠錢

遠從寬永年、通寶世間旋、鳥目多新鑄、雁頭雜
古錢、一文花子擲、兩替相場傳、別有時風鬼、能
令初尾先、

七言律

擬下罪人侍三閻魔王宴應制

何減黃金極樂光、還看地獄更繁昌、三途浪淨波
日、六道橋平迷路方、鏡照一生慙重罪、鐘從三諸
行響無常、微臣況過開釜蓋、身體懸衡奉大王、

江戶見物

江戶勝元異在繼、大名小路下町方、二王門共中堂
峻、兩國橋踏御馬長、惡直現金正札附、小便無用

寐惚先生文集

其親父應立腹、家職邪魔誰亦同、君不見人間萬
事晦日暗、唯有太平樂未終、

貧鈍行

為貧為鈍奈世何、食也不食吾口過、君不聞地
獄沙汰金次第、手持追付貧乏多、

明神紙馬觀熊谷招致盛圖上引

憐哉救盛者、回顧若衆顏、流石熊谷非石木、舉扇
遙招御出間、無官太夫還馬處、義經辨慶後之山、
自後之山一聲見懸、御首打落一谷邊、二十餘年榮
華夢、無跡覺為一片煙、請看驕平家不久、紙馬
奉懸御寶前、

元日篇

君不見三元日御江戶、大名小路御門前、春風吹送素
袍袖、若水汲入雜煎膳、早稻賣聲春向姿、萬歲樂歌
招童兒、早來四達信寶引、物申年始御祝儀、祝儀嘉
例家家事、自出度分此一時、一時榮花夢之裏、先生
寐惚欲何之、上下敵果大小賤、憶出算用昨夜悲、昨
夜算用雖不立、武士不食高楊枝、今朝屠蘇露未
嘗、浮出門前松竹傍、共謂御慶御愛度、共謂御杯
御春長、雙六新板年年改、寶引勝負夜夜深、夜夜年

板屏傍、吉原常與三品川一賑、儼是狂言三戲場、

送三下官唐人還朝鮮

豕吼雞鳴門跡邊、今朝喰散赴三科川、滙紅棧數花三
月、色黑往來路二年、皆道唐人好書物、誰知惡筆不
成錢、富山被美還迷惑、少計儂離御目懸、

五言絕句

過三夜應小屋

夜應好小用、此隅彼處隅、妾如怪異鳥、君似三磯
場鳥、

江戶四季遊四首

上野兼飛鳥、花開日暮里、三絃茶辨當、多有暮之
裏、

右春

川長兩國橋、花火燃前後、歌響屋形舟、皆翻二妓子
袖、

右夏

七月乍涼出、揚舟土手通、燈籠多見物、盡入大
門中、

右秋

忽聞顏見世、番付賣人聲、正是芝居好、應侵夜霧、

行

右冬

七言絕句

觀大名行列

車上屋根馬引溝、路行人爲排傍留、先供通過
鎗持出、奴穴高於檀那頭、

寄願人妨

一染年間作願人、今朝判物取錢頻、町中婦樣如
相問、道樂如來是後身、

詠東錦繪

忽自吾妻錦繪移、一枚紅摺不沾時、鳥居何敢勝
春信、男女寫成當世姿、

詠衣裳繪

摸樣難方當世裝、板元住在堺町傍、細工仕上流流
事、應著二人形傀儡坊、

詠鞘繪

二人頭似鉢匏瓜、背曲未申著物斜、笑此一枚京
土產、皆皆映鞘更相誇、

讀繪草紙二首

惡人太印太之根、石漆每爲跡式論、不是鑼燒甘

諸事、山吹色可誰中元、

見初若殿忍姬家、礮打忠臣働命涯、鯛味噌津四方

酒、一杯吞掛山寒鴉、

寄古文辭

豪飲無當元氣多、陽春白雪雜長歌、滄溟尺牘七才
子、文集初編奈少何、

寄性理學

看君這箇板天神、子曰堅成儒學身、論語不、知論語
讀、野郎頭欲作唐人、

寄古方家

醫案滅多欲寫類、七加減見樂箱新、莫言仲景
孫思邈、飛以古方劑殺人、

寄萬葉

和學先生萬葉辭、一爲弟子命新奇、歌人莫道知
名所、鍛冶屋居炊飯時、

寐惚先生文集初編卷之二

文

序

鬼手柄序

曰若稽昔昔曰老父老婆山於菟川於瀧至古
狸餐團粉噉老婆則有狸與鬼事詳亦本可
以徵焉狸分狸分何以腹鼓其爲責鬼乎鬼分
鬼兮何見而翔其爲走波瀾士舟乎若夫老父
於山老婆於川皆人之御存也子供衆三子魂
送百一旦墮落子惡則難天上于善營諸覆油
一升而次郎殿犬與太郎殿犬皆越而仕舞也
狸至燒背鑽燧山覆舟泥之海雖欲不餐粉團
不噉老婆其可得乎故欲一期榮則善乎善者
也序授之乳母

毛唐 陳喬翰子角 著
阿房 安本丹親玉 輯
蒙麓 藤偏木安傑 校

送桃太郎序

桃太郎將征鬼島取寶也、猿狗雉從焉余代其
父母贈言曰汝父汝母一自爲茶飲友達父
山母瀧川時有自川上桃之流來也母取而食
以其半分付指于父偶憶出少時吸付煙草而
震震然若有感乃嫩乃身生汝於山之下川之
上汝生未取揚飛翔有力一如金平出生時也
今歲有鬼島之行雖曰愛子爲旅乎而靡日不
案也夫鬼島險此山虛言八百里若其兵糧則
有日本一之黍團子豈啻甘諸鑼燒也汝以其
一與之猿狗雉大加勢所謂金棒於鬼也吾聞
鬼島有打出小槌及延命靈汝合力於猿狗雉
驅鬼首於西海則鬼外福內可長鼻下而待也
行矣桃太郎勉旃猿狗雉桃太郎欠伸乃起曰
諾遂行

無盡會稿序

有花有實造物者之無盡藏而多金多錢賴母

子之初會日也故借茶屋則引一文目之茶代
嫌遲參則除八時過之座圍觀元不潰無盡將
滿廻園座敷餘物有福張欲心中咒符不効若
夫至酒終膳取人寄圍開或疑第邪拾邪又問
偶乎奇乎自安開之大聲可為摩枯無盡師無
盡場之小言似諷下手義太夫當者進否者退
寺有取退社有富突雖物名因其處至欲氣無
微塵一間耳本圖否而欲心盛先鋒盡而咒符
起或懷持佛之飯粒又握鱗頭之信心半口不
當雙程不聽然當圖雖有跡懸之苦勞讓入亦
有禮金之取德云

記

貧貧堂記

此堂無北若牛既然中有千里一走之名馬故
以貧貧堂名焉不負養取之桶不乘伯樂之袴
畏明神之神馬笑殿樣之御馬堂名貧貧何有
常州之盜馬虜身自樂樂忘扶江戶之生馬眼

夫駒勇則花散福來則人死遺豆打太鼓渡河
爭先陣不如止千里之足何用借一鞍之胸雖
然龍馬角成而名春駒夢見而善為土百姓則
拾馬矢為新吾左則嚼馬尻騎馬芋刷坊主
辨慶也借馬智勘略奉行管仲也此堂亭主何
處駿骨飲馬乎食酒乎抑馬頭觀音之出現與
將馬養先生之弟子與是為記

癡惚先生傳

先生毛唐人也其先邯鄲魯生忘想為王苗裔
而為毛唐人實正也故號癡惚昔昔玄宗皇帝
拔現楊貴妃而天下為筋夢中矣歎曰為夢為
夢於是乘白河夜舟而反側此野馬臺也爾來
看京夢大阪夢久矣至先生始居眠花之御江
戶先生母夢忘想乃有身先生朝寐房而宵迷
也未嘗有臥於子起於寅焉當其寐惚則善唐
人之寐言殊愛莊子夢為蝶蝶而止于菘菜且

欲食大飯而臥為牛也若夫一富士二鷹三那
子皆人所以藉資船看初夢也然先生不欲夢
之先生之夢也唯忘想與二重夢耳
贊曰寐不待果報寤則食梁飯食而獲寐而與
唐人寐言陳齋翰翰先生寐惚乎夢乎現乎幻
乎

銘

壺皿銘

壺皿維覆其筒未潰偶邪奇邪決二勝負者采邪

無問鐘銘

無問之鐘撞而不休此三兩彼五兩應三百兩之求
地獄釜猶可發也借金淵不可浮也

贊

一枚繪瀨川菊之丞贊

曰是男其名與彼物曰是女其顏與形貌紋
結縉戴紫帽子為男為女者誰瀨川菊字路考
之字當削論

水懸論

癡惚先生文集

天道不殺人有懷手而食者不是錢持金持而
真似則為痴氣持必矣譬諸似鶴鳥其餘雖果
報寤持三年守星乎柚葉之落而煎豆之花也
然則一生何為食住曰士曰農曰工曰商舍此
四者或為永浪人又為不持與器乞食別有
以一藝食者僧神道者姑舍不為儒者為醫者
不為手習師匠為繪師不為詩人為歌讀立花
連誹鞠楊弓三線茶湯之消閑劍術柔術弓馬
軍學之張武齊是口過而鼻下建立也相互張
氣以為職敵則猶養人之味嚼而味嚼吾之養
也養味嚼一而始知吾養之臭已雖然儒之敵
僧游藝之笑武藝猶可也今則儒而惡儒僧而
惡僧以游藝惡游藝以武藝惡武藝何其流流
之分而為一大同土軍也僧有念佛法華神有
唯兩部儒有朱子徂徠醫有道三張仲景手習
有長雄唐樣繪有和繪唐畫詩有唐明宋元歌
有近體萬葉立花連誹劍術柔術以下雖有諸

流未遑論之神佛於唯一兩部念佛法華不復論之畏其罪之當而吾口之曲也夫儒之爲朱子學者面如師嚙火鉢體如金甲縛以三綱五常之繩嘗以格物致知之糟與手之許則則便結糞而爲生聖人也爲徂徠派者譬如金魚體如棒鱈以陽春白雪爲鼻歌以酒樽妓女雜會讀呼足下答不佞其果欲出文集而比肩享保先生之列也其外伊藤王陽明今不行則不論醫之爲道三者以文旨擬功者何云角云衆方規矩其驗之見如滅薄紙爲張仲景者自稱古方家傷寒論千金方其瀉之急如一谷倒下手習之爲長雄其於大橋抑尊圓御家之糟食而須藤寺澤之陪臣也爲唐樣者以不讀爲貴廣澤烏石之雲孫而羲之徵明之蚯蚓也唐詩選外不能書之繪之爲和繪止於某信筆爲唐畫止於何山人寫意詩爲唐明徂徠派之仕出而爲宋元朱子學之語錄也歌之爲近體如誹諧

然爲萬葉近於沈紛閑名如鎌太理猿田彦而一風流者也其餘游藝武藝未遑論之故曰相互張氣以爲職敵則猶糞人之味嚼而味嚼吾之糞也糞有瀉糞結糞味嚼有白味嚼赤味嚼齊是糞與味嚼而種類之分也糞味嚼一而始知吾糞之臭已足是之曰水懸論

書牘

與長松絕交書

嘗塗工殿前有裏壁未返土余引具於手習傍輩登此上以爲山主余一人汝連麴屋糞子來而衝惡態也余復喧嘩即告之師匠樣而上汝几之上也汝猶徒未已每見余握合如汝樂師嫌物也而今而後雖有鬼戲草履隱隱房之諸會乎余固不入從矣況手習傍輩皆余從則汝爲女中豆煎可也當其時喧嘩負女所謂七陰糞乎斷親絕交不敢指切以上長松足下金太

郎白

跋
武士爲浪人身手被編笠路頭立其謠小謠亦復爾々獨奈近來文集初篇率屬浪人不知何物乞兒持食吳器飯取籠勝負殆不可辨矣今覽此集錢取幾盡頓復常談三文宛然在人面桶豈不餘計乎非人曾謂不吳者錢想當百文錢爲一錢道

物茂らい題

寐惚先生文集卷之二終

賣餉土平傳

序

古歌云朝寢淡兮早寢且晝寢兮時與臨睡
 兮我友有陳子者一年三百六十日三百五
 十九日寢一日不寢其面有愀焉人因號寢
 子其嚙語成篇既行于世嘗夢化鶴毛而飛欲
 徘徊于漢土至舳羅洋為大風所漂空歸日本
 爾後自號舳羅山人蓋有牙者無角有才者無
 錢軍者假儒者寒敎化子報謝米大星之金言
 也一夕熟寢嚙語與舳羅更奏徐聽之乃土平
 與阿仙事也勃然與自歎曰嗚呼世惟重食與
 色而不知有重於食與色者矣於是作之傳以
 玩世屬余為之序

明和己丑夏四月

風來山人題紙於堂

題賣餉土平傳首

南京木綿十三端南蠻木綿三端半裁為華人
 裝賣餉於市中者誰也三官餉姑舍互換子後
 有若士平笠森阿仙稱絕世佳人傳誦並行于
 江都中矣余既見土平又見阿仙信名不虛立
 錯難為之傳亦是贅言言官弄翰痲疾爾

明和己丑之春

舳羅山人書

舟乘 浮子 舳羅洋

賣餉土平傳

土平與州人也頭戴帽口唱歌賣餉東都市
 阜比外套疑鬼之帽鼻紅縐紗蓋似祭之器固
 紋畫鬼首柁骨衣書土平土平偶有買餉者
 則新歌一曲節以土平土平故其為土平最著
 雖五尺童子莫不口于其歌也東面而賣西街
 怨南面而賣北巷怨曰奚為後我一年三百六
 十日日日過八百八坊五步一樓市肺港酒格
 之池十步一店餅糕積飯桶之山天樂遠聽
 格子歌三絃也雷霆乍驚道傍大八車銀杏本
 田卷外套比肩金縷路考帶共長袖搖櫂木
 理染如春水流青紙蓋寫夏木立蹴紅裏未
 秋何楓下雙白衣不冬何雪高祖巾掩鼻而過
 與作巾鉤髻以行卷小菊懸階梯提煙袋權
 銀裝一枚畫廢而東錦畫與目利安行而義大
 夫微妓伴樂師趣筵席俠謳太平入酒家



贊曰
 笠森ノ神女鑑家ノ阿仙
 俾メ人ヲ白日ニ登有頂天

賣餉土平傳

插花古流分會日之符投盡家法擬楊弓之矢
 飛圓團景勝呼名代早染草招牌稱本家本家
 當四錢手巾古于奴僕之腰萬歲謳歌落於俚
 歌之手書家學長雄流詩人諸唐詩選萬葉
 家詞人古方家療治或分本草種類或醫尋常
 眼鼻所以番禺瓜為陰瓜所以馬矢為淡黑色
 和尙嫖遊之時宜以暗夜子曰儒學之身易迷
 色道場坊雜劇離時不行吉原經營不日成之
 飲兮歌兮直往徑歸墨水之流酌而不竭飛鳥
 之花眺而不斷千秋樂則撫民萬歲樂則延命
 時之賀也猶新松枝榮而葉繁也土平既賦二
 詩其一曰

五日雨降十日風、悠悠緩緩樂何窮、若非松竹
 蓬萊上、定是瑤瑤世界中、

其二曰

鬼首之章猛虎裘、途途高唱與州謳、寄言巷
 內兒童子、俯自土平是一流、

日永忘歸日暮鄉、遊山盡醉假山傍、鉞鏑大橋誰家
 女、視袴裳袋何處郎、

其四曰

獨對茶爐思不禁、無端搔首采銀簪、往來若
 要踞牀息、須倚笠森一樹陰、

土平聞終三嘆曰、親無乎美人笑曰、子非瀕海令君
 乎、色黑如為三潮風之所吹也、何故到此、土平曰、人
 而不戀君者、貓乎鼠乎將蒼稻魂乎、即歌土平曲一
 闕

說得土平一難道生、土平少時好色的人、
 古云一樹之陰一河之流、皆是他生之緣也、願
 聞芳名、永以為好、美人曰、妾笠森神女也、名阿
 仙、朝煎和茶、暮圍米粉、朝暮夕暮夕、屋之下、久
 留此土、以交人間、故名雖逸于列仙、傳像不朽
 於東錦畫、春信之筆、俚歌之曲、傳誦莫隱于四
 方、苟有目有口者、莫不曰阿仙阿仙也、君則何
 如人、土平曰、言則愚乎、吾先與州仙臺人也、嘗

時既暮春日長風暖、偶過日暮里、遙望笠森華
 表、奪夕陽之朱、團地後米粉之素、春風吹衣、花
 落薄暮、鏡詞無人、聲斷、錢篋俄而一朶紫
 雲下、見美人天上、落座茶店中、年可十六七、髮
 如絳絲、顏如瓜、翠黛朱唇、長楸低履、雅素之
 色、嫌汚脂粉、美目之流、兩往來、將去難去、閑
 供托子之茶、欲解不解、寬結博多之帶、腰之細
 也、壓楚王宮樣、衣之著也、疑小町立姿、十目所
 視、十手所指、一顧、駐人足、再顧、閃人腰、望之儼
 然、如倒懸、硝子實神仙中人也、漸聞朗吟四詩、

其一曰

携來提合描金光、盡道看花日暮鄉、是處人間天
 上界、五衰三熱總相忘、

其二曰

解色映漆檜、披三線音高、調子一週、已識谷陰
 投、土器、復看隨道作、芽茨、

其三曰

有大橋經營時、捕鼠一箇、刺頂梳髮、令之賣、
 糝、豈謂隣家之貓、并盆食之、於是自誓曰、不
 令再賣糝矣、今也為華人裝賣、餽東都市、開
 口一歌、嬰兒立舞、莫不曰土平土平也、昔在仙
 臺、為仙人、今在東都、為賣餽人、則一代名、則未
 代、君以圓團、我以餽、兒傳誦、並行不亦奇乎、請
 君賦圓團、我賦餽、阿仙曰、唯唯、

圓團賦

笠森阿仙

圓團維幾、其數斯五、貫以竹串之、青圓團
 以米粉之素、或味嚼、又醬油伴、田樂之豆
 腐、春稱自花、圓團、秋並賞、月魁、芋、當蒲草
 圓團、添夏景、雪花、菜、圓團、有冬趣、若夫釋
 教、有彼岸、圓團之名、神祇、稱祭、窳圓團之
 數、吾家、圓團、婉孌之媒、送靈、圓團、無常之
 具、景勝子之過、大道、分、飛、圓團、之、杵、勤、農
 業、桃太郎之征、鬼島、分、日本一之、黍、權、威
 武、赤、圓團、名、矣、千、圓團、穿、縷、名、物、十、圓團

見于道中雙陸圍圍五引串殘詳乎塵劫
 記語夫笠森之陰稻荷之宇賽願用米粉
 香願供泥塑泥塑結而不白米粉精而不
 粗茶店休息日暮歸路于茶于圓團莫不
 戶賣人沽也

餉賦

奧州土平

惟餉之性克柔克剛柔不粘齒剛為調腸
 或裹笱子之皮又容半紙之囊稻荷前之
 地黃煎川口屋之三官糖寶引早來子煙
 管互換郎得喉頭餉之位以貴添糖惹惹
 之翼而翔鳴呼糖坊之多餉兒之昌由水
 餉之就下似綠餉之益班于祠地內子開
 帳場涼傘斯開店舖斯張呼土產須買言
 作糖之良故盡美則曰太白練語大則稱
 三間梁夫土平之餉華人之裝隨傳誦以
 長賣卸兩荷而浩倡江都中之兒童莫不
 買我餉而嘗也

各誇其技遂去不復與言

此莖也予十三年前所書也、傍附朱墨者風來山人所
 刪定也、嗚呼土平餉棒已為天平棒一反上、阿仙茶釜
 飛化藥籠而去、予嘗賦三元日篇云、今日為姑昨日
 婦、憶昔一休御用心、不其然乎、

天明改元年辛丑十月朔

陳喬翰題



賣餉土平傳

附錄 阿山阿藤優劣辨並序

予作土平阿仙傳將止贅言也、有客自淺
 草來、曰蓋言銀杏阿藤容貌傳誦何必出
 阿仙之下哉、予委細不答作優劣辨、以應
 焉、其辭曰

銀杏稻荷問於笠森稻荷曰、蓋聞君地有阿仙
 者、孰與吾家阿藤笠森神曰、益家之女阿仙其
 字天生麗質、地物上品、不琢而潔、不容而美、不
 戴銀梳之長、不假脂粉之粧、可謂真物、示真矣
 於是江都八百八坊、芝至神田、歌佳人佳人、稱
 阿仙阿仙、衆人流津液、隨牛至善光寺、鬻子長
 鼻毛、大象能見、繁著增一椀、一錢之價、腐九年
 面壁之臂、買儻不問其價、食茶不知其味、茫然
 而張望、如阿仙之顏、有神會也、加之門前成市、
 細路塞場、雜沓蹂躪、先者相代、乎前比舍、圓團

化爲餅不言桃李自成蹊亡論錦書俚歌雙陸
 稗史肥大阿仙假名代飯田開帳作木偶皆是
 非慕阿仙乎未聞慕阿藤也銀杏神輓然而哈
 日汝長於谷中僻處雖分園植薯蕷田樂之味
 哉不知吾淺草之大也夫楊枝舖在觀音堂後
 銀杏樹下小舖連軒楊枝滿棚鳩飛啄豆魚躍
 池源水陀螺小六氣球遊山覽物貴賤上下刀
 削擊攘臂摩連袖成幕投錢成雨盈溢盈溢如
 比櫛齒然勾引衆人照比隣者阿藤也避人目
 袖巾人心今爲真愛本柳屋之名憶就菖蒲之
 歌芒吐花錐脫囊鷹羽之章畫壁銀杏之葉布
 庭二十尙不足二八頗有餘綏綏如假鬚傳粉
 如人勝象牙爲掃白銀爲簪眉黛淡掃口朱未
 乾腰支束楊枝之細衣裳惹文蛤之香雜劇寫
 趣錦畫傳世春信幾投筆文調難肖面重謠所
 謂如玉遮子者其此之謂邪若阿仙則未也二
 神答問移晷不止王子稻荷開其由颯開佛帳

日止止關八州之總司正一位之甲第王子稻
 荷大明神一番貫而論之夫容貌之美傳誦之
 論人心如面鹿馬鳥驚刺刀爲鈍研槌爲利猶
 新五左誇國風放展儒慕唐山也且夫天地之
 間物不孤立男女貴賤神儒佛老子花于楓于
 餅于酒不偏不倚老父孫之中庸而舉一廢百
 伴當君之失計也柔克制剛損而見益好名多
 飾好利多怨慳人雖似乞丐魂窮鬼亦宿正直
 首鑿空則當世之俗例質素則痴呆之隱名上
 而高慢者爲自負下而輕薄者爲假子生其中
 間者爲兩可飲而典衣者爲遊棍遊而擲金者
 爲嫖客陷其一穴者爲花子千變萬化臨機應
 變道大橫裂人誰通從嵩山房梓之黃表多於
 丈阿戲作之稗史小田原議之見識滅於銀杏
 和尚之街談尺有所短寸有所長弘法說字愚
 者一得何必以飯鑿爲規短哉聖人之道一龍
 一蛇隨時之宜其道不同不因不碍不相爲謀

豈雷笠森與銀杏哉雖然淺草則繁華之地南
 通藏前北接吉原楊枝舖之美誰昔然矣笠森
 則異於是上野之後谷中之隅日暮雖瞻唯春
 夏之交耳然傳誦走千里容貌名一時吾雖非
 阿好容貌傳誦皆可進一等矣且先輩也美也
 雄也阿藤爲雌可知已是優劣之辨也言終神
 則去二神唯而退

讀土平阿仙傳戲作歌贈船羅山人
 君不見賣餉土平唱歌來圓街衢總徘徊又
 不見阿仙阿藤鬪繁華一賣圓團一挑牙或指
 笠森尋鉢氏或分淺草攀柳家雅素白於圓團
 粉憐君手汲大和茶腰支細於剔牙枝憐君顏
 映酒中花傳誦傳誦此一時借問此傳作者誰
 船羅山人字破學學文束閣日何之春去夏來
 錢未盡花飛蝶驚人不知朝遊飛鳥暮日暮上
 野之山淺草遙看盡遊山覽物歸來開口如
 豆藏古今筆力拔山手新刻招牌揭下坊辨舌
 如瀑且如電文章非和又非唐同氣相求讀之
 坐飄飄疑泛船羅洋

友人 陸道人題

此本文三十六年已前予所書也阿仙阿藤辨
 者伊庭竹坡所書也今將之崎陽見之品川三
 間樓中不亦奇乎
 文化紀元甲子孟秋廿五日

南 畝 書

優劣辨終

檀那山人藝舍集

序

此書余三十餘歲時所作狂詩也池端迂平集而刻之以爲一冊請余題其書因題此名自號新寧武子蓋其迂則不可及之意也迂平之迂入六道之捷徑而不返未知其板散落誰手也星運循環無物不還今茲星運堂主人捐一本來使予補磨滅書中姓字半爲鬼錄桑田碧海流行亦後矣嗚呼昔之藝舍爲今之老婆山人山人飲酒之舌猶存乎否因題一絕

三十餘年不忍池迂平筆跡刻狂詩即今物
換星將運花屋久傳櫻樹枝

乙亥春日

蜀山人

藝舍集序

是歲三月之望步自梅若將過于向島酒客從予至權三之亭春風徐來桃李盡開櫻草在地仰見朧月躡而轉地回如藥研堀而得三味線箱開而見之有薄物書其書竹簡非文字方之文字也富本乎常盤津乎將園八乎抑鶴賀新寧武士乎携而登舟偶有孤鶴橫江南來翅如銀杏爰然長鳴掠予猪牙而北也須臾客睡予亦被蒲團夢一藝者振袖翩躚過首尾松之下揖予而言曰向島之遊樂乎問其名茶而不答嗚呼噫嘻我知之矣嗚呼昔日待之夜檀那樣方藝者衆多之中此樣者非子也耶者顧而笑予亦驚悟寐惚視之不見其處

天明四甲辰春三月

四方山人

檀那山人藝舍集卷之一

毛唐新寧武子著 門人

吳發明輯
李知儀校

五言律

梅

古來云此枝能似武夫姿筑紫天神詠與州宗任詞
龍橫萬飾臥牛向杉田遲綠日運何處藥師兩大師

櫻

大唐空吉野日本有花王枝掛龍頭重春牽虎
尾長入相鐘未響飛鳥酒無量生醉謠山寺隨
風散四方

松

名高大夫位花發十廻春宜避卯時雨更思子日
辰泥坊眠物見懸淚愛磯馴自有常盤色門前歲一
新

品川潮干

元船何處遠此日近如汀平地千口底高繩十八町
湖干牡蠣白杭亂海苔青向晚還新宿遙看九曜星

七言律

干菓子

檀那山人藝舍集

仙家菓子一盞春

漸入三口中佳境新水似砂糖將
解處月如三體首欲臘辰漸看薄雪含霜柱更愛
梅花發小輪落雁歸飛泉水綠松風吹香滿洲濱

過萬西太郎

鳥居半出大川端遙指三圍稻荷壇蘆葉刈來盛洗鯉
蒲燒食盡割長鰻萬西號掛太郎鼻晉子句翻百姓
肝向晚船頭呼不起屋根舟內只聞餅

深川詞

土橋橋下仲町通大鳥居高永代東俠客浴衣親和染
女房櫛卷本多風豫知一日山開處正是二軒金落中
三十三間堂未建儼然弓矢八幡宮

送富本齋宮丈陪豐前太夫之肥前

肥前舊是操人形何事齋宮向此亭日日彈連三味線
時時來往二丁町大夫床脇見墨黑最良連中引幕青
豐竹變爲豐後地知君高慢不堪聽

讀演史昔八丈

衣裳八丈緋爲襦白木屋娘字阿駒見物股間立材
木座元勝閑響茶壺片言聞得才三樣一曲旨哉筆太
夫不伴頭首筋下何人五體不相滿

西行忌

二月正當二月天。西行忌日此開筵。鎌倉贈棒。白銀露。富士詠餘。陶物煙。夕暮秋寒看。鶴立。往生春至對。花眠。唯留。風呂鋪兼。等。尊像儼然數百年。

和。愛宕山人韻。櫻川流水不知源。愛宕山人杉木根。高慢天狗應。汝輩。虛言築地愧。吾論。老莊閉口將。歸服。李杜憤。肝已出。奔。向。晚遙看。海邊島。布帆自似。越中樞。

神田祭禮見美人。齒白唇紅銀出香。金屏映出棧敷傍。毛留帶結。細腰。麗。八丈名隨。振袖。長。燈籠。斜斜。蟬重。羽。牡丹。簪。動蝶。將。狂。誰家姊妹。二尤美。可。美本町絲屋娘。

麴町藥湯觀。山王祭禮。六月炎天日轉長。隔年祭禮奉。山王。麴町。井戶酒如湧。升屋店先人可。量。萬度親分何處俠。三。絃引手數多娘。君家今夕御馳走。自似。悠悠。入。樂湯。

神田祭禮彩棚即事。憶得桂川於半風。當年長右已爲空。綠楊振袖。翠茶綠。下著衣紋鹿子紅。五尺解來身體裏。細腰割籠棧敷中。蘭花又發。裾模樣。應。與。山蜂。吸。露。同。郭中冬至

連子窓梅北面鄉。當。筵。忽。發。紙。花。香。口。輕。太。鼓。三。拳。勝。尻。重。於。針。一。線。長。昨。夜。雨。沾。天。水。桶。大。門。朝。聚。願。人。房。郭中居續逢。冬至。暖氣氤氳似。入湯。

記。辛丑。顏見世。花顏見世四天王。宿直。着。綿。路。考。娘。秀。鶴。三。升。互。讓。坐。吉。治。萬。菊。共。疑。粧。中。村。里。近。門。之。助。尾。上。松。高。宗。十。郎。乙。女。姿。隨。晚。風。去。坂。東。一。藝。滿。金。箱。

右中村座。雪飛芳野吹。迎春。二。蓋。笠。簑。何。處。民。獨。古。遙。鳴。谷。十。町。中。車。引。出。坂。三。津。山。科。無。恙。四。郎。拾。尾。上。兼。看。一。兩。人。木。挽。市。紅。初。日。曉。夜。風。聲。入。此。松。新。

右森田座。送風神。引道此風號。谷風。關。關。疲。吹。響。西。東。惡。寒。發。熱。人。無。色。煎。樣。如。常。數。有。功。一。片。生。姜。和。酒。飲。半。丁。豆。腐。入。湯。空。送。君。四。里。四。方。外。千。壽。品。川。間。屋。中。

五言絕句。自讚。能書不擇筆。日日戲言出。若使。藝。扶。身。天。晴。男。一。匹。

書題

何處御年玉。新開扇子箱。下敷。長。熨。斗。上。放。寶。珠。光。可。憐。出。替。淚。小。葱。盈。一。把。再。再。奉。公。間。誰。是。重。年。者。

梅松日出圖。梅如。加。賀。紋。松。似。仙。臺。鎗。應。是。登。城。節。晴。天。日。出。光。中。芝。居。詠。詠。幕。竹。虎。是。所。贈。竹。本。住。太。夫。也。

虎栖。三。千。里。蕺。人。暮。石。町。君。殷。勤。竹。林。幕。更。得。幾。回。開。春。日。宴。品。川。繩。口。氏。已。見。桑。名。始。又。嘗。寧。樂。筋。品。川。春。日。興。總。與。道。中。長。

訪。醫。者。不。遇。窺。下。問。僮。僕。巨。那。盛。樂。去。但。在。此。藩。中。門。多。不。知。處。

賀。東。作。入。道。白。髮。三。千。丈。如。絲。長。且。繁。不。知。明。鏡。裏。何。處。大。入。道。阿。德。背。面。鏡。鐵。圖。贊。黑。髮。三。千。丈。如。絲。長。且。繁。不。知。明。鏡。裏。何。處。釣。河。豚。

風如。半。開。扇。月。似。食。懸。餅。忽。有。一。星。出。美。看。長。者。情。病。積。

朝鮮弘慶子。積也。痞。奇。哉。欲。賴。唐。傘。陰。門。前。不。久。來。寒。山。贊。大。寒。兮。小。寒。小。僧。出。山。否。欲。啼。却。克。哈。恐。是。寒。山。子。

題。柳。下。蝙蝠。圖。欲。尋。無。鳥。島。蝙蝠。滅。多。飛。應。取。山。椒。食。柳。陰。清。水。微。顏。見。世。積。物。積。如。山。挑。灯。挑。至。曉。矢。倉。太。鼓。聲。金。落。知。多。少。

檀那山人藝舍集卷之二

毛頭新寧武士著 門人

吳發明輯
李知儀校

七言絕句

叙麓八景

鶴吉晴嵐

山下行人北又南。暫看鶴吉與將酣。豆兼德利一錢如。雨。颯颯散爲比叙嵐。

茶舖夕照

留客茶釜煮自長。一盃汲出煮花香。夕陽斜下草簾外。遍照近邊名代娘。

土弓浴雁

衣掛袈裟何處坊。殺娘先入土弓場。羽飛失落七間半。自似雁金不亂行。

機關歸帆

機關一視直三錢。萬里紅毛在目前。相見先方不知代。漫漫海上掛帆船。

蹴鞠秋月

秋風吹送淫哇歌。陪子攀升蹴鞠橋。名月千金人二百。暫時一刻惜今宵。

春色一年新板自茲新。

題三優人圖

團十傳九七三郎。少長爭知老戲場。舞鶴西飛不復返。才牛曳尾向何鄉。

題三輪花信齋狐變美人圖

又平筆法至今嚴。浮世風流自不凡。鬚髯相山三味線。若非於玉必於杉。

題三輪花信齋狐變美人圖

風吹三葛葉。信田邊。尾曳金毛玉藻前。狐狸穴中應計日。人間世上莫經年。

送三竹本住太夫還浪華

幼少時祈住吉松。壯年名譽石町鐘。今宵忽作三重別。調子從茲不易逢。

詠松

颯颯高砂住吉風。悠悠謠曲阿蘇宮。千年不改常盤色。若葉依然十八公。

中山君令郎出扇請狂詩云稚子所解語爲詩

余走筆詠源攝州近臣以與焉
金時末竹渡邊綱。確井定光事賴光。更有保昌獨武者。一人不讓四天王。

佛店晚鐘

煮有賣切札空明。客去二階手不鳴。忽有晚鐘聞佛店。誰家親父看經聲。

餅屋暮雪

下戶建倉白壁扉。比肩酒屋夕陽輝。寒餅引切一文取。如雪總隨新粉飛。

溝店夜雨

泥水推流溝店隈。夜中風雨路難開。懸聲忽昇肩輿去。兩掛獨沾蒼髮來。

七月二十六夜過小松軒遇雨

飯田町上小松軒。新話枝葉亦繁。風雨開雲廿六夜。不知何處拜三尊。

題三鯨吹潮圖

背若小山巖若林。獵師目覷立相尋。今朝見屈吹潮處。七里繁昌第一森。

乞食橋有遺書

乞兒橋上一通文。拾得挑灯名自分。不三仲問還舊路。恐令返事若探雲。

初冬過書肆富田屋

富田潤屋德持身。廓廣體胖養老親。櫻木更舍小

題三阿福女圖

美女不如此惡女情。莫嫌三滿與三平。阿龜阿德阿多福。盡是息災延命名。

題三節季候圖

每年每歲且那庭。飛來飛去八百町。節季紛紛師走日。誰家丁稚最先聽。

題三鎗持食三夜鷹蕎麥圖

十字街頭十字鎗。斜蒙三手拭立彷徨。北風不滅行燈火。吹送夜鷹蕎麥香。

題三畫栗

盤中此栗種何邊。桃栗三年柿八年。如是丹波爺打栗。曾參亦復返車旋。

小野氏宅觀戲場番付山田氏春日部在座

山田生醉似由良。春日部情類寺岡。忽見門前番附賣。假名手本忠臣藏。

題三白壁畫

渡邊源五有功名。片腕誰憑茨木情。鬼目亦應含淚雨。羅城門外黑雲生。

右茨木童子失腕涕泣圖

一曲三絃大薩摩。二人勇力孰尤多。汝曾我五郎時致。

吾是小林朝比那。

右草摺引

僧藏月下裏門邊。親父橋東多少年。二座芝居崩欲散。挑灯紋所照簾前。

右芳町少年

背面美人贊

東岸柳腰西岸色。南枝雪貌北枝春。美人外面何苦院。尻食觀音是化身。

題文武火茶釜圖

文福元來文武火。誤言文福化茶釜。請看一日爐開會。自有陰囊八疊鋪。

題高松朱買臣畫

鈍子一丁一把薪。傍開一卷更無人。知君能覆盆中水。墨畫書成朱買臣。

上總念佛圖

上總還傳下國名。木綿無丈客無情。但因佛法東漸。驗男女能為六字聲。

鹿嶋禰宜圖

常州鹿島大明神。神託正因事觸新。躍罷賽錢皆自取。撥當太鼓不當人。

傀儡師圖

西宮名代傀儡師。一曲機關驅小兒。廻向院前慎莫過。大人亦被山猫欺。

題柏庭外郎賣圖

天下市川海老藏。三升紋所耀衣裳。至今辯舌如流水。學得外郎透頂香。

題路考錦考髮梳圖

瀨川白菊疑波寄。松本紅顏似錦茵。胸露口梳楊柳髮。恨消淚洗鏡臺塵。

題盲人圖

投頭巾與袴腰斜。曳杖行行不食蛇。借問盲人何處去。物前遙指借錢家。

大黑贊

甲子奉祈大黑天。家家以棰掃庭前。主人莫設沾神酒。延命囊中自有錢。

友人福引得松茸枕畫

松茸元生稻荷山。化為大物託人間。縱令清少納言在。不許一番逢坂關。

蛭子贊

開道西宮蛭子神。掛鯛釣得大江濱。濱燒不及潮煎。

味吸物鹽梅打舌新。

瀨川仇浪得戲字

桂川瀨川松本翠。島樣紺樣中乘戲。共稱路考大明神。自大神宮多最員。

達摩彈琵琶贊

座禪觀法九年間。一面琵琶向壁閑。是此蟬丸逢坂外。往來別有無門關。

笠森懷古

笠森稻荷大明神。茶屋阿仙稱美人。土器碎為土團子。只今惟有煮花新。

第六天祭禮

開道當年第六天。神輿練物度藏前。豈思富札出番付。今日翻為御祭傳。

暑中作

夜責蚤蚊盡糞蠅。更無夕立雨雲升。還疑風呂尤深處。無正添薪燒且蒸。

暮秋

八百雁飛未作竿。三文漬菜入籠寒。獨敲車骨一風鈴下。秋葉紅於痔穴端。

題陶淵明圖

菊露淵明御息災。田園曳杖幾回廻。古文直寶傾頭見。歸去來辭最出來。

夏菊得支韻

芳澤清流岩井涯。菖蒲杜若共羞姿。誰知五月下旬比。已有瀨川白菊枝。

觀花火得先韻

趙氏連城玉屋船。由來花火滿前川。只今惟在中洲上。會照納涼兩國邊。

市川三升助六

真成揚卷為君勞。親玉藝評助六高。二百蒸籠榨廿五。割雞何用新場刀。

壬寅中村座秋狂言

高雄紅葉美人顏。伊達風流不破關。別有三升三本傘。札錢如雨入如山。

土山氏曲水同管江賦

上巳風流御祝儀。土山池上共題詩。二人姿似紙雛貌。疑到加田粟島涯。

食厨喰日

三月四日望汰臺。少年多興迎客盃。人情共願醉中句。乞何卒自三午時一來。

至_二升亭_一
四日遠方求_二赤良_一。今春三度會_二高堂_一。獨憐京國人難
義。不似_二鴻池水_一。長。

祝阿彌陀。唐詩選七絕第一章見
贈字。第二卷。以代和韻。

戲場四時歌

儀式三番已渡_レ翁。狂言作者各爭_レ工。年年歲歲為_二會
我_一。歲歲年年役不_レ同。

右春

時今五月下旬過。十八年來風雨多。貧乏不_レ知會我祭。
俄為_二分限_一。意如何。

右夏

信田葛葉別_レ兒還。又見稻妻不破關。桂木秋高三本傘。
天邊何處狂言山。

右秋

一陽來復座元春。最負連中打_レ手頻。裝束如花顏見世。
誰憐跡足馬蹄塵。

右冬

送_二鈴木生之_一三河

三河杜若八_レ橋端。五月旅衣肌不_レ寒。若入_二村中_一逢_二
萬歲_一。憑_レ君傳語御平安。

送_二三井子還_一京

三井三郎出府間。今年今月向_二京還_一。駿河町內回_レ頭
望。雪少軒端富士山。

又

君家人馬平安城。東海道中無_レ恙行。我贈_二狂詩_一。正札
附。何論上總木綿情。

河東

冬日同_二萬年君_一。文竿子祝阿彌。宴_二三百坂_一。聞_二
河東_一。一曲合_二絃歌_一。文句文竿感_二祝阿_一。賓主禮儀三百
坂。萬年歡樂此中多。

題_二面箱持圖_一

雪齋紋所面箱持。一二松間進_レ步遲。日出舞臺天氣好。
式_二番叟_一欲_レ催_二時_一。

題_二市川三升扇畫_一

福壽草開周代春。三升若水一陽新。名高自慢_二鼻江戶_一。
天地乾坤有_二此人_一。

送_二涇滄浪入_一京

涇滄浪客向_二京都_一。通者青青月代殊。勸_レ君能謂_二一杯_一。
餐_二西出_一箱根。多_二野夫_一。

二月十五日宴_二品川三間屋_一

二月_二涅槃大佛前_一。三間茶屋品川邊。安房上總看相近。
吹送春風帆掛船。

玉川呼井戶_{四谷六}

呼來井戶玉川流。普請年年不_レ暫休。水道根元從_レ此
始。分沾_二八百八町_一喉。

大晦日簡_二友人_一

證文書盡借金多。懷手無_レ由作_二鼻歌_一。今日正當大晦
日。君家仕舞近如何。

藝舍集跋

檀那山人著_二藝舍集_一。而傳_二于山下女大夫_一矣。女大夫歌
而過_二書肆前_一。曰_レ狂_レ狂_レ何德之潤。而廢者不可_レ求
行者猶可_レ賣而_レ讀。而讀而今之從_二通者妙而_一。書肆見
而作_レ矢早急彫_レ之。夫世上通人勿_レ論事。木野父薄鈍若
情無手無_レ輩雖_レ曰_レ有_二鳥之不_一鳴日。就不_レ見此集哉。
于時天明四年玉王正月突_二此集端之步_一。

七_レ八_レ山隱士

王笑之

檀那山人藝舍集大尾

二大家風雅

先生様方倍、御機嫌能恐悦之至奉、拜賀候焉愈、以御風流之御事奉、察何卒珍敷詩文集備、電覽一度種種相働今度銅脈先生寐惚先生兩親玉贈答之詩篇所方方搜索集之致、小冊名號二大家風雅候、然處丁數薄少仍之乞、求江戸諸先生之御作并銅脈先生御近作、附録之仕候誠以當時東西大關古今華角力雖番數不、多先不取敢奉、入賢覽候恐惶謹言、
寛政庚戌秋八月

平安

松梅亭主人識

序

難波流伊勢濱、京師粹、江戸大通、雖據地而異名、本是一物耳、寐惚銅脈、雖其名異、亦是同穴之狐、彼爲高入道、切之、此爲小娘子、當之、奇正變化、殆難計矣、予雖未、越鳥居、而同穴之好、露化之皮、酌一獻、而書之、

江都

問屋酒船撰

二大家風雅

西 銅脈先生

著

東 寐惚先生

遙寄寐惚先生

銅脈先生

客莫、如坊主、佛無、貴隨、求茶屋、悉受、惡借、錢積、如丘道、樂異、見重、親類、相談、催直、行其、夜短、朝飯、過未、回近、日被、追出、忽向、關東、之戲、氣盡、又盡、偶有、寐惚、知、和答銅脈先生見寄

寐惚先生

狂詩無、和者、年來、且相、求門、番留、老子、坭坊、叱孔、丘、從、知四、角字、貧乏、轉相、催文、盲多、大才、腹筋、日九、回偶、讀、太平、樂御、作又、有之、始識、我姓、名君、能御、存知、寄銅脈先生

寄銅脈先生

銅脈先生、自一流、滅方、海上、欲浮、舟唐、巴詩、映勢、多水、遣響、人偷、物澤、樓聖、護院、邊君、已聖、牛籠、門前、我如、牛更、吟小、本太、平樂、婢女、行篇、鬼濕、淋、酬寐惚殿見寄

酬寐惚殿見寄

二大家風雅

銅脈先生

皮厚、年年、馬鹿、濃酒、醒一夜、憶關、東應、生祠、古祇、園外、物澤、樓高、江戸、中習、井風、寒大、名走、下町、米貴、小心、窮地、震洪、水君、無恙、御作、數篇、幸便、通、寄銅脈先生

寄銅脈先生

寐惚先生

菊桐、秋盡、素寒、貧花、發南、餘八、片春、佐渡、金山、何處、在後、藤光、次孰、家親、波錢、九十、川難、越椎、實三、文時、未臻、近日、囊中、無小、遣頻、思銅、脈一、真人、答寐惚先生見寄、用韻

答寐惚先生見寄、用韻

銅脈先生

更笑、先生、亦病、貧治、貧樂、不見、回春、久悲、銅脈、難通、用何、故金、箱能、得親、誠恐、謹言、合力、賴實、正明、白案、文臻、酒家、近附、都相、倒乘、醉聊、交世、上人、贈看花書生

贈看花書生

尋花、雅人、共行、讀懷、中書、無幕、草爲、寧有、鑑石、作如水、交三、升酒、蠅集、片身、魚陳、奮詩、成後、一盃、食又、噓、步銅脈君東山韻

步銅脈君東山韻

寐惚先生

東山、花見、與委、細見、尊書、傾酒、一盃、可湧、茶三、足如、交

百五十一

情厚自效詩賦新於魚何日離江戶上京互說嘘
贈看花書生詩寐惚和韻因復用其韻寄
寐惚

兵交無賴世大異古人書附合狗兼去遊遊馬與如
耳聞山杜宇口食初勝魚江戶風流地猶傳八百噓
贈平安狂題分銅脈先生

道中雙六上京邊築目翩翩美景連山近鼻先青侍過水
清顏色白人鮮公家三寶荒神口猛者一祥大佛前難
聽國聲尋宿屋思應不識旅籠錢
冬夜青龍亭初謁問屋酒船坐上見寄詩即
用其韻和答

初得拜顏梶井邊舉杯坊主坐中連庭漉池水諸東
北看似人參疑朝鮮酒冷長談火鉢下僕眠勝手茶
釜前夜深門外賣蕎麥欲買囊中無一錢
奉呈太平館主人

未得尊顏脈主人狂名大譽四方頻酒船今度爲

橋掛百里狀通知御隣

答腹唐秋人用韻

山川萬里向之人立出真離呼主類主亦元來不岩
木通神數寄宛如隣
初以書狀謁銅脈先生爲目見奉隅田八
首詩

擬南郭樣墨水詞八首

楊柳橋邊柳葉飛爲猪牙船頭任腕押小菊一枚花

西岸武陵巷總州江戶裡二文乘合舟掠見樓船妓

花川開縹緲岸上積材薪舉首蒲團裏已過會處

歡喜龍山廟下觀織殿亭一花雖賣酒割水暫時醒

大堤春水滿作道夜無愁相送堀船宿挑燈引客幽

右金龍山
右日本堤

銅脈先生

腹唐秋人

阿兒何處去命日彌生望荷篋古風女今時無物狂

右梅兒家

停棹春遊子大郎禪寺前木魚朝晚事和尚美三絃

右牛頭山

此處王孫遊女郎來北州業平今不見只有色男流

右在五祠

奉復大酒德望太平館主人銅脈先生素足下

寐惚先生

暮春十日書卯月五日屆委細拜見處益々御風流此方

無別條馬鹿日相求八百八町會四里四方遊朝窺

町幕夕上吉原樓恨不得先生無禮作講頭傳

言宜傳達秋人與酒舟

奉寄業寂僧都

聞君曾住北山傍業寂僧都名不忘豪氣全凌花和尚滑

稽何讓武藏坊法中衆議舌應滑醉後一拳指亦柔開道

上京將近近空尋淺草折垂楊

業寂僧都見誘看花東山醉而不能歸一睡

至曉僧都有詩次韻

春日偶被誘狗寶醉花忽作夢中人却疑身是遊

銅脈先生

鞍馬目覺能歸家內嘔

答寐惚先生見寄二首

食下徘徊幾沒川御先真暗向何邊夢中逢爾又思

飲巾着落來無一錢

又

八月衣裳流若川肌寒空望賀家邊對人只說貧士恒猶

有腰間沾酒錢

奉贈銅脈先生

不圖山人

脈也酒無飲猩猩赤脚翹看樽地藏笑對餅肉魔剛

醉去回私窩携來稱素娘君家山望鬼聞此若雷荒

箱根八里馬越遙雲助似帶繞山腰白樂天晴有私

雨青漆合羽巖肩廳

七夕作

有天比翼鵲橋懸有地竹枝短冊連織女遺機腰動

切牽牛鳴鼻當流涎

題製豆腐圖上應黎祁先生需

銅脈先生

煮豆燒伽羅下歇今尙香其味淡如水宜充君子

贈錢屋惣四郎
太平館裏太平盡錢屋親珠錢奈何板屋勘平本無板世間名目皆噓河

贈歌者阿富乞子詩
傳語頻交油吾詩所望預相談紙屑買莫作薩摩菰

遊圓山二首
酒肉雜音樂與酣夜謀還初知生作佛安養即茲山

其一
坐酣客不謀歌靜節愈濃醉枕仲房膝時聞御忌鐘

茶亭退屈得刻字
酒盡坐中丹波色客非素人一黑如墨炭流釜靜茶將

終一服國分極上刻
題圓山佐阿彌州坐敷

連山波濤裏坐敷自如舟只是船頭夥繼掉酒歌流

呈銅脈先生
實者非銅脈百文重寶連多才推大佛阿足笑飛仙氣堅囊中鐵名巡方外圓美君通用遠人嫌仙臺錢

吉原冬至
寐惚先生

連子窓梅北面鄉當筵忽發昏花香口輕太鼓三拳勝尻重於針一線長昨夜雨天沾水桶大門朝亂願人房郭中居續逢冬至暖氣氤氳似入湯

詠鯉魚

四口市邊船集汀一聲初物最先聽鎌倉夜送三千本江戶朝傳八百町骨入看鍋中落赤帶殘粗板大根青何須直段論高下一笑食差身對白丁

自讚

能書不擇筆日日卮言出若使熱扶身天晴男一匹

節分

擲豆追出鬼心靜取年怡江豚號入內此魚何祝儀

題鬼化姨偷腕圖
鬼神何橫道盜腕雲中沒回頭如郭公只見有明月

美人梳髮
三本腸長首筋毛十分添入勝山高燈籠已古佳兒髮籠甲耳搖耳不搔

白藏主圖四首
有狐綏綏在彼淇隈未見獵師喜聲喧喧
竹雀圖六首

更笑瘦藪還雅何處雀來啾啾百歲未嘗忘踊躍不爲品能留

答問屋酒船
相見銀煙管大通不辱京欲加吸口太思案雁頰傾

牛圖
引出暗狩時濛濛夜雨行此牛被賴贊思案與涎長

猿書
昔在人間時住一長家裏今回四國歸甚赤面之至

題壽老人騎鹿圖
星隕能作石又爲如是者一福祿欲傲人時時鹿爲馬

鵬書
明朝天氣好今夜擦糊長身貧畫不出何人名福郎

群僧行乞圖
鶴翼又魚鱗壓壓顏若怒群行一陣雲散作宮川雨

咏梅
上東門院樹雪解動春風香溢櫛箱外花開坪皿中槐原

插簾戰安倍咏歌工合吐天拜嶺忽然雷轟空

十夜寄閑々房

二大家風雅

一菜茶飯夜食清集錢配袋欲心明責來念佛稍將畢時聽願人宿毒聲

枕

急時灰吹三線宮雲雨巫山夢亦寒曲肘枕之吾不識此詩趣向推郡鄂

茶

一服薄茶夜咄時共衝惡態譏人奇炭流煮止竹葉暗月照鉢前客去遲

訪隱者不遇
尋來多留守居續何邊遊小便替物菜爲有隣人儉

贈替宿人
此仁會住下宮川替宿元因難澁多至極儘成橫道者

奉寄極樂主人
先生本凡夫皆言一向粹遍濟度衆生不構人稱替

訪友人山居
山中少食物一閑居不善多穿林捕宿鳥臨水撿魚

孝行糖
不須問正體只喜孝行名形似孟宗殿香齋丁子

香

三福神

嘉辰令月夜相逢^フ三福神共振^ニ文殊智^ヲ只擬^シ溜^ニ金銀^一

桶取

汲^ル水此溪女擔^リ傘何郡人相逢頻欲^ク吊採^ル氣壬生春

福神

早起事^ニ仁義^ヲ女夫莫^ク喧嘩^ス一人來飽盛^ク酒自應^テ傲^シ榮^華

二大家風雅終

めでた百首夷歌序

そもこのめでたいと申は、天竺にてもはじまらず、大唐にてもはじまらず、わが日の本の夷三郎、めでたいつりの絲より鯛このめでたいをつり上しより、めでたい事のかいみ鯛、末の代までも引出す延喜の御代のひたい箱も、ふたあけて見ぬ京ものがたり、今や四つの海波しづかにして、沖釣のめたいかゝらぬ日なく、十日の雨風さはりなくして、一升のつちくれ金一升の富にうるほへり、されば弓は袋棚の上にするけ、お太刀はさやがたの小袖にまとはれ、よろひかぶとは笑道具となり、鐵砲は樂ぐひのたねがしまとなり、酒は酒屋に、もちほもち屋に、たけき親分も大平樂をならべ、あやしの百姓萬歳樂をとなへて、まことにめでたう候ひけるとは、今この時をや申べき、かゝるめでたき御代なれば、かのもろこしの何がしが、何でもよしといひし道をふむとはなくて、よるもひるもめでたいといふ事をくちくせにして、めでた男と名た

ゝる人あり、われも又めでたい事をほり川の流のまゝによみ出せし、めでた百首のたはれ歌をめでた男にしめさんとて、覺えずひとり笑ふ門に今福といふ書林の來りて、春まつ花の櫻鯛、あまたいのあまねくつたへたい、いしのいはほともなるとほねのなみなみならぬめでたい中の、たいのあらを三つ道具のすきものとともにせんといふに、まづ手をうつておきつたい、いく千代かけしかけだいの尾、めでたいとも見玉へかし
天明三のとし三ッ朝うらゝかなる四方赤良書

立春

改年の御慶めてたく天の戸を

明ましてよい春は來にけり

子日

門松に子日の小松この比は

引つゝいてのおめてたい事

霞

めてたき日霞の衣たちそめん

暦の下段山の中段

菘

うくひすのはつねのけふの小菘は

ひとく／＼にめてたかりけり

若菜

七種の若菜にめてた／＼やと

手をうちつれてつめをこそとれ

梅

飛梅のとんためてたい事つくし

こちかせ富貴自在天神

残雪

豊年のみつき物にておめてたき

この獻上の残雪をみよ

柳

まばしとてたちとまるまにめてたいを

つり出したるいと柳かな

早蕨

早蕨のにぎりこぶしもあてられず

めてたく笑ふ山のかほには

櫻

花をめでしことばもよゝの櫻木に

いのちながきぞめでたかりける

藤花

萬代の池の龜の尾めてたけれ

長／＼しくもさがる藤波

杜若

かきつばたむかしはいせの物語

今はめてたくひらく三河記

歸雁

幸若のお禮めでたくままひつゝ

ともにこしちへかへる雁金

喚子鳥

三鳥の傳授のすみし日出たさは

おほつかなくもなきよぶこ鳥

春駒

あら玉の春のはじめの春駒は

ゆめに見てさへめてたかりけり

春雨

春雨に火の見のたいこ苦むして

人おとろかぬ御代そめでたき

苗代

なはしろのたねは一粒萬倍と

めてたくさんになりはひの道

菫

いつまでもめてたき御代にすみれ草

色よき花の江戸の紫

款冬

山吹のはなかみ袋ぬしやたれ

ひらふこかねの敷のめてたき

三月盡

荒神の松にめでたき花の香を

わけておかまもけふ拂ふなり

更衣

けふは又めてたしなみの衣かへ

あれのこれのとゑり祝ひせん

卯花

時ならぬ雪をめでたき折ふしに

何かはことをかきの卯の花

葵

いたゝいてかたにかけたるお小袖も

めてたき時に葵から草

郭公

ほとゝきすまちなまふけたるみぎりより

ひだりの耳できくそめでたき

菖蒲

日出たさはかぎりもながき町つゞき

ふく／＼しくもふくあやめ草

五月雨

五月雨のふる屋の軒のやね板も

あつきめぐみにもれぬめでたき

早苗

早苗よりひいてゝみるいきほひは

千町萬町やめで田植歌

蚕

ほたる火も弓もふくろにおさまりて

文をみきりの御代そめてたき

橘

たち花はみさへ花さへめでたさは

やはりむかしのときは木のまゝ

照射

鹿をおひともしからざる世わたりに

山をみずともめでたかりうど

蚊遣火

にきはへる民のかまとの蚊やり火は

めでたき事のためしかやの木

氷室

水無月のひむろに金をたくはへて

へらすきえずにつかふ目出たさ

蓮

はちす葉はどふやらほとけくさけれど

花の君子とききはめでたき

泉

金銀はいづみのごとくわき出て

めでたく人にくれてやり水

荒和祓

つみとかもあらにこはらへにこくと

わらひきよむるけふのめでたさ

蘭

草かうや東の門のおやしきは

花をめでたいひとのなる蘭

雁

かうがひをとりて雁々みつ口の

跡のが先へすゝむめでたさ

荳荳

千日にかるともつきぬかるかやは

めでたからかやめでたかるかや

鹿

神の威をひけらかすがのめでたさは

おしかのつゝつかまへてなし

薄

花すゝきはゝるみたてる秋の野に

めでたい事をまねくとぞみる

女郎花

をみなへし馬から落た僧正に

おげがないぞめでたかりける

立秋

黄金の桐の二葉もおめてたく

つもれば千々の秋やたつらん

霧

市をなす門のとびらを朝もよひ

きりくきりと明るめてたさ

萩

長ひつにいてめてたく御歸宅の

このおみやげをみやきの萩

萩

秋風のふき来るこそめでたけれ

萩のうは葉の敷もいく千代

七夕

おたなばためたなばたといはふらん

あまのかはらぬお出合の空

駒迎

勘定もあふ坂山にうり主の

露

草の上と思ひもよらぬめでたさは

めくみの露のこほれ幸

月

かくばかりめでたく見ゆる世の中を

うらやましくやのぞく月影

槿

よはにいね朝起しつゝ朝がほの

花を見るこそめでたかりけれ

紅葉

林間にもみちの錦おり敷て

めでたく酒をあたくむるかな

摺衣

遠國のたよりもゆかしさよ砧

めでたくかへる衣うつなり

蟲

身上もめでたき家の壁の中に

財布をついりさせとなく蟲

九月盡

けふまでにわれあきはてし貧乏の

神なし月を待ぞめでたき

菊

むかしから花にめでたい人の名は

これ御そくさいえんめいととき

初冬

ひんぼうの神無月こそめでたけれ

あらし木からしふくくとして

雪

目出たさの源左衛門はうづもれす

いでその時の鉢の木の雪

霜

顔見世のまらくあけぞめでたけれ

かしらに霜の翁わたして

時雨

世の中はまぐれのとどり宗祇でも

めでたい事のふり來れかし

埋火

うつみ火の灰の中からかきおこし

うせたる物の出るぞめでたき

神樂

神樂笛ひうやらやんらめでたいこ

うつやてんまやう大神の前

鷹狩

わけてけふめでたかり場のお物數

ありとや祝ふやかた尾の鷹

藪

冬ごもりめでたく無事にまめいりを

いれとや數のあられふるらし

網代

門出はみなひをゑらみおめでたく

駕籠のあじろにかゝりぬる哉

千鳥

鹽の山ひかぬもめでたさよ千鳥

いつもさし出のいそくとして

水鳥

水鳥のおしあはせよく鴛鴦の

衾をかはずにはのめでたさ

寒蘆

つこの國のなにはの春のちかよれば

氷

足もとのあきらけき世のめでたさは

うすき氷をふまぬ世渡り

除夜

大歳やことしはわけて去年よりも

めでたき年の暮のおままい

炭竈

くもりなき世にすみかまの夕烟

めでたくのほる位山ひと

旅戀

世はなさけ旅は道づれ出女も

おじやれといへば來るぞめでたき

遇不逢戀

あふてまたあはさる物のめでたきは

女郎のはたと道の辻風

初戀

鶴鶴の鳥のめでたき目つかひに

尾を見つけたる色の道哉

忍戀

まのびてもきつけれんつゝみおく

後朝戀

うかれめの宵の口舌もあけがたに

中なほりしてかへるめてたさ

恨

ゆく末をめでたく契る心より

かはひくのうらみもぞする

曉

よきことを思ひ出せばあかつきに

ねられぬ老もめてたかりけり

片思

相ほればかへりてあきのかた思ひ

みむまのあひそめてたかりける

不遇戀

あふことを命つなにてなからへは

うけひかぬこそめてたかりけれ

苦

公事訴證たへたる御代のめでたさや

まらすの石の苔のむすまで

初逢戀

ひろからすまたせごからす香箱の

ふたりまつくりあふそめでたき

竹

竹の子のまた竹の子の竹の子の

子の子の末もまけるめでたき

松

ちとせふるまつはめでたくいつとも

十八公のわかさかりかな

思

忍ふれと色にいづるを見のがして

物や思ふとはぬめでたき

山

山の名のふじにめでたくつきあて

三國一の富をこそとれ

鶴

千年のつるの玉子をときはなる

松の十かへりかへすめでたき

河

千年にたつた一度の黄河より

めでたくふだんすみ田川哉

橋

すご六のさいの目出たきふり出しの

やりは一本にほんばしかな

野

名にしおふおひざもとゆへむさしの

草はみながらめてたしとみん

海路

桑名から七里のわたしつゝがなく

宮へつきつゝ祝ふめでたき

關

あいた口とさゝぬ御代のめでたきを

おほめ申もはいかりの關

旅

先ぶれのいたらぬさとはなかりけり

めでたき御代の問屋宿次

別

あふものはわかるゝものときく時は

わかるゝものはあふぞめでたき

山家

商山によほくれおやちよろゝと

道ある御代に出るめでたき

田家

百姓の家の寶にすぎと鎌

くはめでたいの三つ道具かも

懷舊

老らくのめでたき今にくらぶれば

むかしは物のたらぬがちなり

無常

世の中の諸行無常をやめにして

是生滅法界のめでたき

述懷

いかにせん心のこまのすゝみつゝ

めでたい事におはれぬる身を

夢

あはめしを喰てはこしておめでたく

榮花の夢をみる五百年

祝

おめでたく又おめでたくおめでたく

かへすゝもめでたかりけり

めでた百首夷歌終

蜀山百首

春二十首

あら玉のとしのはじめの福壽草
 祿といふ字はその中にあり
 生酔の禮者をみれば大道を
 よこすぢかひにはるは來にけり
 みわたせば大橋かすむ間部河岸
 松たつふねや水のおも梶
 春がすみたちくたびれてむさし野の
 はら一ばいにのばす日のあし
 慈悲心も佛法僧も一聲の
 ほうほけきやうにまぐものぞなき
 子の日する野邊に小まつの大臣は
 いまも賢者のためしにぞひく
 まな板のこぐちにはれる青紙の
 いろも若菜におよぶものかは
 おれをみてまたうたをよみちらすかと
 梅のおもはんこともはづかし

ふみこのむ木を右にしてやり梅を
 ひだりにかざす御代ぞかしこき
 一刻を千金づくにまめあげて
 六萬兩のはるのあけぼの
 すみだ川のちのあしたも細見の
 山がたなりに歸るかりがね
 何なりとこのめはるさめふり袖の
 新造まじりあつつけの客
 青柳はめはな眉髪こうもありて
 前のなきこそうらみなりけれ
 ところくふしありてなまよみの
 甲州いとに似たる青柳
 一めんの花は碁盤の上野山
 黒門前にかゝるしら雲
 風のいるすきまもみえぬ山ざくら
 櫻が山かやまがさくらから
 さかづきもさすが女の節供とて
 ものあたりに手まづ遮る
 山吹の口なしめしやもらんとて
 おたま杓子も井出の玉川

杜若むかしはいせの物がたり

いまはめでたくひらく三河記
上からも下からもまた花とはな

夏十五首

あはせかゝみが池のふぢなみ
 春なつのもかしき中は猶さらに
 かきをせよとやさける卯花
 この神のわけいかづちぞありがたき
 あふいでも猶あふいでも猶
 ほとゝぎす鳴つる跡にあきれたる
 後徳大寺の有明の顔
 いかほどにこらへてみても郭公
 なかねばならぬむら雨の空
 鎌倉の海よりいでしはつ鯉
 みなむさしのはらにこそいれ
 早乙女の脛のくろきに仙人も
 通をうしなふ氣づかひはなま
 のぼり竹すぐなるよとは上下の
 麻の中なる蓬にぞしる
 さみだれにいたゞく空の底ぬけて

水たまらねば屋根ももる殿
人なみに戀の螢はあつめても

まりからもゆる火をいかにせん
惟光がたちながらくふ蕎麥のいろ

いよくくろし夕顔の花
撫子の后のお名にさしありて

まはしにとれる床夏のはな
いつはりのなきよなりせば本なれの

西瓜の皮に穴はあけまじ
質藏にかけし地赤の蟲ぼしは

ながれもあへぬ紅葉なりけり
去年から氣を張りつめし氷室守

こよひや心とけくとねん
こゝろだにちのわのごとくまるからは

秋二十首

くいらすととも神や守らん
 風鈴のりんとひゞきし秋かせは
 萩の上はの一文の錢
 天の川ながれわたりのもろかせぎ
 牛をひこぼしはたをおり姫

白川のお關所ならばなが櫃の

なからためてみやぎの萩

女郎花口もさがのにたつた今

僧正さんが落なさんした

花すゝきほうき千里のむさし野は

まねかすとてもたみのとまる

大空にかり／＼の聲するは

たが書だしやかけてきぬらん

秋はてばやがてもみぢの吸物と

なるともまかとまらで鳴らん

まらすこゝろたれをかうらむ朝顔は

たゆるりこんのうるほへる露

かくばかりめでたくみゆる世の中を

うらやましくやのぞく月影

分厘の雲さへはれてそろばんの

たまの三五の十五夜の月

清書もあがる二度目のつきかげは

また一段と見事なりけり

大菊をめづる狂歌ははな紙の

こぎくを折てかくもはづかし

七百の慈童もありときくの花

高野六十那智は物かは

龍田山こそ枝折は林間に

酒あたゝめてまれのもみぢば

おはしたのたつたがまりをみぢばの

うすくこく屁にさらす赤はぢ

秋のたのかりほの庵の歌がるた

手もとにありてしれぬ茸狩

歸んなんいざとて入し里の名は

たゞ落栗の音にのみきく

子をおもふ朝三暮四の猿の尻

眞赤にひとつのこす枝柿

ひとつとりふたつとりてはやいてくふ

鶉なくなる深草のさと

もみぢちる萩や薄の本舞臺

まづ今日はこれぎりの秋

冬十五首

神々の留守をあづかる月なれば

馬鹿正直に時雨ふるなり

掃除せぬ門の落葉をふみわけて

花はいはずと人やすむせん

淺草のうら白根松やぶ柑子

だい／＼とこゝろ本たはら町

今さらに何かをしまん神武より

二千年來くれてゆく年

年波の今やこえんと門／＼に

たてし師走の末の松山

戀十首

千早振神も御ぞんじない道を

いつのまにかはよく教へ鳥

聲さんおきてまつばのかんざしは

あふみおもてのうらかたぞうき

たゝみこむ胸のおもひをいひかねて

ひねりしちりや山となるらん

おさらばとそむけし顔をむき玉子

きぬ／＼絲のきるにさられず

あなうなぎいづくの山のいもとせを

さかれてのちにみをこがすとは

をやまんとすれども雨のあしきびく

又もふみこむこひのぬかるみ

こそ／＼と誰かとはまし

世の中はわれより先に用のある

人のあしあと橋の上の霜

袖の上に霜か雪かとうちはらふ

あとよりまろき冬のよの月

雪ふれば巨燧やぐらにたてこもり

うつていづべきいきほひはなし

一むれの奥女中かとみるまでに

木ごとに花のわた帽子雪

駒とめて袖うちほらふ世話もなし

坊主合羽の雪の夕暮

よし人は犬といふともふる雪に

わがあとつけていでんとぞおもふ

空と海ひつたりつきの中川の

はら／＼松にたつ千鳥かな

さん水にひよみの酉の市ながら

いもほり僧都なきにしもあらず

わけてけふめでたかり場の物數も

ありとやいはふ屋形尾の鷹

まろかねの臺にこがねの蓋の

うづみ火のまたにさはらでやはらかに
 いひよらん言の葉烟草もがな
 灰吹の青かりしよりみそめこし
 心のたけもうちはたかばや
 あはまくは瓜のはたけにねもしなん
 とりつる履のうき名たつとも
 世の中にたえて女のなかりせば
 をとこのこゝろのどけからまし

雑二十首

富士のねの表はするがうらは甲斐
 前は北面のちは西行
 すみだ川今は吾妻のみやこ鳥
 業平などは在五中將
 てる月のかいみをぬいて櫛まくら
 雪もこんく花もさけく
 全盛の君あればこそこのさとは
 花もよし原月も吉原
 千早振神代のむかし面白い
 事をはじめしわざをぎの道
 日の鼠月のうさぎのかはごろも

きて歸るべき山ざともがな
 世をすて、山に入るとも味噌油
 さけの通ひぢなくてかなはじ
 あいた口戸ざぬみよのめでたさを
 おほめ申すもはばかりの關
 文月のふみもや通ふ神無月
 うらをかへしてあそぶ赤壁
 すみよしの新田ふえてとしぐに
 あとまさりする岸の姫松
 雀どのおやどはどこかまらねども
 ちよつちよとござれさゝの相手に
 あぶかしい一葉にのれる蜘蛛をみて
 舟をつくりし無分別もの
 いたづらにすぐる月日もおもまろし
 花みてばかりくらされぬ世は
 ねてまでどくらせどさらに何事も
 なきこそ人の果報なりけれ
 世の中はさてもせはしき酒のかん
 ちろりのはかまきたりぬいだり
 よの中はいつも月夜に米のめし

さてまた申しかねのほしさよ
 念佛を申すこゝろのやさしさは
 鬼も十八だんりんの僧
 鶴九百九十九ねんめ龜九千
 九百九十九あゝ尙齒會
 千年のつるの玉子をときはなる
 まつの十かへりかへすめでたさ
 萬年とかぎれるかめも尾のながき
 友にひかれて億兆やへん
 此一帖吾家狂歌髓也其他一時漫興宜屬皮毛云々
 文化戊寅孟春 蜀山人

此木限千部
 一字以爲證

足

蜀山百首終